

館報 2011 60

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館
石橋財団 石橋美術館

館報 2011 60

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館

石橋財団 石橋美術館

館報60号(2011年度)

編集・発行

石橋財団ブリヂストン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

石橋財団石橋美術館
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

印刷
モリモト印刷株式会社

2012年3月発行

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &
Ishibashi Museum of Art No.60 (2011)

Edited and published by

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundaion
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka 839-0862, Japan

Printed by
Morimoto Printing Co., Ltd.

©2012
Bridgestone Museum of Art,
Ishibashi Museum of Art,
Ishibashi Foundation

目次 Contents

| | |
|--|-----|
| 1 設立趣旨、機構・運営 | 4 |
| Brief Histories of the Museums, Organization and Management | 5 |
| 2 展覧会 | |
| ・ブリヂストン美術館 | 6 |
| ・石橋美術館 | 29 |
| 3 教育普及 | |
| ・ブリヂストン美術館 | 60 |
| ・石橋美術館 | 65 |
| 4 入場者数 | 69 |
| 5 新収蔵作品 New Acquisitions | 70 |
| 6 新収図書 | 74 |
| 7 修復記録 | 75 |
| 8 作品貸出記録 | |
| ・ブリヂストン美術館 | 77 |
| ・石橋美術館 | 80 |
| 9 刊行物一覧 | 82 |
| 10 研究報告 | |
| ・エドゥアール・マネ《自画像》(下) 島田紀夫 | 91 |
| ・ギュスターヴ・カイユボット 《ピアノを弾く若い男》 新畑泰秀 | 99 |
| ・岡鹿之助《セーヌ河畔》、1927年のパリ風景 貝塚 健 | 109 |
| ・アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》 賀川恭子 | 117 |
| 11 美術館案内 Guide to the Museums | 122 |
| 12 石橋財団職員 | 123 |

設立趣旨

ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事を行い、ティールームを開設した。

石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、株式会社ブリヂストンの創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

機構・運営

石橋財団 (2011年12月31日現在)

| | | | | | | |
|-----|------|------|------|------|-------|---------|
| 理事長 | 石橋 寛 | | | | | |
| 理事 | 加嶋昭男 | 島田紀夫 | 西嶋大二 | 滝口勝昭 | 水戸岡鋭治 | 石橋直樹 |
| 監事 | 林 克次 | 今津幸子 | | | | |
| 評議員 | 高階秀爾 | 村上 浩 | 小林 忠 | 加瀬英明 | 小嶋英熙 | 鈴木エドワード |
| | 深堀幸男 | | | | | |

美術館運営委員会

| | | | | |
|-----|------|------|------|------|
| 委員長 | 石橋 寛 | | | |
| 委員 | 高階秀爾 | 富山秀男 | 小林 忠 | 島田紀夫 |

寄付助成委員会

| | | | | |
|-----|------|------|------|------|
| 委員長 | 村上 浩 | | | |
| 委員 | 加嶋昭男 | 島田紀夫 | 小嶋英熙 | 石橋直樹 |

常務理事 西嶋大二

事務局

事務局長 深堀幸男

ブリヂストン美術館

館長 島田紀夫

石橋美術館

館長 島田紀夫

Brief Histories of the Museums

Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the “Bridgestone Gallery”. The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the “Bridgestone Gallery” to the “Bridgestone Museum of Art”. In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan'ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro's collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

Organization and Management

Ishibashi Foundation

(As of December 31, 2011)

| | | | | |
|-------------------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------|
| President of the Board of Directors | | ISHIBASHI Hiroshi | | |
| Directors | KASHIMA Akio | SHIMADA Norio | NISHIJIMA Taiji | TAKIGUCHI Katsuaki |
| | MITOOKA Eiji | ISHIBASHI Naoki | | |
| Auditors | HAYASHI Katsuji | IMAZU Yukiko | | |
| Council Members | TAKASHINA Shuji | MURAKAMI Hiroshi | KOBAYASHI Tadashi | KASE Hideaki |
| | KOJIMA Hidehiro | SUZUKI Edward | FUKABORI Yukio | |
| | | | | |
| Executive Committee of the Museums | | | | |
| Chairman | ISHIBASHI Hiroshi | | | |
| Members | TAKASHINA Shuji | TOMIYAMA Hideo | KOBAYASHI Tadashi | SHIMADA Norio |
| | | | | |
| | | | | |
| Program Development Grant Committee | | | | |
| Chairman | MURAKAMI Hiroshi | | | |
| Members | KASHIMA Akio | SHIMADA Norio | KOJIMA Hidehiro | ISHIBASHI Naoki |
| | | | | |
| | | | | |
| Managing Director | NISHIJIMA Taiji | | | |
| | | | | |
| Administration | | | | |
| Executive Secretary | FUKABORI Yukio | | | |
| | | | | |
| Bridgestone Museum of Art | | | | |
| Director | SHIMADA Norio | | | |
| | | | | |
| Ishibashi Museum of Art | | | | |
| Director | SHIMADA Norio | | | |

なぜ、これが傑作なの？〈コレクション展示〉

会期：2011年1月4日(火)－4月16日(土)

会場：全館

主催：石橋財団プリヂストン美術館

概要：拡大コレクション展示。以下の12作品に2000字の作品解説を付ける。

マネ《自画像》、ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》、モネ《黄昏、ヴェネツィア》、セザンヌ《帽子をかぶった自画像》《サント＝ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》、マティス《縞ジャケット》、ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》、クレー《鳥》、ポロック《Number 2, 1951》、藤島武二《黒扇》、小出楢重《帽子をかぶった自画像》、岡鹿之助《雪の発電所》。

出品内容：絵画118点、彫刻34点、陶器13点 計165点

入場者総数：35,168人(1日平均395人)

展覧会ポスター

©2012 - Succession Pablo Picasso -
SPDA(JAPAN)

出品目録：

エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

階段

2. アリストイド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

彫刻ギャラリー 1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール＝アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール＝アントワヌ・ブールデル《ベネロープ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール＝アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ＝クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

彫刻ギャラリー 2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
15. オシップ・ザツキン《ボモナ（トルソ）》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
16. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / 外彫89
17. マリノ・マリーニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70
18. ペリクレ・ファッツイーニ《爽風（B）》/ 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

第3室 古代美術

19. シュメール 《女の胸像》 / 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ 《人物像》 / 1-2世紀 / 石灰石 / 外彫94
21. エジプト 《セクメト神像》 / 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片 《柘榴と葡萄図》 / アマルナ時代(紀元前1360年頃) / 石灰石 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片 《アヌビス神札拝図》 / 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片 《神牛》 / 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト 《彩色木棺》 / 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト 《ホルス神浮彫》 / 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト 《聖猫》 / 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア 《獅子頭部》 / 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア 《哲人の顔》 / 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア 《ヴィーナス》 / ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン 《アテナ頭部》 / 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュバロス「ルクスス・グループ」(?) 《鷺と鶏図》 / 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「プーローニユ 441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》 / 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス図》 / 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》 / 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》 / 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》 / 紀元前425-400年頃 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》 / 紀元前400-375年頃 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクロイ図》 / 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》 / 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アプリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》 / 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》 / 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ 《ヴィーナスの頭部》 / 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》 / 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》 / 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室 19世紀以前の美術

49. レンブラント・ファン・レイン 《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》 / 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
50. グレゴリオ・ラザニーニ 《黄金の子牛の礼拝》 / 1700-07年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋127
51. ジャン=バティスト・パテル 《水浴》 / 年代不明 / 油彩・カンヴァス / 外洋175
52. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル 《若い女の頭部》 / 油彩・カンヴァス / 外洋161

-
53. カミーユ・コロー《イタリアの女》/ 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / 外洋6
 54. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
 55. カミーユ・コロー《オルレアン風景》/ 1845-50年 / 油彩・板 / 外洋9
 56. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
 57. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
 58. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しほりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
 59. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サープル=ドロンス》/ 油彩・板 / 外洋10
 60. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
 61. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/ 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11

第4室 印象派とポスト印象派1

62. アドルフ・モンティセリ《庭園の貴婦人》/ 1870-80年 / 油彩・板 / 外洋13
63. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
64. エドゥアール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
65. エドゥアール・マネ《メリー・ローラン》/ 1882年 / パステル・カンヴァス / 外洋15
66. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
67. アルフレッド・シスレー《レディーズ・コーヴ、ウェールズ》/ 1897年 / 油彩・カンヴァス / 外洋133
68. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
69. クロード・モネ《霧のテムズ河》/ 1901年 / パステル・紙 / 外洋135
70. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
71. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルバンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
72. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニュのテラス》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33
73. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋136
74. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
75. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35
76. ピエール=オーギュスト・ルノワール《青帽子の女》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋137

第5室 印象派とポスト印象派2

77. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
78. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
79. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
80. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
81. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168
82. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
83. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45
84. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋227
85. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
86. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
87. ピエール・ボナール《海岸》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋53
88. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋65

第6室 マティス

89. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56
90. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
91. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
92. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/ 1919年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋58
93. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
94. アンリ・マティス《樹間の憩い》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
95. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋117
96. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 外洋60
97. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
98. アンドレ・ドラネ《聖母子》/ 1913年頃 / 油彩・板 / 外洋71

第7室 ルオーと20世紀美術

99. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142
100. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
101. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
102. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
103. マリー・ローランサン《手鏡を持つ女》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋145
104. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋115
105. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114

第8室 ピカソと20世紀美術

106. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73
107. ラウル・デュフィ《ボワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / 外洋184
108. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋219
109. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61
110. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
111. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
112. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84
113. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160
114. パブロ・ピカソ《茄子》/ 1946年 / 油彩、グワッシュ・紙 / 外洋85
115. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 外洋144
116. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 外洋86
117. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 制作年不明 / 油彩・カンヴァス / 外洋91

第9室 抽象絵画の展開1

118. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217
119. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / 外洋203
120. パウル・クレー《鳥》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
121. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
122. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
123. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/ 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
124. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 外洋215
125. ジャン・デュビュッフエ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
126. ジャン・デュビュッフエ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193

-
127. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
 128. ビエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
 129. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋525
 130. ビエール・アレシンスキー《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99
 131. 田中敦子《無題》/ 1965年 / エナメル塗料・カンヴァス / 日洋566

第10室 抽象絵画の展開2

132. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
133. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
134. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
135. ザオ・ウーキー《21.Sep.50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋194
136. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
137. ザオ・ウーキー《風景2004》/ 2004年 / 油彩・カンヴァス / 外洋208
138. 白髪一雄《観音普陀落浄土》/ 1972年 / 油彩・カンヴァス / 日洋544

第2室 日本近代絵画

139. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
140. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8
141. 藤島武二《ルツェルン》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋23
142. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
143. 藤島武二《糸杉（ヴィラ・ファルコニエリ）》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋27
144. 藤島武二《ローマの遺跡》/ 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋32
145. 藤島武二《淡路島遠望》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋47
146. 藤島武二《潮岬海景》/ 1931年 / 油彩・板 / 日洋240
147. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋51
148. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91
149. 青木繁《海景（布良の海）》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100
150. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
151. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132
152. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋141
153. 小出楯重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
154. 小出楯重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140
155. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
156. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
157. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304
158. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋158
159. 岸田劉生《街道（銀座風景）》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋228
160. 岸田劉生《裸婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋205
161. 岸田劉生《南瓜を持てる女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋293
162. 佐伯祐三《ガラージュ》/ 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175
163. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
164. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋178
165. 牛島憲之《タンクの道》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋212

* 寄託作品以外は、すべてブリヂストン美術館蔵。

広報記録：

新聞・雑誌：

“Why is it Masterwork?”, *The Japan Times*, December 31, 2010

岸 桂子「ゆったりアート・雪景色と発電所」『毎日新聞』2011年1月7日夕刊

大室一也「美の履歴書・《自画像》エドワール・マネ」『朝日新聞』2011年1月26日夕刊

「エンタメ部員Mのイチオシ『なぜ、これが傑作なの?』」『anan』2011年2月2日号、p.92

貝塚 健「アート・トーキングクロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》」『日本経済新聞』2011年2月10日

貝塚 健「『なぜ、これが傑作なの?』モネからポロックまで。その秘密を紹介します。』『新美術新聞』2011年2月11日

黒沢綾子「美の扉・美術館で見つける『道標』—『なぜ、これが傑作なの?』展」『産経新聞』2011年2月27日

堀尾真紀子「名画に会おう第11回・コロー《森の中の若い女》森の静寂に浮かぶ妖精」『クレスコ』2011年2月号、p.46

Rie fu「わたしのおススメはこれ!『コレクション展示：なぜ、これが傑作なの?』」『ぴあ』2011年3月17日号、p.117

Web：

貝塚 健「パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》」Fuji-tv ART NET、2011年1月20日

「『なぜ、これが傑作なの?』展 企画担当学芸員が語る展覧会の見どころ」MMF（ミューゼ・ド・フランス）
<http://www.museesdefrance.org/museum/museum.html>、2011年2月15日

テレビ・ラジオ：

「新日曜美術館」（アートシーン）NHK教育テレビ、2011年1月16日放映

「日テレ・ポン」（アートに恋して）日本テレビ、2011年1月18日放映

「ぶらぶら美術博物館・ブリヂストン美術館—セザンヌ、ピカソの名画 なぜ、これが“傑作”なの?」BS日テレ、2011年2月1日放映

「美術館便り」シアター・テレビジョン、2011年3月7日より繰り返し放映



エントランス



西側広報ウィンド

©2012 - Succession Pablo Picasso - SPDA(JAPAN)

アンフォルメルとは何か？— 20 世紀フランス絵画の挑戦〈特別展〉

会期：2011年4月29日(金)－7月6日(水)

会場：1、2、7－10室

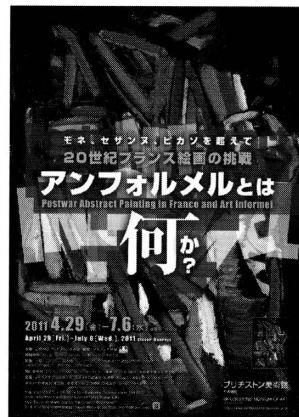
主催：石橋財団ブリヂストン美術館

後援：フランス大使館

概要：第二次大戦後のパリで起こった絵画運動「アンフォルメル」。仏語で「不定形なるもの」を意味するこの言葉は、ミシェル・タビエによって戦後のフランスに胎動する新たな非具象的な絵画として提唱された。戦後のフランスで新しい絵画の創造を目指した画家たちによる101点の作品で紹介。予定されていた海外からの作品が諸事情により出品が見送られたが、ポンピドゥー・センターフランス国立近代美術館の好意により、スーラージュの作品1点が特別出品された。

出品内容：絵画97点、彫刻2点、写真2点 計101点

入場者総数：21,083人(1日平均351人)



展覧会ポスター

出品目録：

§1 抽象絵画の萌芽と展開

1. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋14
2. ギュスターヴ・モロー《化粧》/ 1885-90年頃 / グワッシュ、水彩・紙 / BMA / 外洋120
3. アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋227
4. ポール・セザンヌ《サント＝ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋32
5. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋23
6. クロード・モネ《黄昏・ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋24
7. ピエト・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / BMA / 外洋203
8. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマル瓶・グラス・新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / BMA / 外洋173 / *6/28から展示
9. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋83
10. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / BMA / 外洋84
11. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋219
12. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・厚紙 / BMA / 外洋217
13. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / BMA / 外洋202

§2 「不定形な」絵画の登場—フォートリエ・デュビュッフェ・ヴォルス

14. ジャン・フォートリエ《人質》/ 1944年 / グワッシュ、石膏・紙を貼ったカンヴァス / 財団法人大原美術館
15. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・紙を貼ったカンヴァス / BMA / 外洋188
16. ジャン・フォートリエ《無題》/ 1956年 / グワッシュ、石膏・紙を貼ったカンヴァス / 横浜美術館
17. ジャン・フォートリエ《無題（四辺画）》/ 1958年 / 油彩、デトランプ・紙を貼ったカンヴァス / 北九州市立美術館

-
18. ジャン・フォートリエ 《永遠の幸福》 / 1958年 / 油彩・紙を貼ったカンヴァス / 大阪市立近代美術館建設準備室
 19. ジャン・フォートリエ 《直方体》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
 20. ジャン・フォートリエ 《黒の青》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / ウィルデンスタイン東京
 21. ジャン・フォートリエ 《干渉》 / 1963年 / 油彩・カンヴァス / 原美術館
 22. ジャン・フォートリエ 《旋回する線》 / 1963年 / 油彩・紙を貼ったカンヴァス / BMA / 外洋189
 23. ジャン・フォートリエ 《暗がりの風景》 / 1941年 / カラーエッチング / 兵庫県立美術館
 24. ジャン・フォートリエ 《人質の習作》 / 1942年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 25. ジャン・フォートリエ 《黒い裸婦》 / 1942年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 26. ジャン・フォートリエ 《銃殺された人々》 / 1942年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 27. ジャン・フォートリエ 《人質 I-B》 / 1943年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 28. ジャン・フォートリエ 《黒の上の人質》 / 1944年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 29. ジャン・フォートリエ 《虐殺された人々》 / 1944年 / エッチング / 兵庫県立美術館
 30. ジャン・フォートリエ 《酒壺》 / 1947年 / カラーエッチング / 兵庫県立美術館
 31. ジャン・フォートリエ 《トルソ》 / 1928年 / ブロンズ / 兵庫県立美術館
 32. ジャン・フォートリエ 《女》 / 1940年 / ブロンズ / 徳島県立近代美術館
 33. ジャン・デュビュッフェ 《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》 / 1947年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋192
 34. ジャン・デュビュッフェ 《愉快な夜》 / 1949年 / 油彩・カンヴァス / 国立国際美術館
 35. ジャン・デュビュッフェ 《美しい尾の牝牛》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 国立西洋美術館
 36. ジャン・デュビュッフェ 《熱血漢》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / 徳島県立近代美術館
 37. ジャン・デュビュッフェ 《草の茂る壁際》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス (アサンブラージュ) / 東京国立近代美術館
 38. ジャン・デュビュッフェ 《暴動》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋193
 39. ジャン・デュビュッフェ 《都会生活》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 富山県立近代美術館
 40. ジャン・デュビュッフェ 『物質と記憶』 / 1944年 / 大阪市立近代美術館建設準備室
 - 40-1. 《自転車旅行》 / 1944年9月13日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-2. 《森の家》 / 1944年9月8日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-3. 《窓の会釈》 / 1944年9月15日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-4. 《魚の昼食》 / 1944年9月18日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-5. 《針仕事》 / 1944年9月15日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-6. 《黒人の女》 / 1944年9月23日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 42-7. 《うぶな娘》 / 1944年9月20日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-8. 《靴下をつくろう女》 / 1944年9月22日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-9. 《哺乳》 / 1944年 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-10. 《騎馬での出発》 / 1944年9月 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-11. 《ふたりの男と3羽の岩鷓鴣 (いわしゃこ) のいる風景》 / 1944年 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 40-12. 《腕を上げる女》 / 1944年9月26日 / リトグラフ / *4/29-6/5まで展示
 - 42-13. 《騎行》 / 1944年 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-14. 《ピアニスト》 / 1944年 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-15. 《女と子供》 / 1944年10月14日 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-16. 《風景》 / 1944年10月16日 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-17. 《タイピスト》 / 1944年10月25日 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-18. 《ドライブ》 / 1944年10月27日 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
 - 40-19. 《洗練されたレディ》 / 1944年10月30日 / リトグラフ / *6/7-7/6まで展示
-

-
- 42-20. 《スィング嬢》 / 1944年10月31日 / リトグラフ / *6/7-6/26まで展示
40-21. 《男の横顔》 / 1944年11月4日 / リトグラフ / *6/7-6/26まで展示
40-22. 《母性》 / 1944年 / リトグラフ / *6/7-6/26まで展示
40-23. 《牝牛no.1》 / 1944年 / リトグラフ / *6/7-6/26まで展示
40-24. 《ワルツ》 / 1944年11月14日 / リトグラフ / *6/7-6/26まで展示
40-25. 《電話の責苦》 / 1944年 / リトグラフ / *6/28-7/6まで展示
40-26. 《鏡を持つ浮気女》 / 1944年11月17日 / リトグラフ / *6/28-7/6まで展示
40-27. 《コーヒを挽く女》 / 1944年11月18日 / リトグラフ / *6/28-7/6まで展示
40-28. 《鳥の羽根をむしる女》 / 1944年11月27日 / リトグラフ / *6/28-7/6まで展示
40-29. 《鼻をかむ人》 / 1944年 / リトグラフ / *6/28-7/6まで展示
41. ヴォルス 《海の水面の反映・カシスの港》 / 1941年 / ゼラチン・シルバープリント / ツァイト・フォト・サロン
42. ヴォルス 《雲・・・》 / 1937年 / ゼラチン・シルバープリント / ツァイト・フォト・サロン
43. ヴォルス 《作品・または絵画》 / 1946年頃 / グワッシュ・紙 / 財団法人大原美術館
44. ヴォルス 《構成》 / 1947年 / 油彩・カンヴァス / 国立国際美術館
45. ヴォルス 《いいようもなくやわらかな色彩》 / 1949-51年 / グワッシュ・紙 / 福岡市美術館
46. ヴォルス 《葵色と黄土色》 / 1946年頃 / グワッシュ・紙 / 山本進氏
47. ヴォルス 版画集『ヴォルス』 / 1948-49/1962年 / ドライポイント / ウイルデンスタイン東京
47-1. 《街——横位置》
47-2. 《からみあう木》
47-3. 《平行する街》
47-4. 《染み・左側にギザギザの線》
47-5. 《裸の花》
47-6. 《心臓》
47-7. 《漂う3つの小さな形》
47-8. 《小さな染み》
47-9. 《裸体》
47-10. 《左下に毛虫の形》
47-11. 《暗い街》
47-12. 《じゃがいもの顔》
47-13. 《大きな毛虫》
47-14. 《耳》
47-15. 《プラズマ》
47-16. 《木の街》
47-17. 《街の中心》
47-18. 《顔》 Gesicht
47-19. 《大きな染み I》
47-20. 《大きな染み II》

§3 戦後フランス絵画の抽象的傾向と「アンフォルメル芸術」

48. アンリ・ミショー 《ムーヴマン》 / 1950年 / 墨・紙 / 東京国立近代美術館
49. アンリ・ミショー 《ムーヴマン》 / 1950-51年 / 墨・紙 / 東京国立近代美術館
50. アンリ・ミショー 《メスカリン素描》 / 1957年 / 墨・紙 / 東京国立近代美術館
51. アンリ・ミショー 《メスカリン素描》 / 1956年 / 色鉛筆・紙 / 東京国立近代美術館
52. アンリ・ミショー 《水彩・グワッシュ・墨》 / 1954-55年 / 水彩、グワッシュ、墨・紙 / 東京国立近代美術館

-
53. アンリ・ミショー《無題》/ 1970年 / 水彩・紙 / BMA / 外洋213
 54. アンリ・ミショー《無題》/ 1973年 / グワッシュ、アクリル・紙 / BMA / 外洋214
 55. アンリ・ミショー《無題》/ 1979-81年 / 墨、アクリル・紙 / BMA / 外洋212
 56. アンス・アルトウング《T.1948-16》/ 1948年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館
 57. アンス・アルトウング《T.1962-U.6》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / 富山県立近代美術館
 58. アンス・アルトウング《T.1963-K.7》/ 1963年 / アクリル・カンヴァス / BMA / 外洋228
 59. ピエール・スーラージュ《無題》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 原美術館
 60. ピエール・スーラージュ《絵画》/ 1966年 / 油彩・カンヴァス / 富山県立近代美術館
 61. ピエール・スーラージュ《絵画, 26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋210
 62. ピエール・スーラージュ《作品》/ 1947年 / リトグラフ / BMA / 外版276
 63. ピエール・スーラージュ《リトグラフ no.6》/ 1957年 / リトグラフ / BMA / 外版277
 64. ピエール・スーラージュ《リトグラフ No.32 B》/ 1974年 / リトグラフ / BMA / 外版425
 65. ジョルジュ・マチウ《青と赤》/ 1951年 / 油彩・板 / 財団法人大原美術館
 66. ジョルジュ・マチウ《無題》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人草月会（東京都現代美術館寄託）
 67. ジョルジュ・マチウ《無題》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 国立国際美術館
 68. ジャン＝ポール・リオベル《無題》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 原美術館
 69. ジャン＝ポール・リオベル《絵画》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館
 70. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋209
 71. サム・フランシス《無題（東京）》/ 1960年 / グワッシュ・紙 / ウイルデンスタイン東京
 72. サム・フランシス《東京》/ 1965年 / グワッシュ・紙 / 山本進氏蔵
 73. カレル・アペル《母と子》/ 1952年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館
 74. カレル・アペル《裸婦》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 徳島県立近代美術館
 75. ピエール・アレシンスキー《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋99
 76. ピエール・アレシンスキー《木の根》/ 1954年 / 水彩、インク・紙 / BMA / 外洋100
 77. ピエール・アレシンスキー《何が起きたのか？》/ 1963年 / リトグラフ / BMA / 外版424
 78. ルーチョ・フォンタナ《no.6空間概念》/ 1963年 / レリーフプリント・紙 / BMA / 外版141
 79. ジュゼッペ・カボグロッシ《表面241》/ 1957-58年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館
 80. セルジュ・ポリャコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋215
 81. セルジュ・ポリャコフ《ピンクと赤と青のコンポジション》/ 制作年不詳 / 木版・紙 / BMA / 外版430
 82. ニコラ・ド・スタール《コンポジション》/ 1948年 / 油彩・カンヴァス / 愛知県美術館
 83. ニコラ・ド・スタール《黄と緑の長方形》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
 84. 菅井汲《赤い鬼》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋579
 85. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋526
 86. 堂本尚郎《作品》/ 1957年 / 混合技法・カンヴァス / BMA寄託作品
 87. 堂本尚郎《絵画》/ 1957年 / 水彩・紙 / BMA / 日洋580
 88. 堂本尚郎《二次元的なアンサンブル》/ 1961年 / 顔料・紙 / BMA / 日洋531
 89. 堂本尚郎《連続の溶解9》/ 1964年 / 油彩、アクリル・カンヴァス / BMA / 日洋530
 90. 今井俊満《Eclipse》/ 1964年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋552
 91. ザオ・ウーキー《21.Sep.50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / BMA / 外洋194
 92. ザオ・ウーキー《15.01.61》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋103
 93. ザオ・ウーキー《24.02.70》/ 1970年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋156
 94. ザオ・ウーキー《10.06.75》/ 1975年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋157
 95. ザオ・ウーキー《10.03.76》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋195
 96. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋197
 97. ザオ・ウーキー《無題（風景）》/ 1950年 / 水彩、インク、鉛筆・紙 / BMA / 外洋207
-

-
98. ザオ・ウーキー 《サヴァンナ（草原）》 / 1952年 / 水彩、インク・紙 / BMA / 外洋198
99. ザオ・ウーキー 《海岸》 / 1950年 / エッチング / BMA / 外版278
100. ザオ・ウーキー 《鳥の飛翔》 / 1954年 / リトグラフ / BMA / 外版279
101. (特別出品作品) ピエール・スーラージュ 《絵画・195x130cm・1956年8月10日》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / ボンピドゥー・センター フランス国立近代美術館

*BMAはブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

関連映像

「ピエール・スーラージュへの6つの質問・2011年3月23日・パリのアトリエにて」 / 撮影 ジャン＝ミシェル・ムリス / 編集：播本和宜 / 翻訳：高野勢子 / 協力：五辻通泰・五辻洋祐 / 企画・監修：新畑泰秀 / 製作：石橋財団ブリヂストン美術館

関連事業：

特別講座「アンフォルメルとその時代」→ p.62
土曜講座「戦後フランスの抽象絵画とアンフォルメル」→ p.61
ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

「戦後の荒廃に咲いた『アンフォルメル』」『週刊新潮』2011年4月28日号、pp.115-119
新畑泰秀「『もうひとつの芸術』の創造」『週刊読書人』2011年5月6日（4月29日合併号）
三田晴夫「アートの風・『アンフォルメルとは何か？』展」『毎日新聞』2011年5月11日夕刊
新畑泰秀「豊穣な成果再評価のために」『新美術新聞』2011年5月21日
林 道郎「観客に思考を促す美術展」 / 「渦中のパリの思い出」『読売新聞』2011年5月26日
アライ＝ヒロユキ「現代絵画の出発点スキャンダラスな前衛表現の実相」『週刊金曜日』2011年5月27日号、p.45
「展覧会情報」『月刊美術』2011年5月号、p.138
「イベントガイド・激しくも美しい芸術家たちの情熱の痕跡」『eclat』2011年5月号、p.180
原田マハ「最新おしゃれギャラリー情報」『In Red』2011年5月号
「Special Exhibition 3知られざる戦後のフランス抽象絵画」『月刊ギャラリー』2011年5月号、pp.18-19
平野啓一郎「クロスボーダーレビュー・小説家平野啓一郎が見た美術展『アンフォルメルとは何か？』」『日本経済新聞』2011年6月9日
藤田一人「『アンフォルメルとは何か？』展—融通無碍な戦後日本の感性」『東京新聞』『北陸中日新聞』2011年6月10日夕刊
西田健作「美の履歴書・人質」ジャン・フォートリエ『朝日新聞』2011年6月15日夕刊
新畑泰秀「ギャラリーモール・菅井汲《赤い鬼》」『読売新聞』2011年6月21日夕刊
中村宏美「アート×ファッション・戦後のフランス美術を再認識」『繊研新聞』2011年6月22日
「熱い抽象 アンフォルメルに注目」『ぴあ』2011年6月23日号、p.103
「ピエール・スーラージュ氏に聞く『アンフォルメルとは何か？—20世紀フランス絵画の挑戦』展によせて・芸術は『存在』—ピエール・スーラージュ氏インタビュー」 / 新畑泰秀「独自の抽象表現を展開 戦後フランスを代表するスーラージュ」『週刊読書人』2011年6月24日
宝玉正彦「呼び寄せる自由な表現『アンフォルメルとは何か？』展」『日本経済新聞』2011年6月29日

「ART Pen SELECTION」『Pen』2011年6月号、p.108

斉藤博美「新・学芸員の企画術 キュレーションの壺・ブリヂストン美術館学芸課長、新畑泰秀」『月刊ギャラリー』2011年6月号、pp.132-135

「BT RECOMMENDS!」『美術手帖』（ART NAVI）2011年6月号、p.6

「art news・戦後美術の起爆剤か、空騒ぎか『アンフォルメルという祭り』」『芸術新潮』2011年6月号、pp.115-119

沢山 遼「人質的形象『アンフォルメルとは何か？ 20世紀フランス絵画の挑戦』展」『美術手帖』2011年7月号、pp.202-204

秋川ゆか「pick up! Art・戦後フランスの新芸術『アンフォルメル』の系譜をたどる」『男の隠れ家』2011年7月号、p.9

渋谷和彦「所蔵品に見るブリヂストン美術館の見識の高さ」『モーストリー・クラシック』2011年8月号

Web：

新畑泰秀「ショコラ」PODCAST、2011年5月17日

「第2次大戦後に登場した『非定形芸術』運動を紹介『アンフォルメルとは何か？』展」CINRA.NET、<http://www.cinra.net/>、2011年6月10日

テレビ・ラジオ：

「BRAND-NEW STATION」朝日ニュースター、2011年5月9日より繰り返し放映

「新日曜美術館」（アートシーン）NHK教育テレビ、2011年6月12日放映



会場風景



西側広報ウィンド

没後 100 年 青木繁展—よみがえる神話と芸術〈特別展〉

会期：2011年7月17日(日)－9月4日(日)

会場：第2、4－10室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

協賛：日本写真印刷

概要：没後100年を機に、可能な限りの作品を集めた青木繁（1882-1911）の回顧展。石橋美術館、京都国立近代美術館を巡回した3会場目の東京展となる。14歳のときの初期作品から絶筆《朝日》までを集めた。単独の大規模回顧展としては、1972年のブリヂストン美術館・石橋美術館での開催以来、39年振りだった。《わだつみのいろこの宮下絵》など新出作品が、開会前から話題となった。

出品内容：油彩65点、水彩・素描168点、資料61点 計294点

入場者総数：46,778人(1日平均1,017人)



出品目録：

→ p.30-37

関連事業：

土曜講座「真夏の青木繁講座」→ p.61

スライドトーク

広報記録：

新聞・雑誌：

貝塚 健「開催困難な青木繁、39年ぶりの大回顧展が開催」『美術の窓』2011年2月号、pp.16-17

貝塚 健「早世の洋画家①青木繁《海の幸》」『河北新報』2011年3月1日夕刊

窪田直子「青木繁・没後100年回顧展《海の幸》に豊かな解釈」『日本経済新聞』2011年4月11日夕刊

菅谷淳夫「サライ美術館・没後100年青木繁展—よみがえる神話と芸術より『夭折の天才画家』」『サライ』

2011年5月号、pp.98-99

「BT RECOMMENDS!」『美術手帖』（ARTNAVI）2011年5月号、p.6

貝塚 健「早世の洋画家・豊かな想像力と叙情性」『中国新聞』2011年6月20日
 手塚さや香「美の焦点・京都国立近代美術館で展示中 青木繁《海の幸》祝祭の神輿か 膨らむ源泉」『毎日新聞』2011年6月22日夕刊
 高階秀爾「目は語る・青木繁の画業、大胆な発想と新鮮な自然表現」『毎日新聞』2011年6月23日夕刊
 手塚さや香「《海の幸》モチーフに新説 房総の神輿が源泉か」『毎日新聞』2011年6月29日
 植草 学「いざない・没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術 熱く足早な生涯たどる—信州との縁示す作品も」『信濃毎日新聞』2011年7月1日
 [Pen SELECTION ART/浪漫主義を代表する、28歳で夭折した天才の大回顧展]『Pen』2011年7月15日号、p.118
 貝塚 健「没後100年青木繁展よみがえる神話と芸術—39年振りの大回顧展、総点数約300点—絵画創造の沸騰点ともいうべき瞬間」『新美術新聞』2011年7月21日
 「『没後100年青木繁展』を開催・石橋財団ブリヂストン美術館」『ゴムタイム』2011年7月25日
 Robert Reed, "WEEKEND: Myth, the sea and love swept away by the genius of Shigeru Aoki", *THE DAILY YOMIURI*, July 29, 2011,
 渋谷和彦「美の扉・《海の幸》遺して早世・没後100年青木繁の回顧展 自分の空想の世界一形にした『天才』」『産経新聞』2011年7月31日
 「アートスポット・青木繁 伝説に彩られた生涯」『月刊ボザール』2011年7月号、pp.22-25
 「特集・青木繁ゴーマン画家の愛と孤独」『芸術新潮』2011年7月号、pp.10-76
 貝塚 健「没後100年青木繁展—よみがえる神話と芸術」『週刊読書人』2011年8月5日
 宝玉正彦「画家たちの対比列伝①—熊谷守一と青木繁」『日本経済新聞』2011年8月7日
 下野 綾「時空越えた力強さ 没後100年青木繁展」『神奈川新聞』2011年8月8日
 「『描くこと』で生きた画家 東京・青木繁の回顧展」『山形新聞』2011年8月8日（その他地方紙に配信）
 「忙人寸語」『千葉日報』2011年8月17日
 山下裕二「没後100年青木繁展—よみがえる神話と芸術『夭折の画家』を相対化」2011年8月17日『公明新聞』
 清水 弟「青木繁《海の幸》モチーフどっち？『担ぐ姿、絵と類似』両説披露へ 館山で27日」『朝日新聞』2011年8月25日
 「これだけは見たい！2011今夏開催の注目展」『月刊美術』2011年8月号、p.155
 森村泰昌「ART美術の見方、美術の話・生まれる時代が早すぎた幸と不幸を同時に背負うことになった画家」『クロワッサンプレミアム』2011年8月号、pp.140-141
 貝塚 健「没後100年 青木繁展」『月刊展覧会ガイド』2011年8月号、p.8
 上坂美穂「ART EXHIBITION LIST 2011 必見美術展リスト」『婦人画報』2011年9月号、p.113
 川岸 徹「ART & ART・美術展の1枚 青木繁《海の幸》」『おとなのOFF』2011年9月号、p.102
 山下裕二「この一点への旅・《大穴牟知命》」『eclat』2011年9月号、p.177
 杏「杏さんのアートフル・ワールド・短い生涯の中、燃やし続けた芸術への探究心に心打たれる」『SPUR』2011年10月号、p.387
 岸桂子「この1年 美術・『今できること』探る—『再生』『鎮魂』テーマに多くの共感」『毎日新聞』2011年12月15日

Web：

貝塚 健「39年振りの青木繁展」Fuji-tv ART NET、2011年7月7日
 城戸真亜子「城戸真亜子のアート散歩・第10回 没後100年青木繁展」http://www.shinkokyu-club.com/event/art_kido/009/index.html、2011年8月4日
 「康本雅子と行く『没後100年の青木繁展』」CINRA.NET、<http://www.cinra.net/>、2011年8月10日

テレビ・ラジオ：

貝塚 健「Rendez-Vous・Find Tomorrow」J-wave、2011年8月9日放送

貝塚健「ぶらぶら美術博物館・没後100年青木繁展—伝説の画家・青木繁の生涯と《海の幸》」BS日テレ、2011年8月9日放映

貝塚 健「CURIOUS」J-wave、2011年8月15日放送

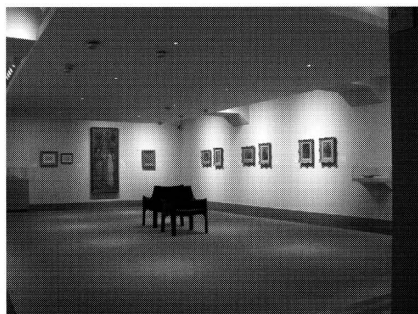
「TOKYOマーケットウォッチ」日経CNBC、2011年8月16日放映

「新日曜美術館・青木繁—文人たちの愛した画家」NHK教育テレビ、2011年8月21日放映（8月28日再放送）

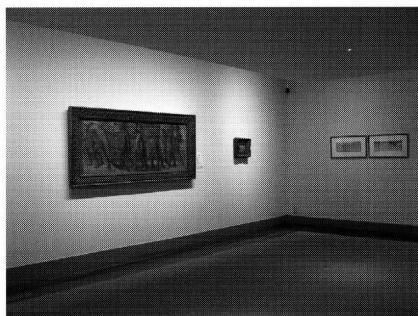
「皇室ご一家」フジテレビ、2011年8月28日放映



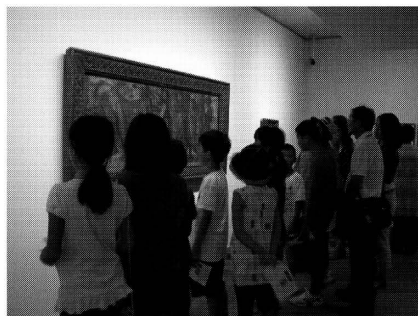
エントランス



会場風景



会場風景



会場風景

くらべてわかる—印象派誕生から 20 世紀美術まで〈コレクション展示〉

会期：2011年9月14日(水)－10月18日(火)

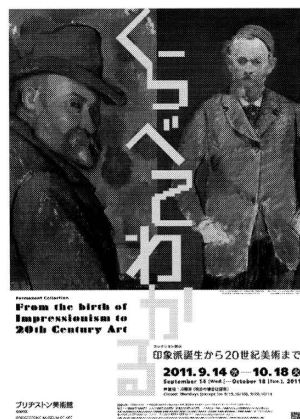
会場：第1－10室、彫刻ギャラリー 1－2室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：モネやルノワールなど印象派の画家たちをはじめ、ピカソやマティスら20世紀美術の代表的な画家に加え、エコール・ド・パリの画家たちや抽象絵画、そして、印象派の誕生にきっかけを与えたバルビゾン派の画家コロなど約180点を展示した。あわせて、隣り合う2つの作品をくらべる解説パネル（文字数500字程度）を13箇所設置した。

出品内容：絵画132点、彫刻34点、陶器13点 計179点

入場者総数：18,399人(1日平均623人)



展覧会ポスター

出品目録：

エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》／大理石／外彫81

階段

2. アリストイド・マイヨール《欲望》／1905-08年／ブロンズ／外彫66

彫刻ギャラリー 1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》／1884年頃／大理石／外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》／1902年頃／ブロンズ／外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》／1904年／ブロンズ／外彫38
6. エミール＝アントワーン・ブールデル《風の中のベートーヴェン》／1904-08年／ブロンズ／外彫43
7. エミール＝アントワーン・ブールデル《ペネロープ》／1909年／ブロンズ／外彫45
8. エミール＝アントワーン・ブールデル《弓をひくヘラクレス》／1909年／ブロンズ／外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》／1918年／ブロンズ／外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ＝クラ》／1919年／ブロンズ／外彫49

彫刻ギャラリー 2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》／1907-10年／石膏／外彫100
12. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》／1914年／ブロンズ／外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》／1919年／着色されたセメント／外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》／1950年／ブロンズ／外彫56
15. オシップ・ザツキン《ボモナ（トルソ）》／1951年／黒檀／外彫55
16. ヘンリー・ムア《横たわる人体》／1976年／ブロンズ／外彫89
17. マリノ・マリーニ《騎手》／1952年／ブロンズ／外彫70
18. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風（B）》／1972-73年／ブロンズ／外彫88

第3室 古代美術

19. シュメール《女の胸像》/ 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ《人物像》/ 1-2世紀 / 石灰石 / 外彫94
21. エジプト《セクメト神像》/ 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片《柘榴と葡萄図》/ アマルナ時代(紀元前1360年頃) / 石灰石 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片《神牛》/ 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト《彩色木棺》/ 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト《ホルス神浮彫》/ 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト《聖猫》/ 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア《獅子頭部》/ 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア《哲人の顔》/ 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア《ヴィーナス》/ ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン《アテナ頭部》/ 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュバロス「ルクス・グループ」(?)《鷺と鶏図》/ 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「ブローネウ 441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》/ 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》/ 紀元前425-400年頃 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》/ 紀元前400-375年頃 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》/ 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アプリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》/ 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》/ 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ《ヴィーナスの頭部》/ 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》/ 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》/ 1世紀 / フレスコ / 外洋2

第1室 印象派以前

49. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
50. レンブラント・ファン・レイン《帽子と衿巻を着けた暗い顔のレンブラント》/ 1633年 / エッチング / 外版175
51. レンブラント・ファン・レイン《説教するキリスト》/ 1652年頃 / エッチング、ドライポイント、ビ

-
- ユラン / 外版177
52. アントニー・ヤンスゾーン・ファン・クロース《レイスウェイク城》/ 油彩・板 / 外洋4
 53. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル《若い女の頭部》/ 油彩・カンヴァス / 外洋161
 54. ウジェーヌ・ドラクロワ《馬習作》/ 水彩・紙 / 外洋129
 55. カミーユ・コロー《イタリアの女》/ 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / 外洋6
 56. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
 57. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
 58. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/ 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
 59. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
 60. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しほりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
 61. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サープル=ドロンヌ》/ 油彩・板 / 外洋10
 62. ロドルフ・ブレダン《村の入り口》/ エッチング / 外版348
 63. ロドルフ・ブレダン《川の流れ》/ 1880年 / エッチング / 外版353

第4室 印象派の風景画

64. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
65. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
66. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
67. クロード・モネ《アルジャントゥイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21
68. クロード・モネ《アルジャントゥイユ》/ 1874年 / 油彩・カンヴァス / 外洋180
69. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
70. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
71. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
72. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 外洋23
73. クロード・モネ《霧のテムーズ河》/ 1901年 / パステル・紙 / 外洋135
74. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
75. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
76. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
77. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122
78. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45
79. ポール・シニャック《ラ・ロシェル》/ 水彩、鉛筆・紙 / 外洋139

第5室 印象派の人物画

80. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
 81. エドゥアール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
 82. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
 83. ポール・セザンヌ《休息する水浴の男たち》/ 1875-77年頃 / ペン・インク、水彩・紙 / 外洋158
 84. ポール・セザンヌ《水辺の人物たち》/ 1877年頃 / 鉛筆、水彩・紙 / 外洋113
 85. ポール・セザンヌ《水浴群像》/ 1897-900年頃 / 鉛筆、水彩・紙 / 外洋30
 86. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162
 87. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/ 1895-98年 / パステル・紙 / 外洋17
 88. エドガー・ドガ《浴後》/ 1900年頃 / パステル・紙 / 外洋18
 89. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
 90. ピエール=オーギュスト・ルノワール《少女》/ 1887年 / パステル・紙 / 外洋165
-

-
91. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋136
 92. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋227
 93. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》/ 1891年 / リトグラフ / 外版38
 94. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《エグランティーヌ一座》/ 1896年 / リトグラフ / 外版162

第6室 ナビ派と世紀末

95. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
96. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
97. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54
98. エドゥアール・ヴエイヤール《鏡の前》/ 1924年頃 / パステル・紙 / 外洋55
99. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋65
100. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
101. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179
102. ギュスターヴ・モロー《化粧》/ 1885-90年頃 / グワッシュ、水彩・紙 / 外洋120
103. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
104. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43

第7室 フォーヴィスム

105. モーリス・ド・ヴラマンク《風景》/ 水彩・紙 / 外洋70
106. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69
107. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123
108. アルベール・マルケ《道行く人、ラ・フレット》/ 1946年 / 油彩・カンヴァス / 外洋181
109. ジョルジュ・ルオー《風景》/ 1913年 / 水彩・紙 / 外洋63
110. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142
111. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64

第8室 マティスとピカソ

112. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
113. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
114. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
115. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 外洋61
116. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
117. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 外洋86
118. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173
119. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
120. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83
121. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61
122. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84
123. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160

第9室 エコール・ド・パリ

124. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87

-
125. ラウル・デュフィ《ポワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / 外洋184
126. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・カンヴァス / 外洋77
127. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋115
128. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
129. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
130. マリー・ローランサン《手鏡を持つ女》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋145
131. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114
132. マルク・シャガール《ヴァンスの新月》/ 1955-56年 / グワッシュ・紙 / 外洋90
133. 藤田嗣治《巴里風景》/ 1918年 / 油彩・カンヴァス / 日洋123
134. 藤田嗣治《インク壺の静物》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 日洋124
135. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
136. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132
137. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋174
138. 佐伯祐三《ガラージュ》/ 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175

第10室 抽象絵画

139. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / 外洋203
140. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
141. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
142. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
143. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
144. 菅井汲《赤い鬼》/ 1965年 / 油彩・カンヴァス / 日洋579
145. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
146. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 日洋537
147. 斎藤義重《WORK》/ 1961年 / 油彩・合板 / 日洋578
148. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
149. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197

第2室 日本近代絵画

150. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8
151. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
152. 藤島武二《ローマの郊外》/ 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋30
153. 藤島武二《ローマの寺院》/ 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋31
154. 藤島武二《ローマの遺跡》/ 1908-09年 / 油彩・板 / 日洋32
155. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
156. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
157. 青木繁《海景（布良の海）》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100
158. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91
159. 山下新太郎《読書》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋83
160. 山下新太郎《供物》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋84
161. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋141
162. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋178
163. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
164. 安井曾太郎《阿部能成君》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
165. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304

166. 古賀春江《涯しなき逃避》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋166
167. 古賀春江《遊園地》/ 1926年 / 水彩・紙 / 日洋193
168. 猪熊弦一郎《夜の猫》/ 1954年 / 水彩、インク、墨、グワッシュ、鉛筆・紙 / 日洋487
169. 岸田劉生《麗子坐像》/ 1920年 / 水彩・紙 / 日洋154
170. 岸田劉生《街道（銀座風景）》/ 1911年 / 油彩・カンヴァス / 日洋228
171. 川上涼花《麦秋》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋326
172. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191
173. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / 日洋200
174. 小出檣重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
175. 小出檣重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140
176. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
177. 岡鹿之助《望楼》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋299
178. 牛島憲之《タンクの道》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋212
179. 牛島憲之《家》/ 1966年 / 油彩・カンヴァス / 日洋201

*すべてブリヂストン美術館蔵。

広報記録：

新聞・雑誌：

「くらべてわかる—印象派誕生から20世紀美術まで」『新美術新聞』2011年9月11日

「話題の展覧会」『美術の窓』2011年10月号、p.152

Web：

「並べ方を変えて、新たな発見」インターネットミュージアム、<http://www.museum.or.jp/>

テレビ・ラジオ：

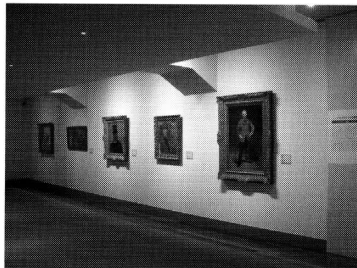
「日テレ・ポン」（アートに恋して）日本テレビ、2011年10月4日放映



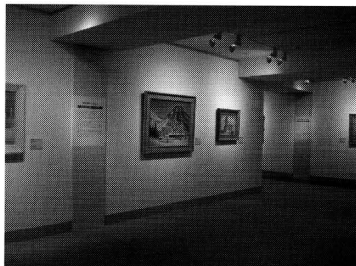
会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

「野見山暁治展」〈特別展〉

会期：2011年10月28日(金)－12月25日(日)

会場：第1、4－10室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：野見山暁治の戦前から現在に至るまで70余年の画業を回顧する個展。

代表作や初公開の作品などによって野見山の自由奔放でエネルギーにあふれた絵画世界が形成されていくプロセスと、90歳を過ぎても新しい表現に挑戦を続ける画家の姿勢を紹介した。石橋美術館との共同企画だが、会場構成はブリヂストン美術館独自のもの。「第1章 不安から覚醒へー戦前から戦後にかけて」「第2章 形をつかむー滞欧時代」「第3章 自然の本質を突きつめるー90年代まで」「第4章 響きあう色彩ー新作をめぐって」の4章で構成した。

出品内容：油彩66点、水彩・素描32点、版画15点 計113点

入場者総数：24,346人(1日平均477人)



展覧会ポスター

出品目録：

→ p.49-52

関連事業：

野見山暁治展開催記念アーティストトーク「野見山暁治をもっと知る」→ p.62

土曜講座「野見山暁治の軌跡」→ p.61

ギャラリートーク

広報記録：

「美術展・『野見山暁治展』」『しんぶん赤旗』2011年10月26日

「野見山暁治展」『月刊ギャラリー』2011年10月号、p.34

「野見山暁治展」『港区政新聞』2011年11月1日

中村節子「『野見山暁治展』画業70余年、新たな挑戦」『新美術新聞』2011年11月1日

小川敦生「体感する音楽のような絵『野見山暁治展』」『日本経済新聞』2011年11月9日

共同通信「『強固なもの』描きたいー画家野見山暁治」『長崎新聞』2011年11月18日(千葉日報他、地方紙に配信)

「70年の創作活動たどる」『陸奥新報』2011年11月19日

「野見山暁治展」『美じょん新報』2011年11月20日

日和聡子「言葉の遠近法・野見山暁治展」『公明新聞』2011年11月23日

三沢典文「心象風景の通じ合い」『東京新聞』2011年11月25日夕刊

渋谷和彦「美の扉・壮大な廃棄物に“自然”を見る」『産経新聞』2011年11月27日

田中三蔵「評・野見山暁治展・画風変遷の旅と続く深化」『朝日新聞』12月7日夕刊

大井健也『『野見山暁治展』絵画の力で自然の本質に迫る』『しんぶん赤旗』2011年12月9日
 大西若人「回顧2011 美術・小さな存在へのまなざしー無名の女性画家発掘／我が道歩む作家充実」『朝日新聞』
 2011年12月14日夕刊
 岸桂子「この1年 美術・『今できること』探るー『再生』『鎮魂』テーマに多くの共感」『毎日新聞』2011年
 12月15日
 アライ=ヒロユキ「美術・『野見山暁治展』抽象画の可能性ルーツ探求で開いた独自路線」『週刊金曜日』
 2011年12月16日号、p.47
 藤原奈美「野見山暁治展」『クロワッサンプレミアム』2011年12月号、p.149
 柴崎信三「90歳現役『野見山画伯』のデーモン」『FACTA』2011年12月号、pp.56-57

Web :

「未だに新境地を切り開く、90歳の洋画家」インターネットミュージアム、<http://www.museum.or.jp/>、2011年
 11月1日
 「野見山暁治展」青い日記帳、<http://bluediary2.jugem.jp/>、2011年11月6日

テレビ・ラジオ :

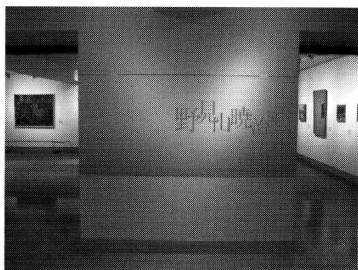
「新日曜美術館」(アートシーン) NHK教育テレビ、2011年11月13日放映



エントランス



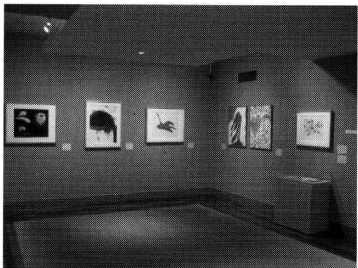
西側広報ウィンド



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

10のとびら—絵からひろがる世界〈コレクション展示〉

会期：2010年9月14日(火)－2011年3月13日(日)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ九州放送

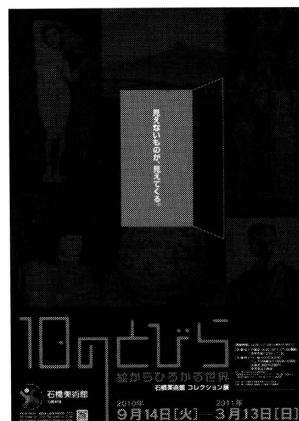
後援：久留米市 / 財団法人久留米文化振興会

概要：所蔵作品を「肖像・自画像」「模写」などの10個のテーマで展示。

展示内容は館報59号（2010）に掲載、本号では最終入場者数の記録にとどめる。

出品内容：絵画124点、彫刻7点、書画工芸52点 計183点

入場者総数：14,231人(1日平均：93人)



展覧会ポスター

関連事業：

ファミリーツアー → p.66

没後 100 年 青木繁展—よみがえる神話と芸術〈特別展〉

会期：2011年3月25日(金)－5月15日(日)

会場：本館、別館9室

主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送

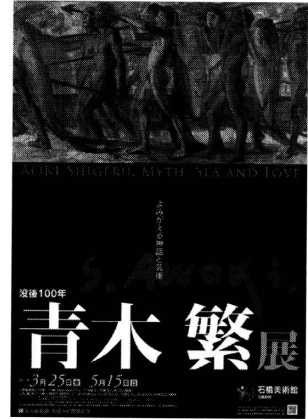
協賛：日本写真印刷

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会 / 福岡ユネスコ協会 / NHK福岡放送局

概要：石橋美術館、京都国立近代美術館、ブリヂストン美術館の共同企画。
伝説に彩られた青木繁（1882-1911）の人と芸術の両面を浮き彫りにするとともに、没後100年にわたり多くの人に愛され顕彰されてきた歴史にも注目した。39年振りの青木単独の回顧展。

出品内容：油彩65点、水彩・素描166点、資料61点 計292点

入場者総数：24,585人(1日平均：534人)



展覧会ポスター

出品目録：

第1章 画壇への登場 丹青によって男子たらん 1903年まで

- 1 《高良大社》 / 1896年 / 鉛筆・紙 / 晴明会館
- 2 《石膏デッサン》 / 1899年 / 木炭・紙
- 3 《男半裸体》 / 1901年 / 水彩・紙 / 財団法人河村美術館 / *久留米会場のみ展示
- 4 《石膏像》 / 1901年 / 木炭・紙 / おかざき世界子ども美術博物館
- 5 《石膏デッサン》 / 1901年頃 / 木炭・紙 / 茨城県天心記念五浦美術館 / *京都・東京会場のみ展示
- 6 《木立》 / 1901年頃 / 水彩・紙
- 7 《ランプ》 / 1901年頃 / 水彩・紙 / 財団法人河村美術館 / *京都・東京会場のみ展示
- 8 《動物園》 / 1901年頃 / 鉛筆・紙
- 9 《上京途中風景》 / 1902年 / 鉛筆・紙
- 10 《坂本繁二郎像》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
- 11 《車中風景》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋496
- 12 《網棚》 / 1902年 / 鉛筆・紙
- 13 《汗の妙義山スケッチ行》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
- 14 《赤城山》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
- 15 《麓より妙義山を望む》 / 1902年 / 鉛筆・紙
- 16 《中小坂村》 / 1902年 / 鉛筆・紙
- 17 《上小坂廃寺》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
- 18 《下仁田の町から見た風景》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
- 19 《下仁田宿外れ》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 黒住教本部
- 20 《毛の国の歌入りスケッチ》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
- 21 《落葉径》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 東御市梅野記念絵画館寄託
- 22 《スケッチする男》 / 1902年 / 鉛筆・紙
- 23 《男の顔》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 東御市梅野記念絵画館
- 24 《越後獅子》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙

-
- 25 《妙義神社よりのお神楽隊》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 26 《山上のスケッチ》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 27 《妙義山戯画》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 東御市梅野記念絵画館
 - 28 《妙義山金洞第一石門》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
 - 29 《林》 / 1902年 / 鉛筆、色鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
 - 30 《松井田駅》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 東御市梅野記念絵画館
 - 31 《馬肉屋》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
 - 32 《碓氷川磧》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋508
 - 33 《男の顔と足》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
 - 34 《月の夜》 / 1902年 / 鉛筆、チョーク・紙 / 東御市梅野記念絵画館
 - 35 《小諸宿外》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 財団法人河村美術館 / * 京都・東京会場のみ展示
 - 36 《信州甘楽川のスケッチ》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
 - 37 《籠をせおった男》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 38 《二人》 / 1902年頃 / 色鉛筆、水彩、パステル・紙
 - 39 《農家》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 40 《犬》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 郡山市立美術館（武田光司コレクション）
 - 41 《農家》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 42 《働く人》 / 1902年 / 鉛筆・紙 / 財団法人河村美術館 / * 久留米会場のみ展示
 - 43 《風景》 / 1902年 / 鉛筆・紙
 - 44 《風景》 / 1902年 / 水彩・紙
 - 45 《町の風景》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙
 - 46 《咬菜窟》 / 1902年頃 / 鉛筆・紙 / 宮城県美術館
 - 47 《スケッチ（鳳凰）》 / 1902年頃 / 鉛筆・紙 / 財団法人河村美術館 / * 京都・東京会場のみ展示
 - 48 《スケッチ（双頭の鳥）》 / 1902年頃 / 鉛筆・紙
 - 49 《スケッチ1》 / 1902年頃 / 鉛筆・紙 / 福岡県立美術館
 - 50 《スケッチ2》 / 1902年頃 / 鉛筆・紙 / 福岡県立美術館
 - 51 《画稿集表紙》 / 1902年 / 鉛筆、墨・紙
 - 52 《自画像》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋87
 - 53 《太田の森》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 愛知県美術館
 - 54 《輪転》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋90
 - 55 《夕焼（風景）》 / 1903年頃 / 油彩・板
 - 56 《黄泉比良坂習作》 / 1903年頃 / コンテ・紙 / 福岡市美術館 / * 京都・東京会場のみ展示
 - 57 《黄泉比良坂習作》 / 1903年頃 / 水彩・紙 / 福岡市美術館 / * 久留米・東京会場のみ展示
 - 58 《黄泉比良坂》 / 1903年 / 色鉛筆、パステル、水彩・紙 / 東京藝術大学 / * 京都・東京会場のみ展示
 - 59 《閻魔弥尼》 / 1903年 / 油彩・板 / IMA / 日洋89
 - 60 《印度神話エスキース》 / 1903年頃 / 鉛筆・紙
 - 61 《自画像》 / 1903年 / 色鉛筆・紙 / IMA / 日洋86
 - 62 《自画像》 / 1903年 / 鉛筆、淡彩・紙
 - 63 《根津権現》 / 1903年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 晴明会館
 - 64 《舞妓》 / 1903年 / 木炭・紙 / 晴明会館
 - 65 《顔》 / 1903-04年頃 / 色鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋575
 - 66 《神話エスキース》 / 1903年頃 / コンテ・紙
 - 67 《おもかげ》 / 1903年頃 / 鉛筆、色鉛筆・紙
 - 68 《男上半身デッサン》 / 1903年頃 / 鉛筆・紙
 - 69 《色合わせ1》 / 1903年 / 色鉛筆・紙
 - 70 《色合わせ2》 / 1903年 / 色鉛筆・紙
-

-
- 71 《絵付楽焼香盒》 / 1903年 / 陶器 / 東御市梅野記念絵画館
72 《絵付楽焼香盒》 / 1903年 / 陶器 / 東御市梅野記念絵画館
追加 《裸夫立像（後向）》 / 1903年頃 / チョーク・紙
M1 《中学明善校時代の写真》 / 1899年 / IMA
M2 《島崎春樹（藤村）『若菜集』 1897年8月、春陽堂刊》 / 野田宇太郎文学資料館
M3 《内田登喜次宛葉書 1900年11月26日消印》
M4 《梅野満雄宛書簡 1902年5月22日付》 / 東御市梅野記念絵画館
M5 《梅野満雄宛書簡 1902年6月5日、6日付》 / 東御市梅野記念絵画館
M6 《梅野満雄宛書簡 1902年6月25日付》 / 東御市梅野記念絵画館
M7 《坂本繁二郎宛書簡 1902年12月14日付》
M8 《熊谷守一宛書簡 1903年7月3日付》 / 府中市美術館
M9 《宿泊人届簿》 / 1902年 / 小諸市本町旅籠つるやホテル

第2章 豊饒の海 《海の幸》を中心に 1904年

- 73 《天平時代》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋91
74 《少女群舞》 / 1904年 / 油彩・板 / 府中市美術館
75 《夏の神社》 / 1904年 / 油彩・板 / 黒住教本部
76 《自画像》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 東京藝術大学
77 《海の幸下絵》 / 1904年 / 木炭・カンヴァス
78 《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋95
79 《海》 / 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋94
80 《海》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋498
81 《海》 / 1904年 / 油彩・板
82 《海景（布良の海）》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋100
83 《布良藻屑拾》 / 1904年 / 油彩・板 / メナード美術館 / *久留米会場のみ展示
84 《海景》 / 1904年 / 油彩・板 / 府中市美術館
85 《房州絵入書簡 1904年8月22日付》 / 1904年 / 墨・紙 / 東御市梅野記念絵画館
86 《女の顔》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス
87 《運命》 / 1904年 / 油彩・板 / 東京国立近代美術館
88 《男の顔（自画像）》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館 / *東京会場のみ展示
89 《農家》 / 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋96
90 《木立（森の暮色）》 / 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋97
91 《夕日》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス
92 《梅野一氏像》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス
93 《春》 / 1904年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋92
94 《水浴》 / 1904年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋101
95 《丘に立つ三人》 / 1904年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋93
96 《絵かるた（柿本人麻呂）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙
97 《絵かるた（在原業平）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙
98 《絵かるた（紫式部）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙
99 《絵かるた（小野小町）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙
100 《絵かるた（持統天皇1）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙 / 財団法人河村美術館
101 《絵かるた（凡河内躬恒）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙 / 財団法人河村美術館
102 《絵かるた（持統天皇2）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙 / 財団法人河村美術館
103 《絵かるた》 / 1904年 / 水彩・紙 / 財団法人河村美術館
104 《絵かるた（西行法師）》 / 1904年 / 墨、水彩・紙 / 財団法人河村美術館

-
- 105 《絵かるた》 / 1904年 / 水彩・紙
106 《絵かるた》 / 1904年 / 水彩・紙
107 《絵かるた》 / 1904年 / 水彩・紙
108 《勝鬨図》 / 1904年頃 / 水彩・紙（扇面） / 至峰堂画廊
109 《書（歌）》 / 1904年頃 / 墨・紙（扇面） / 至峰堂画廊
110 《扇面（女）》 / 1904年 / 水彩・絹（扇面） / 財団法人河村美術館 / ＊久留米会場のみ展示
111 《風景》 / 1904年 / 水彩・絹（扇面） / IMA / 日洋99
112 《まひまてり歌扇面》 / 1904年 / 墨・紙（扇面） / 東御市梅野記念絵画館
113 《扇面（書）》 / 1904年 / 墨・紙（扇面） / 財団法人河村美術館 / ＊京都・東京会場のみ展示
114 《絵葉書》 / 1904年 / 水彩・紙 / 財団法人河村美術館 / ＊京都・東京会場のみ展示
115 《眼》 / 1904年 / コンテ・紙 / 東御市梅野記念絵画館
116 《眼（二つ）》 / 1904年 / コンテ・紙
117 《歌入り自画像》 / 1904年 / 鉛筆、チョーク・紙 / 東御市梅野記念絵画館
118 《自画像》 / 1904年 / 鉛筆・紙
119 《男の顔》 / 1904年 / 鉛筆、淡彩・紙
120 《男の肖像》 / 1904年 / 鉛筆、コンテ・紙 / IMA / 日洋575
121 《男の顔》 / 1904年 / 鉛筆・紙
122 《Artistic Anatomy》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
123 《天狗》 / 1904年頃 / 鉛筆、淡彩・紙 / 稲貝興産株式会社
124 《人面スケッチ》 / 1904年 / コンテ・紙
125 《男の顔戯画》 / 1904年頃 / 鉛筆、淡彩・紙
126 《漫画風顔》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
127 《漫画風顔》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
128 《顔 様々》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
129 《シルエットの顔》 / 1904年 / 色鉛筆、墨・紙 / 東御市梅野記念絵画館
130 《仏法図》 / 1904年 / 鉛筆、墨・紙 / 東御市梅野記念絵画館
131 《宇朗像（「せゝらき集」挿絵）》 / 1904年 / 色鉛筆・紙 / 福岡県立美術館
132 《婦人像（「せゝらき集」挿絵）》 / 1904年 / パステル・紙
133 《霜夜語》 / 1904年頃 / 色鉛筆・紙
134 《歌舞伎役者》 / 1904年 / 鉛筆・紙
135 《舞妓のスケッチ》 / 1904年 / 鉛筆、淡彩・紙 / 東御市梅野記念絵画館
136 《女人水墨》 / 1904年頃 / 鉛筆、色鉛筆、墨・紙
137 《帰漁を待つ母子》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
138 《帰漁する父子》 / 1904年 / 鉛筆・紙
139 《帰漁を待つ母子》 / 1904年 / 鉛筆、色鉛筆・紙
140 《海と舟と人》 / 1904年 / 鉛筆・紙
141 《水玉のある風景》 / 1904年 / 鉛筆・紙
142 《海上の市場》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 財団法人河村美術館 / ＊京都・東京会場のみ展示
143 《歌入り戯画》 / 1904年 / 鉛筆・紙
144 《和歌五首》 / 1904年 / 鉛筆・紙
145 《子守》 / 1904年頃 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋296
146 《野良の人々》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 財団法人河村美術館 / ＊久留米会場のみ展示
147 《農耕》 / 1904年頃 / 鉛筆・紙
148 《エスキース》 / 1904年 / 鉛筆・紙
149 《神話の男とかがめる女》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
150 《日本武尊素描》 / 1904年 / コンテ・絹
-

-
- 151 《神話エスキース》 / 1904年 / 鉛筆・紙
152 《女裸像》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
153 《裸体》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
154 《甘楽物語》 / 1904-07年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋581
155 《ギリシャ武人》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
156 《暗黒エスキース》 / 1904年 / 鉛筆・紙
157 《門壁のある風景》 / 1904年 / 鉛筆・紙
158 《カット風の風景》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
159 《カット風の風景》 / 1904年 / 鉛筆・紙 / 東御市梅野記念絵画館
160 《色鉛筆人物デッサン》 / 1904年 / 鉛筆、色鉛筆・紙
161 《女（しおり）》 / 1904年 / インク、墨・紙
162 《通帳通り》 / 1903-04年 / 鉛筆、チョーク・紙
M10 《房総の地図》 / 1904年頃 / 鉛筆・紙
M11 《岩野美術（泡鳴）『夕潮』 1904年12月、日高有隣堂刊》 / IMA
M12 《高島宇朗『せ、らき集』 1927年2月、福永書店刊（改訂増補版）》 / IMA

第3章 描かれた神話 《わだつみのいろこの宮》まで 1904-07年

- 163 《海》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス
164 《自画像》 / 1905年 / 油彩・厚紙 / 三重県立美術館
165 《大穴牟知命》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋197
166 《海景（円光寺板戸）》 / 1905年 / 焼釘による描写・板戸
167 《錦絵》 / 1905年 / 水彩・紙 / 財団法人ウッドワン美術館 / ＊久留米・京都会場のみ展示
168 《真・善・美》 / 1905-06年頃 / 鉛筆・紙 / 神奈川県立近代美術館
169 《門壁の図案》 / 1905-06年頃 / 鉛筆、淡彩・紙
170 《人物群像》 / 1905-06年頃 / 鉛筆、墨・紙
171 《文字のある風景》 / 1905年頃 / 鉛筆、コンテ・紙
172 《女星》 / 1906年 / 油彩・板（羽子板） / 宗教法人パーフェクトリバティー教団
173 《旧約聖書物語挿絵 1.光あれ》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
174 《旧約聖書物語挿絵 2.葦舟のモーゼ》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
175 《旧約聖書物語挿絵 3.紅海のモーゼ》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
176 《旧約聖書物語挿絵 4.ヤエル、シセラを斬る》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
177 《旧約聖書物語挿絵 5.ダビデの聖詠》 / 1906年 / 油彩・カンヴァス / ニューオーサカホテル
178 《旧約聖書物語挿絵 6.ソロモン王とエルサレム》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
179 《旧約聖書物語挿絵 7.ネブカデネザルとダニエル》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
180 《旧約聖書物語挿絵 8.エステルとハマン》 / 1906年 / 油彩・板 / ニューオーサカホテル
181 《光明皇后》 / 1906年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋102
182 《日本武尊》 / 1906年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立博物館 / ＊京都会場のみ展示
183 《狂女》 / 1906年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋381
184 《百日頃のH嬢》 / 1906年 / 色鉛筆・紙 / 福岡県立美術館
185 《幸彦像》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 栃木県立美術館
186 《わだつみのいろこの宮下絵》 / 1907年頃 / 鉛筆・紙
187 《わだつみのいろこの宮下絵》 / 1907年 / 鉛筆・紙
188 《わだつみのいろこの宮下絵》 / 1907年 / 鉛筆・紙
189 《わだつみのいろこの宮下絵》 / 1907年 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
190 《わだつみのいろこの宮下絵》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 栃木県立美術館 / ＊久留米、京都会場のみ展示

-
- 191 《わだつみのいろこの宮》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋104
192 《春惜》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス
193 《妙義山》 / 1907年 / 水彩・紙 / 財団法人ウッドワン美術館 / *久留米、京都会場のみ展示
194 《エスキース》 / 1907年頃 / 色鉛筆・紙
195 《山田義臣氏像》 / 1906年 / 鉛筆、チョーク・紙
196 《本庄スミ氏像》 / 1906年 / 水彩・絹 / 明善同窓会
197 《春の夕（森田恒友との合作）》 / 1905年 / 油彩・板 / 府中市美術館
198 《逝く春（福田たねとの合作）》 / 1906年 / 油彩・カンヴァス / 府中市美術館
199 《ゆく春（福田たねとの合作）》 / 1907年頃 / 油彩・板 / 公益財団法人ひろしま美術館
M13 《青木繁写真（幸彦を抱いた）》 / 1905年 / IMA
M14 《青木繁写真》 / 1907年 / IMA
M15 《梅野満雄宛書簡 1905年》 / 東御市梅野記念絵画館
M16 《梅野満雄宛書簡 1905年》 / 東御市梅野記念絵画館
M17 《内田登喜次宛葉書 1906年11月2日付》
M18 《蒲原有明『春鳥集』 1905年7月、本郷書院刊》 / 野田宇太郎文学資料館
M19 《鑄斧（『春鳥集』口絵）》 / 1905年 / 木口木版
M20 《C. Hubert Letts編『The Hundred Best Pictures』（青木手沢本） 1901年刊》
M21 《中村吉蔵『旧約物語』 1907年1月、金尾文淵堂刊》 / IMA
M22 《『東京勸業博覧会美術館出品図録（西洋画及彫塑之部）』 1907年4月、審美書院刊》 / IMA
M23 《『東京勸業博覧会全図』 1907年2月、博覧時報社刊》 / IMA
M24 《『斉東風語』『方寸』1巻5号（1907年10月、復刻版）》 / IMA
M25 《夏目金之助（漱石）『それから』 1910年1月、春陽堂刊》 / IMA
追加 《福田豊吉宛書簡 1904年7月11日付》

第4章 九州放浪、そして死 1907-11年

- 200 《筑後風景》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立博物館 / *東京会場のみ展示
201 《月下滞船図》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋105
202 《漁夫晚帰》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人ウッドワン美術館 / *久留米・京都会場のみ展示
203 《秋声》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
204 《春》 / 1908年 / 水彩・襖布 / IMA / 日洋106
205 《秋》 / 1908年 / 水彩・襖布 / IMA / 日洋107
206 《晚帰》 / 1908年 / 木炭・紙 / IMA / 日洋497
207 《天草風景》 / 1909年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人大原美術館 / *京都会場のみ展示
208 《二人の少女》 / 1909年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人日動美術財団 笠間日動美術館 / *東京会場のみ展示
209 《白壁の家》 / 1909年 / 油彩・厚紙
210 《佐賀郊外》 / 1909年 / 色鉛筆・紙
211 《春郊》 / 1909-10年頃 / 油彩・板
212 《菊籬》 / 1909-10年頃 / 鉛筆、淡彩・紙
213 《犬五種》 / 1909年 / 鉛筆・紙
214 《書》 / 1909年頃 / 墨・紙（扇面）
215 《温泉》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
216 《佐賀風景》 / 1910年 / 油彩・板 / 佐賀県立美術館
217 《筑後風景》 / 1910年 / 油彩・板 / 財団法人河村美術館
218 《沼》 / 1910年 / 油彩・板
-

-
- 219 《犬》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 島根県立美術館
220 《池畔》 / 1910年 / 油彩・板 / 東御市梅野記念絵画館
221 《海》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
222 《織月帰舟》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
223 《夕焼けの海》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人河村美術館 / *久留米会場のみ展示
224 《朝日（絶筆）》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 佐賀県立小城高等学校同窓会黄城会
225 《谷ちか夫人像》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス
226 《初代富安猪三郎氏像》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス
227 《橋本道達氏像》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
228 《木下秀康大尉像》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
229 《高取伊好氏像》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス
230 《浴女》 / 1910年 / 水彩・紙 / 財団法人河村美術館 / *久留米会場のみ展示
231 《風景》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋447
232 《風景》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
233 《山村風景》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
234 《湯祭》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
235 《橋のある風景》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
236 《山あいの風景》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
237 《明治の女》 / 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙
238 《平島氏像》 / 1910年 / 鉛筆・紙 / 晴明会館
239 《風景》 / 水彩・紙 / 至峰堂画廊
240 《勲章図案》 / 1910年 / 鉛筆・紙
追加 《西洋鎧武者》 / 1910年 / 鉛筆、色鉛筆・紙
M26 《原稿（構図の一分時）》 / 府中市美術館
M27 《原稿（芸術の成立と裸体製作）》 / 府中市美術館
M28 《原稿（美術家の眼に映じたる青葉の佐賀）》 / 府中市美術館
M29 《原稿（断片）》 / 府中市美術館
M30 《梅野満雄宛書簡 1907年7月2日付》 / 東御市梅野記念絵画館
M31 《坂本繁二郎宛葉書 1908年2月21日付》
M32 《坂本繁二郎宛書簡 1909年4月6日付》
M33 《原幸吉宛葉書（賀状） 1910年1月1日付》
M34 《鶴代、たよ子宛書簡（遺書） 1910年11月22日付》 / IMA
M35 《黒田清輝宛葉書（賀状） 1911年1月6日消印》 / 東京文化財研究所
M36 《梅野満雄宛書簡 1911年2月24日付》
M37 《パレット、三脚》 / 東御市梅野記念絵画館
追加 《福田豊吉宛書簡 1909年1月》

第5章 没後、伝説の形成から今日まで

- 241 《秋の夜》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋88
242 《神塞妙義》 / 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋507
243 《女の顔》 / 1904年 / 油彩・板（羽子板） / IMA / 日洋98
244 《雪景》 / 1906年 / 油彩・板 / IMA / 日洋103
M38 《青木まさを書簡（福田豊吉宛） 1911年12月24日消印》 / IMA
M39 《『方寸』5巻3号 1911年7月》 / IMA
M40 《坂本繁二郎書簡（梅野満雄宛） 1911年9月19日付》
M41 《坂本繁二郎書簡（梅野満雄宛） 1911年10月6日付》

-
- M42 《坂本繁二郎書簡（梅野満雄宛） 1911年12月3日付》
M43 《坂本繁二郎葉書（梅野満雄宛） 1912年2月25日消印》
M44 《坂本繁二郎書簡（梅野満雄宛） 1912年4月1日付》
M45 《『青木繁君遺作展覧会目録』 1912年、博文館印刷所刊》 / IMA
M46 《矢代幸雄「青木繁氏の画を見た時」『みづゑ』89号（1912年7月）》 / IMA
M47 《坂本繁二郎葉書（梅野満雄宛） 1912年9月8日消印》
M48 《蒲原有明書簡（梅野満雄宛） 1912年9月19日付》
M49 《蒲原有明書簡（梅野満雄宛） 1912年11月19日付》
M50 《蒲原有明書簡（梅野満雄宛） 1912年11月26日付》
M51 《青木義雄「青木繁の臨終の記」 1913年1月3日付》
M52 《坂本繁二郎葉書（梅野満雄宛） 1913年4月23日消印》
M53 《『青木繁画集』 1913年4月、政教社刊》 / IMA
M54 《『明治大正名作大観 西洋画』 1928年3月、巧藝社刊》 / BMA
M55 《岡本二一「墓前に吹奏する涙の尺八」『キング』7巻4号（1931年4月）》 / IMA
M56 《『明治大正昭和三聖代名作展』 1937年、朝日新聞社刊》 / IMA
M57 《『明治大正昭和三聖代名作美術展覧会目録』 1937年4月、朝日新聞社刊》 / IMA
M58 《『郷土研究筑後』4-8号 1933年》 / 久留米市立中央図書館
M59 《林芙美子「夜猿」『改造』31巻1号（1950年1月）》 / IMA
M60 《『青木繁遺作展覧会図録』 1939年11月、青樹社刊》 / IMA
M61 《河北倫明『青木繁』 1948年4月、養徳社刊》 / IMA

*水彩・スケッチなどは半期ずつの展示。

*IMAは石橋美術館、BMAはブリヂストン美術館の所蔵、表記のないものは個人蔵であることを示す。

関連事業：

プレイイベント→p.66
開催記念美術講座→p.65
ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

蒲敏哉「青木繁の下絵発見『海の幸』など第一級史料60点」『東京新聞』2011年2月16日
「青木繁の下絵 新たに発見『海の幸』スケッチも 福岡で公開へ」『中国新聞』2011年2月16日夕刊
「青木繁の下絵発見 和歌や借用書も 久留米で来月から特別展」『西日本新聞』2011年2月16日夕刊
「青木繁の下絵発見 『海の幸』など史料60点」『日本経済新聞』2011年2月16日夕刊
「青木繁の下絵発見 『わだつみのいろこの宮』など」『毎日新聞』2011年2月16日夕刊
「青木繁名画の下絵など60点」『読売新聞』2011年2月16日夕刊
「青木繁の全貌 新資料で浮き彫り 下絵やデッサン追加展示へ」『西日本新聞』2011年2月17日
「青木繁の重文 不明下絵あった スケッチやメモも 計60点」『朝日新聞』2011年2月17日
「『海の幸』と関連か―『帰漁する父子』石橋美術館が回顧展で公開」『毎日新聞』2011年3月14日
「青木繁の実像に迫る きょうから『没後100年展』」『西日本新聞』2011年3月25日
「青木繁展、きょう開幕」『西日本新聞』2011年3月25日

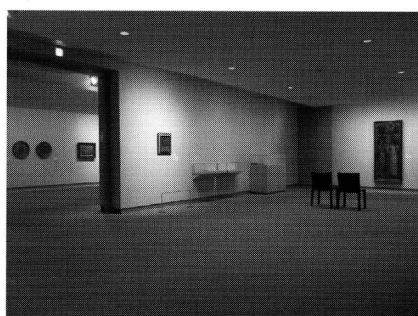
「ふるさと 人・話題」『西日本新聞』2011年3月26日
「九州新幹線全線開業 久留米 青木の大回顧展も開催中」『読売新聞』2011年3月27日
「過去最大規模の300点 青木繁 久留米で没後100年記念展」『毎日新聞』2011年3月28日
森山秀子「青木繁と蒲原有明」『西日本文化』no.450、2011年4月号、pp.52-56
藤原賢吾 / 塚崎謙太郎「天を仰いで 没後100年・青木繁」上、中、下『西日本新聞』2011年4月5日、6日、8日
窪田直子「『海の幸』に豊かな解釈 青木繁 没後100年回顧展」『日本経済新聞』2011年4月11日夕刊
「伝説に彩られたその画業『青木繁』」『百兵衛』no.17、2011年4月号、pp.14-29
「青木繁 古里で[没後100年展]」『読売新聞』2011年4月14日
田竈良太「解体『あ・お・き・し・げ・る』」1～6『西日本新聞』2011年4月19日～24日
「『甘楽物語』新たに所蔵」『西日本新聞』2011年4月19日
田竈良太「青木作品の秘密に迫る」『西日本新聞』2011年4月19日
西正之「画業10年の疾走 青木繁 没後100年 回顧展」『朝日新聞』2011年4月20日夕刊
白石知子「没後100年回顧展 青木繁 伝説の深層へ」『読売新聞』2011年4月21日
「風車 青木繁の呼びかけ」『西日本新聞』2011年4月22日
森山秀子「自ら天才を演じた青木 没後100年 青木繁展に寄せて」『西日本新聞』2011年5月4日
「巻頭特集 今なぜ青木繁なのか」『美術の窓』no.332、2011年5月号、pp.5-36
金子徹「没後100年 失意の天才が放つ鮮烈な光彩」『しんぶん赤旗』2011年6月12日日曜版
森村泰昌「没後100年 青木繁展 よみがえる神話と芸術」『クロワッサンプレミアム』8月号、2011年6月
高階秀爾「青木繁の画業 大胆な発想と新鮮な自然表現」『毎日新聞』2011年6月23日夕刊
「特集 没後100年 青木繁 ゴーマン画家の愛と孤独」『芸術新潮』2011年7月号、2011年7月
渋谷和彦「『海の幸』遺して早世 没後100年 青木繁の回顧展」『産経新聞』2011年7月31日
宝玉正彦「画家たちの対比列伝 1 熊谷守一と青木繁」『日本経済新聞』2011年8月7日
白石知子「回顧2011 美術 青木繁 香月泰男 郷里で画業再評価 菊畑茂久馬 野見山暁治 現役重鎮も健在」『読売新聞』2011年12月13日夕刊
岸桂子「この1年 美術『今できること』探る『再生』『鎮魂』テーマに多くの共感」『毎日新聞』2011年12月15日夕刊
藤原賢吾「回顧2011美術 言葉を超越新しい境地へ 示唆与えるベテランの存在」『西日本新聞』2011年12月21日

テレビ・ラジオ：

「青木繁×津田寛治 現実を超えてこそ美がある」NHK BS2（男前列伝）、2011年2月19日放映
「没後100年～生と死の絵画」NHK 教育テレビ（福岡）、2011年4月23日放映



会場風景



会場風景

もっと知る美術・展 名作選〈コレクション展示〉

会期：2011年5月25日(水)－6月19日(日)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館

後援：久留米市

概要：2010年発行の『石橋美術館名作選』に掲載した選りすぐりの作品を中心に、コレクションの多様性を紹介したもの。本館に日本近代洋画と彫刻を、別館に日本の書画、東アジアの陶磁器、オリエントのガラスを展示。

出品内容：油彩95点、水彩等8点、書画5点、工芸9点、彫刻2点 計119点

入場者総数：2,306人(1日平均：100人)

出品目録：

本館

1. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
2. 百武兼行《臥裸婦》/ 1881年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋2
3. 浅井忠《樹下の女》/ 1901年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋291
4. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
5. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
6. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
7. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋12
8. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》/ 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 日洋21
9. 藤島武二《ネミ湖》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋24
10. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
11. 藤島武二《浪（大洗）》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋48
12. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
13. 藤島武二《奈良風景》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋52
14. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / 日洋56
15. 岡田三郎助《薔薇の少女》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋231
16. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 日洋63
17. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
18. 満谷国四郎《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋69
19. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
20. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋65
21. 和田英作《早春（富士）》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
22. 吉田博《ウダイプール宮殿》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
23. 吉田博《奔流》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
24. 石井柏亭《傘松（ナポリ風景）》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋109

-
25. 小杉未醒《採果童子》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋545
 26. 山下新太郎《ブルターニュの女》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋206
 27. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
 28. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋204
 29. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
 30. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
 31. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
 32. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 日洋300
 33. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
 34. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
 35. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
 36. 坂本繁二郎《能面と鼓の胴》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / 日洋568
 37. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋120
 38. 辻永《春（パリ郊外）》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋117
 39. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
 40. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
 41. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋133
 42. 松田諦晶《刈跡》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋506
 43. 小出檐重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
 44. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
 45. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋142
 46. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
 47. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
 48. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
 49. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
 50. 高島野十郎《筑紫観世音寺》/ 1952年 / 油彩・カンヴァス / 日洋466
 51. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋229
 52. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
 53. 須田国太郎《禱原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
 54. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
 55. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156
 56. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159
 57. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋203
 58. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277
 59. 古賀春江《自画像》/ 1916年 / 水彩・紙 / 日洋322
 60. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋168
 61. 古賀春江《誕生》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋167
 62. 古賀春江《静物》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / 日洋302
 63. 古賀春江《美しき博覧会》/ 1926年 / 水彩・紙 / 日洋321
 64. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
 65. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
 66. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
 67. 中西利雄《ピアノのある部屋》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋181
 68. 佐伯祐三《コルドヌリ（靴屋）》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173
 69. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
 70. 荻須高德《角の居酒屋》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋281
-

-
71. 伊東静尾《土》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋342
 72. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
 73. 猪熊弦一郎《犬と猫》/ 1954年 / グワッシュ、ペン、インク、鉛筆・紙 / 日洋486
 74. 海老原喜之助《青年像》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋286
 75. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187
 76. 野見山晁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 日洋520
 77. 平野遼《朝》/ 1991年 / 油彩・カンヴァス / 日洋532
 78. 松本英一郎《退屈な風景 茶畑》/ 1974年 / 油彩・カンヴァス / 日洋553
 79. 白瀧幾之助《炉端》/ 油彩・板 / 日洋235
 80. 満谷国四郎《瀬戸内海風景》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋234
 81. 山下新太郎《藤》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 日洋434
 82. 金山平三《習作・女》/ 1915-34年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋222
 83. 和田三造《海》/ 油彩・カンヴァス / 日洋254
 84. 和田三造《風景（教会の見える）》/ 油彩・カンヴァス / 日洋255
 85. 辻永《六月の高原》/ 1953年 / 油彩・カンヴァス / 日洋259
 86. 三上知治《橋のある風景（フィレンツェ）》/ 油彩・カンヴァス / 日洋275
 87. 安井曾太郎《北京風景》/ 1944年 / 鉛筆、パステル、水彩・紙 / 日洋266
 88. 安井曾太郎《北京風景》/ 1944年頃 / 水彩、鉛筆・紙 / 日洋267
 89. 梅原龍三郎《桜島》/ 1935年 / 油彩・紙 / 日洋274
 90. 平賀亀祐《古い巴里の街角》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋151
 91. 岡見富雄《港》/ 油彩・カンヴァス / 日洋465
 92. 林俊衛《フランス風景》/ 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋171
 93. 山村秀一《船溜り》/ 水彩・紙 / 日洋513
 94. 清水多嘉示《衣裳室》/ 1926年 / 油彩・板 / 日洋472
 95. 田崎廣助《風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋278
 96. 井上三綱《収穫》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋289
 97. 高田力蔵《アテネのエレクトイオン》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385
 98. 猪熊弦一郎《樹と山》/ 1945年 / 油彩・カンヴァス / 日洋183
 99. 三岸節子《フランス風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋287
 100. 脇田和《鳥を飼う人》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋186
 101. 川端実《作品（B）》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 日洋189
 102. 内野秀美《黒い月》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 日洋529
 103. 古沢岩美《地の塩》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 日洋218
 104. 豊福知徳《透過する立像（白）》/ 1991年 / 木（マホガニー）・彩色 / 日彫19
 105. 豊福知徳《半円柱1》/ 1964年 / ブロンズ / 日彫15

別館

106. 狩野典信《墨松墨梅図屏風》/ 江戸時代（18世紀）/ 紙本金地墨画 / 日書52
 107. 上村松篁《春日》/ 1996年 / 紙本金地著色 / 日書94
 108. シリア・パレスチナ《突起文瓶》/ 3世紀 / ガラス / 雑51
 109. イラン《白搔落象文鉢》/ 11-12世紀 / 陶器 / 陶器117
 110. 《色絵菊流水文皿》/ 江戸時代（1660-70）/ 磁器 / 陶器207
 111. 《瀬戸肩衝茶入》/ 江戸時代（17世紀）/ 陶器 / 陶器271
 112. 《萩茶碗》/ 江戸時代（17世紀）/ 陶器 / 陶器275
 113. 《青磁鉄斑文瓶（飛青磁花瓶）》/ 元時代（14世紀）/ 磁器 / 陶器233
 114. 江馬長閑《須磨明石蒔絵小硯函》/ 近代 / 漆器 / 漆器10
-

115. 豊田勝秋《鑄銅花さし》/ 1931年 / 鑄銅 / 雑47
116. 《青釉龍文壺》/ 元時代(14世紀) / 磁器 / 陶器234
117. 狩野周信《琴高仙人図》/ 江戸時代(17世紀末-18世紀初頭) / 絹本墨画 / 日書51
118. 小田海僊《老子花鳥図》/ 1832年 / 絹本著色 / 日書56
119. 堅山南風《鯉》/ 近代 / 絹本著色 / 日書35

* 寄託作品以外は、すべて石橋美術館蔵。

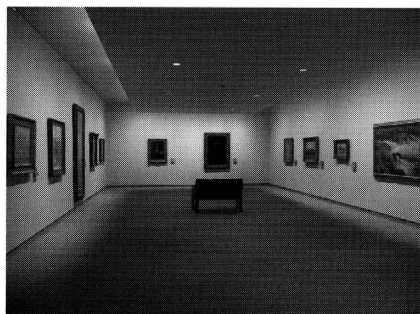
関連事業：

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

「連なる近代洋画の名作」『西日本新聞』2011年5月28日



会場風景



会場風景



会場風景



本館前看板

九州新幹線・久留米駅開業記念 高島野十郎 里帰り展〈特別展〉

会期：2011年7月1日(金)～8月21日(日)

会場：本館、別館9室

主催：石橋財団石橋美術館 / 久留米市 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送

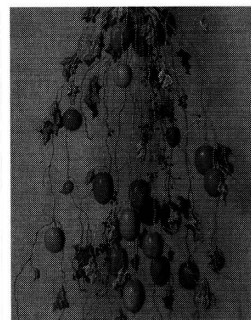
後援：久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会 / NHK福岡放送局

特別協力：福岡県立美術館

概要：久留米出身の洋画家・高島野十郎（1890-1975）の展覧会を開催したいという久留米市の要望に応じて開催。写実に徹した彼の画業と修行僧がごとき絵ひとすじの生涯を、福岡県立美術館所蔵の39点（うち作品34点）、初公開作品約30点を含む計156点で紹介、野十郎の絵の魅力をアピールした。別館9室には、野十郎の蠟燭作品と石橋美術館所蔵の日本近代洋画13点を展示した。

出品内容：油彩146点、デッサン4件、資料6件 計156件

入場者総数：25,912人(1日平均：551人)



野十郎の魅力、久留米で再発見。



展覧会チラシ

出品目録：

第1章 画家・野十郎の誕生

- 1 《蓮華》 / 1904-09年頃 / 油彩・カンヴァス
- 2 《傷を負った自画像》 / 1914年頃 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 3 《静物》 / 1918年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 4 《絡子をかけたる自画像》 / 1920年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 5 《煙（夜の）》 / 1921年 / 油彩・板
- 6 《早春》 / 1921年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 7 《枯草の郊外》 / 1921年 / 油彩・板 / 閑々堂
- 8 《百合とヴァイオリン》 / 1921-26年 / 油彩・カンヴァス / 目黒区美術館
- 9 《つりさげられた鳥》 / 1922年 / 油彩・板
- 10 《鉢と茶碗》 / 1922年 / 油彩・カンヴァス
- 11 《椿》 / 1922年 / 油彩・カンヴァス
- 12 《りんごを手にした自画像》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 13 《壺とりんご》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 14 《椿とりんごのある静物》 / 1912-26年 / 油彩・カンヴァス
- 15 《断崖の上》 / 1924年 / 油彩・板
- 16 《壺とりんご》 / 1912-26年 / 油彩・カンヴァス
- 17 《けし》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 三鷹市美術ギャラリー
- 18 《落暉》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 東京大学大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻
- 19 《牡丹花》 / 1926年頃 / 油彩・カンヴァス / 目黒区美術館
- 20 《向日葵》 / 油彩・板
- 21 《岸上鎌吉先生像》 / 1921-26年 / 油彩・カンヴァス / 東京大学大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻
- 22 《魚介類の観察図（全52枚のうち）》 / 1915年頃 / 鉛筆、ペン（一部の作品は着彩）・紙 / 福岡県立美術館

第2章 ヨーロッパ遊学

- 23 《小さき停車場》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス（厚紙に貼付）
- 24 《霧と煙 ニューヨーク》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 25 《ノートルダムとモンターニュ通》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 26 《セース河畔》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 27 《日曜日の夕方 巴里オーステリッツ橋》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス
- 28 《川辺の道》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 29 《パリ郊外》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス
- 30 《石畳の道》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 31 《秋たけなは》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 32 《秋葉散る頃》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館寄託
- 33 《ウアンサンマの森》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス
- 34 《小川のほとり 巴里南郊ビエブル川》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス
- 35 《梨の花》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人恵愛団
- 36 《ベニスの港》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス
- 37 《ベニスの昼》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァスボード / IMA / 日洋467
- 38 《帆船》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス
- 39 《イタリヤの海 キオッジア漁村》 / 1930-32年 / 油彩・カンヴァス

第3章 ものへのまなざし

- 40 《春になる》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス
- 41 《ぼたん》 / 油彩・カンヴァス
- 42 《さくらんぼ》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス（板に貼付） / 福岡県立美術館寄託
- 43 《すもも》 / 油彩・カンヴァス
- 44 《桃とすもも》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス
- 45 《ぶどうとザクロ》 / 1934年 / 油彩・カンヴァス
- 46 《洋梨とブドウ》 / 1941年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 47 《洋梨とぶどう》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 48 《葡萄》 / 油彩・カンヴァス
- 49 《壺とグラスと果実》 / 1935-44年 / 油彩・カンヴァス
- 50 《柿》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス
- 51 《柿とぶどう》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス
- 52 《赤いリンゴ》 / 1938年 / 油彩・カンヴァス
- 53 《壺とリンゴ》 / 1943年頃 / 油彩・カンヴァス
- 54 《青いリンゴ》 / 1953年 / 油彩・板 / 三鷹市美術ギャラリー寄託
- 55 《壺とりんご》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス
- 56 《壺とりんご》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス
- 57 《菊の花》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス
- 58 《菊とリンゴ》 / 油彩・カンヴァス
- 59 《からすうり》 / 油彩・カンヴァス
- 60 《割れた皿》 / 1958年頃 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
- 61 《煙草を手にした自画像》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 62 《外山亀太郎先生像》 / 1941年 / 油彩・カンヴァス / 東京大学大学院農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻昆虫遺伝研究室

第4章 自然へのまなざし

- 63 《筑後川遠望》 / 1949年頃 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
- 64 《春の海》 / 1952年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 65 《御苑の春》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 66 《御苑の大樹》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付） / 野田市郷土博物館
- 67 《大樹のある野》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 68 《春の富士》 / 1960年頃 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 69 《海岸風景》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 慶應義塾
- 70 《海岸》 / 油彩・カンヴァス / 柏市
- 71 《早春池畔》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
- 72 《境内の桜》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 73 《寧楽の春》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
- 74 《空の塔 奈良薬師寺》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス
- 75 《萌え出づる森》 / 1965年頃 / 油彩・カンヴァス
- 76 《草間の小川》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス
- 77 《れんげ草》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス
- 78 《菜の花》 / 1965年頃 / 油彩・カンヴァス / ブルーミング中西株式会社
- 79 《法隆寺塔》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス
- 80 《雨 法隆寺塔》 / 1965年頃 / 油彩・カンヴァス
- 81 《山みち》 / 1948年 / 油彩・カンヴァス
- 82 《初夏の野路》 / 1955年頃 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 83 《流》 / 1957年頃 / 油彩・カンヴァス / 杏林大学
- 84 《溪谷》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 85 《すいれんの池》 / 1949年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 86 《空》 / 油彩・カンヴァス
- 87 《ひまわり》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 88 《秋の花々》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス
- 89 《高原の道》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 90 《高原の秋》 / 1959年頃 / 油彩・カンヴァス
- 91 《越ヶ谷》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 92 《八ヶ岳への道》 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
- 93 《山の秋》 / 1942年 / 油彩・カンヴァス
- 94 《観世の夕映》 / 1952年 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 95 《筑紫観世音寺》 / 1952年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋466
- 96 《林径秋色》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス
- 97 《古池》 / 1945-47年 / 油彩・カンヴァス
- 98 《雨の奥利根》 / 1939年 / 油彩・板
- 99 《石神井池》 / 1965年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 福岡県立美術館
- 100 《朝霧》 / 1941年 / 油彩・カンヴァス
- 101 《高山初雪》 / 1943年 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 102 《雪景》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 103 《積る》 / 油彩・カンヴァス
- 104 《雪の村》 / 1958年 / 油彩・板
- 105 《雪》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
- 106 《雪晴れ》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 107 《睡蓮》 / 1975年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館

-
- 108 《〈農家〉のデッサン》 / 鉛筆・紙 / 福岡県立美術館
109 《〈積る〉のデッサン》 / 鉛筆・紙 / 福岡県立美術館

第5章 まなごしの光

- 110 《松林夕陽》 / 油彩・カンヴァス
111 《太陽と田園》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス
112 《太陽》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス
113 《秋陽》 / 1965年頃 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
114 《林辺太陽》 / 1967年頃 / 油彩・カンヴァス / 東京大学医科学研究所
115 《無題》 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
116 《太陽》 / 1975年 / 油彩・カンヴァス
117 《〈太陽〉のデッサン》 / 色鉛筆、コンテ・紙 / 福岡県立美術館
118 《月の出》 / 油彩・カンヴァス
119 《山の夕月》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
120 《夕月》 / 1961年頃 / 油彩・カンヴァス
121 《月》 / 1961年以降 / 油彩・板
122 《月》 / 1962年頃 / 油彩・カンヴァス
123 《有明の月》 / 1961年以降 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
124 《満月》 / 1963年頃 / 油彩・カンヴァス / 東京大学医科学研究所
125 《月》 / 1961年以降 / 油彩・カンヴァス
126 《月》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス
127 《月》 / 1963年頃 / 油彩・カンヴァス
128 《月》 / 1963年頃 / 油彩・カンヴァス
129 《春の夜》 / 油彩・板
130 《蠟燭》 / 1912-26年 / 油彩・板 / 福岡県立美術館
131 《蠟燭》 / 1935年 / 油彩・板
132 《蠟燭》 / 油彩・板
133 《蠟燭》 / 1934年頃 / 油彩・カンヴァス
134 《蠟燭》 / 油彩・板
135 《蠟燭》 / 油彩・板
136 《蠟燭》 / 油彩・板
137 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
138 《蠟燭》 / 油彩・板
139 《蠟燭》 / 油彩・板
140 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァスボード
141 《蠟燭》 / 油彩・板
142 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
143 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァスボード
144 《蠟燭》 / 油彩・板
145 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァスボード
146 《蠟燭》 / 1959年 / 油彩・板
147 《蠟燭》 / 油彩・板
148 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァス（板に貼付）
149 《蠟燭》 / 油彩・カンヴァス / 三鷹市美術ギャラリー
150 《不知題》 / 1962年頃 / 油彩・板 / ブルーミング中西株式会社

資料

- 151 《葉書（1963年4月9日付）》
- 152 《手紙（1966年2月25日付）》 / 福岡県立美術館
- 153 《遺稿ノート》
- 154 《増尾高島画室縁起》 / 1961-62年 / 福岡県立美術館
- 155 《絵葉書》 / 福岡県立美術館
- 156 《作品写真》 / 福岡県立美術館

*IMAは石橋美術館の所蔵、表記のないものは個人蔵であることを示す。

関連事業：

開催記念美術講座→ p.65

ギャラリートーク

漫才トーク→ p.66

広報記録：

新聞・雑誌：

「久留米出身の洋画家・高島野十郎 23年ぶり『里帰り展』」『毎日新聞』2011年6月25日

「高島野十郎の魅力存分に 石橋美術館明日から回顧展 写実極めた作品計200点」『西日本新聞』2011年6月30日

藤田中「凝視の先に 画家・高島野十郎」上、中、下『西日本新聞』2011年7月12日～14日

「高島野十郎からの『手紙』『描くことは生きること』」『西日本新聞』2011年7月13日

田籠良太「拝啓 高島野十郎さま」1～6、追伸『西日本新聞』2011年7月13日～19日

「故郷で高島野十郎展、変わる『孤高の画家』像」『日本経済新聞』2011年7月26日

白石知子「高島野十郎 里帰り展 追求した『慈悲』のまなざし」『読売新聞』2011年8月2日夕刊

文＝藤田中 写真＝金田達依「『高島野十郎里帰り展』凝視の先の世界を開示」『西日本新聞』2011年8月5日

八尋紀子「孤高の画家 根強い人気 久留米出身『高島野十郎里帰り展』」『朝日新聞』2011年8月17日夕刊

Web：

「岡村嘉子のアート旅行記」フジテレビWEBサイト

テレビ・ラジオ：

「日曜美術館 アートシーン」NHK教育テレビ、2011年7月17日放映

「ルックアップふくおか 金曜日～週末チェックウ！」TVQ、2011年8月5日放映



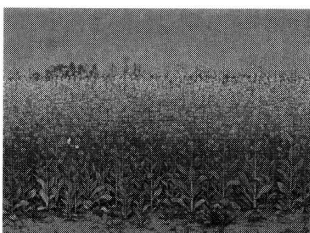
会場風景



会場風景



会場風景



久留米で、
春から、
はじまる。

青木 繁雄 正倉院の春の風景、春の
高島野十郎・里帰り展
野見山晩治展
九州新幹線・久留米駅開業記念
石橋美術館 特別展

プレポスター

野見山暁治展〈特別展〉

会期：2011年9月1日(木)－10月16日(日)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 公益財団法人久留米文化振興会 / NHK福岡放送局

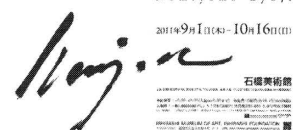
概要：石橋美術館とブリヂストン美術館で共同企画した野見山暁治(1920-)の回顧展。中学美術部時代の自画像から今年えがかれた作品まで、油彩画を中心に、水彩、版画、本の表紙絵など総数128点を展示。展覧会オープン4日前に描きあげた《ある歳月》も特別出品。展示構成は、久留米と東京の会場ごとにアレンジし、それぞれの会場で配布した出品目録で記録する。久留米会場では、野見山暁治による作品選出、寸評を付してコレクションを紹介するコーナーも設けた。

出品内容：油彩68点、水彩等33点、版画15点、表紙絵等6点 計122点

入場者総数：8,415人(1日平均：200人)



野見山暁治展
NOMIYAMA GYOJI



展覧会ポスター

出品目録：

Paintings

- 1 《自画像》 / 1937年 / 油彩・板
- 2 《渋谷風景》 / 1938年 / 油彩・カンヴァス
- 3 《札幌の冬》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / *久留米会場のみ展示
- 4 《糸満》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス
- 5 《妹の像》 / 1943年 / 油彩・カンヴァス
- 6 《二の丸焼跡》 / 1946年 / 油彩・カンヴァス / *久留米会場のみ展示
- 7 《焼跡の福岡県庁》 / 1946年頃 / 油彩・カンヴァス
- 8 《自画像》 / 1947年頃 / 油彩・板
- 9 《骸骨》 / 1947年 / 油彩・カンヴァス
- 10 《花と瓶》 / 1948年 / 油彩・カンヴァス
- 11 《花と骸骨》 / 1948年頃 / 油彩・カンヴァス
- 12 《海峡》 / 1948年 / 油彩・カンヴァス
- 13 《病める女》 / 1950-52年 / 油彩・カンヴァス / 北九州市立美術館
- 14 《港風景》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / *久留米会場のみ展示
- 15 《廃坑 (A)》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
- 16 《廃坑 (B)》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス
- 17 《廃坑 (C)》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス
- 18 《廃坑 (D)》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / *久留米会場のみ展示
- 19 《群像 (坑内)》 / 1952年 / 油彩・カンヴァス
- 20 《ベルギーのボタ山》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 国立国際美術館
- 21 《ベルギーの炭坑》 / 1955-56年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *東京会場のみ展示、後期
- 22 《工事場》 / 1956年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *久留米会場前期・東京会場前期
- 23 《丘 (クレーン)》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 練馬区立美術館
- 24 《グランド・ショミエール》 / 1953年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期

-
- 25 《脱ぐ女》 / 1954年 / インク、グワッシュ・紙 / 奈良県立美術館 / *久留米会場後期・東京会場後期
26 《半身像》 / 1956-58年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *久留米会場後期・東京会場後期
27 《ブラッセルの女》 / 1957年 / インク、グワッシュ・紙 / 東京国立近代美術館 / *久留米会場前期・東京会場前期
28 《アニタ (I)》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス
29 《シャワーの女》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 北九州市立美術館
30 《岩上の人》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
31 《岩上の人エスキース》 / 1958年 / 鉛筆・紙
32 《室内の人》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 横須賀美術館
33 《落日》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 練馬区立美術館
34 《風景 (ライ・レ・ローズ)》 / 1960年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
35 《岩》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 株式会社戸高鉱業社
36 《人間》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 福岡市美術館
37 《虚空》 / 1962年頃 / 油彩・カンヴァス / 高松市美術館
38 《冬の樹》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス
39 《アンダルシア》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス
40 《蔵王》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
41 《海坊主》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス
42 《風景》 / 1971年 / 油彩・カンヴァス / 北九州市立美術館
43 《タヒチ》 / 1974年 / 油彩・カンヴァス / *東京会場のみ展示
44 《古びた衣裳》 / 1974年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *久留米会場後期・東京会場後期
45 《九月の空》 / 1972年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *久留米会場前期・東京会場前期
46 《波に打ち上げられた水筒》 / 1971-72年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
47 《異邦人》 / 1973年 / 油彩・カンヴァス / 練馬区立美術館
48 《黄色い風景》 / 1980年 / 油彩・カンヴァス / 坂本善三美術館
49 《遠ざかった景色》 / 1981年 / 油彩・カンヴァス / 福岡県立美術館
50 《近づいてきた景色》 / 1981年 / 油彩・カンヴァス / 株式会社西日本シティ銀行
51 《ある日》 / 1982年 / 油彩・カンヴァス / 練馬区立美術館
52 《穹》 / 1983年 / 油彩・カンヴァス / 株式会社西日本シティ銀行 / *久留米会場のみ展示
53 《戸高鉱業の山》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 株式会社戸高鉱業社
54 《山から》 / 1984年 / インク、グワッシュ・紙 / 練馬区立美術館 / *久留米会場後期・東京会場後期
55 《鉱山から》 / 1984年 / インク、グワッシュ・紙 / IMA / 日洋521 / *久留米会場前期・東京会場前期
56 《終日》 / 1986年 / 油彩・カンヴァス
57 《冷たい夏》 / 1991年 / 油彩・カンヴァス / 埼玉県立近代美術館
58 《部屋の中の海》 / 1990年 / 油彩・カンヴァス / *東京会場のみ展示
59 《誰かが来る》 / 1990年 / 油彩・カンヴァス
60 《今朝の海》 / 1990年頃 / インク、グワッシュ・紙 / *東京会場のみ展示、後期
61 《流れゆく階段》 / 1990年頃 / インク、グワッシュ・紙 / *東京会場のみ展示、前期
62 《ある証言》 / 1992年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
63 《ぼくの生まれた川オング》 / 1992年 / 油彩・カンヴァス / 田川市美術館
64 《目にあまる景色》 / 1996年 / 油彩・カンヴァス / 練馬区立美術館
65 《風の便り》 / 1997年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋520
66 《なににも言わない》 / 1997年 / 油彩・カンヴァス
67 《もう時間がない》 / 1999年 / 油彩・カンヴァス
68 《待ちぼうけ》 / 2000年 / 油彩・カンヴァス
-

-
- 69 《そら耳》 / 1999年 / 油彩・カンヴァス
70 《産声をあげる神野山》 / 2004年 / 油彩・カンヴァス / 株式会社戸高鉱業社
71 《産声をあげる神野山》 / 2004年 / 鉛筆・紙 / 株式会社戸高鉱業社 / *久留米会場のみ展示
72 《産声をあげる神野山》 / 2004年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / 株式会社戸高鉱業社 / *久留米会場のみ展示
73 《産声をあげる神野山》 / 2004年 / リトグラフ・紙 / 株式会社戸高鉱業社 / *久留米会場のみ展示
74 《もっと遠く》 / 2004年 / 油彩・カンヴァス
75 《言いたいことばかり》 / 2006年 / 油彩・カンヴァス
76 《これだけの一日》 / 2006年 / 油彩・カンヴァス
77 《予感》 / 2006年 / 油彩・カンヴァス
78 《誰にも負けない》 / 2008年 / 油彩・カンヴァス
79 《また会った》 / 2008年 / 油彩・カンヴァス
80 《誰にも言うな》 / 2008年 / 油彩・カンヴァス
81 《あしたの場所》 / 2008年 / 油彩・カンヴァス
82 《いつかは会える》 / 2007年 / 油彩・カンヴァス / *東京会場のみ展示
83 《海の向こうから》 / 2010年 / 油彩・カンヴァス / *久留米会場のみ展示
84 《ごくらくトンボ》 / 2010年 / 油彩・カンヴァス
85 《ままならぬ景色》 / 2010年 / 油彩・カンヴァス
86 《黙っていよう》 / 2011年 / 油彩・カンヴァス
87 《遠い日のこと》 / 2010年 / 油彩・カンヴァス
88 《かけがえのない空》 / 2011年 / 油彩・カンヴァス

Watercolors and Gouaches

- 89 《はるかな地》 / 1987年 / グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示、前期
90 《予感》 / 1987年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場後期・東京会場後期
91 《海の柱》 / 1990年 / インク、オイルスティック・紙 / *久留米会場のみ展示
92 《か・い・だ・ん》 / 1990年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示
93 《どこにいるのか》 / 1991年 / インク、グワッシュ・紙 / 株式会社丸井グループ / *久留米会場後期・東京会場前期
94 《夕暮》 / 1991年 / グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
95 《流れにそって》 / 1992年 / グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
96 《さっきは御免》 / 1994年 / 鉛筆、グワッシュ・和紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
97 《忘れていたこと》 / 1998年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
98 《コーヒーを飲もう》 / 1998年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
99 《独りがいい》 / 2001年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示、前期
100 《こんな午後》 / 2001年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示、前期
101 《時がたつ》 / 2001年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示、前期
102 《見送った日》 / 2004年頃 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場後期
103 《聴こえるだろ》 / 2003年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場後期
104 《季節がかわる》 / 2006年 / グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
105 《とおい明日》 / 2006年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場後期
106 《いたずらな景色》 / 2006年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場後期

Prints

- 107 《『旅と雲』》 / 1991年 / リトグラフ / *久留米会場後期・東京会場後期
108 《旅の途中》 / 1994年 / エッチング、ソフトグラウンドエッチング、ドライポイント、手彩色 / *久留

米会場後期・東京会場後期

- 109 《初めての日》/ 1995年 / シルクスクリーン / *久留米会場後期・東京会場後期
- 110 《誰もいない》/ 1995年 / シルクスクリーン / *久留米会場後期・東京会場後期
- 111 《うわっつら》/ 1999年 / モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場前期
- 112 《ぼくのすべて》/ 1999年 / モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場後期
- 113 《いたずらな部屋》/ 2004年 / カーボラダム、モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場後期
- 114 《ほんとのこと》/ 2004年 / カーボラダム、モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場後期
- 115 《短い夜》/ 2006年 / リトグラフ / *久留米会場後期・東京会場前期
- 116 《足音がする》/ 2006年 / リトグラフ、モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場前期
- 117 《ほのかなアンニュイ》/ 2009年 / ソフトグラウンドエッチング、アクアチント / *久留米会場後期・東京会場前期
- 118 《肌色のアンニュイ》/ 2009年 / ソフトグラウンドエッチング、アクアチント / *久留米会場後期・東京会場前期
- 119 《誰も知らない》/ 2009年 / コラグラフ / *久留米会場後期・東京会場後期
- 120 《見たような景色》/ 2009年 / コラグラフ / *久留米会場後期・東京会場後期
- 121 《明日にしよう》/ 2009年 / モノタイプ / *久留米会場後期・東京会場前期

Book Designs and Writings

- 122 《『四百字のデッサン』 文庫本カバー装画》/ 1982年 / インク、グワッシュ・紙 / *東京会場前期
- 123 《『新潮』5月号表紙絵（もう泣かない）》/ 1983年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示
- 124 《『新潮』3号表紙絵（気やすめの場所）》/ 1983年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場のみ展示
- 125 《『しま』原画（どこにもいかないで!）》/ 1999年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / *久留米会場前期・東京会場前期
- 126 《『しま』原画（ゆうひがうみのかいだんをおりていく）》/ 1999年 / インク、グワッシュ・紙 / *久留米会場後期・東京会場後期
- 127 《『ケムクジャーラ』下絵》/ 2007年 / インク、オイルスティック・紙 / *東京会場後期
- 128 《自画像》/ 2011年 / オイルスティック・紙

*IMAは石橋美術館の所蔵、表記のないものは個人蔵であることを示す。

関連事業：

.....
展覧会イベント→ p.65

広報記録：

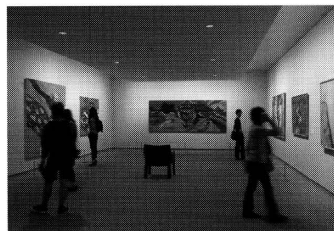
新聞・雑誌：

「東北への思い込め『野見山暁治展』きょうから 久留米市」『西日本新聞』2011年9月1日
田箆良太「『命』問い直し 野見山暁治さん 大震災 最新作に影響 きょうから回顧展 創作意欲新たに」
『西日本新聞』2011年9月1日
松尾雅也「『野見山暁治回顧展』きょう開幕 石橋美術館 最新作まで130点紹介」『毎日新聞』2011年9月1日
「画業70年たどる128点 『野見山暁治展』が開幕 石橋美術館」『西日本新聞』2011年9月2日
「空襲体験思わせた被災地の光景 野見山作品『命』の問い 開業70余年 石橋美術館で回顧展」『読売新聞』
2011年9月3日
白石知子「野見山暁治 回顧展 鮮やか 90歳の新境地」『読売新聞』2011年9月6日夕刊
「振り返る創作の軌跡 野見山暁治展 来月16日まで石橋美術館」『西日本新聞』2011年9月10日夕刊

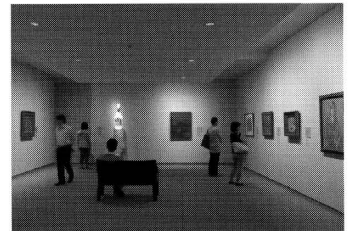
金子徹「90歳現役画家 野見山暁治さん 生きるとは 命とは……」『しんぶん赤旗』2011年9月11日
 藤原賢吾「命を描く 野見山暁治回顧展 記者の目」『西日本新聞』2011年9月13日
 野見山暁治「命を描く 野見山暁治 自ら回顧展を語る」『西日本新聞』2011年9月14日
 後藤新治「命を描く 野見山暁治回顧展 美術史家の目」『西日本新聞』2011年9月15日
 田箆良太「回顧展の作品テーマに対談 作家・村田さんと画家・野見山さん」『西日本新聞』2011年9月16日
 「『壊れたような絵』野見山さん 『絵が走ってる』村田さん 石橋美術館回顧展めぐり対談」『西日本新聞』2011年9月18日
 田箆良太「野見山暁治さんがデザイン Tシャツなどを販売」『西日本新聞』2011年9月22日
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君から10の質問 Q1東北に行ったの？ Q2何を描いてきたの？」『西日本新聞』2011年9月26日
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君から10の質問 Q3戦争画って無いの？ Q4じゃあ何描いたの？」『西日本新聞』2011年9月27日
 西正之「風景が問いかける生 90歳の現役画家 野見山暁治展」『朝日新聞』2011年9月28日夕刊
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君からの10の質問 Q5繁二郎の思い出は？ Q6同級生の青木繁は？」『西日本新聞』2011年9月28日
 「野見山さん寸評の20点展示 藤田嗣治『彼の戦争画は反戦的だ』坂本繁二郎「会うたび縮むお爺さん」」『西日本新聞』2011年9月28日
 「被災地に戦時の記憶重ね 野見山暁治さん、新たに大作」『読売新聞』2011年9月29日
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君から10の質問 Q7なぜ大きくなるの？ Q8タイトルの意味は？」『西日本新聞』2011年9月29日
 米本浩二「画家野見山暁治さん4回目の回顧展」『毎日新聞』2011年9月29日夕刊
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君から10の質問 Q9絵筆を置いた時は？ Q10続けられるわけは？」『西日本新聞』2011年9月30日
 田箆良太「教えて野見山さん タイゾー君から10の質問 記者ノート」『西日本新聞』2011年10月1日
 田箆良太「野見山暁治さん創作の原点語る 石橋美術館で公開対談」『西日本新聞』2011年10月2日
 田箆良太「公開対談 野見山さん語る 戦後の不安を映した自画像」『西日本新聞』2011年10月5日
 「ずっと描いてみたい 野見山暁治の『回顧』展 上・中・下 被災地にて」『西日本新聞』（「教えて野見山さん」全6回を再編集）2011年10月5、6、8日
 白石知子「回顧2011 美術 青木繁 香月泰男 郷里で画業再評価 菊畑茂久馬 野見山暁治 現役重鎮も健在」『読売新聞』2011年12月13日夕刊
 大西若人「回顧2011 美術 小さな存在へのまなざし 無名の女性画家 発掘／我が道歩む作家充実」『朝日新聞』2011年12月14日夕刊
 岸桂子「この1年 美術 『今できること』探る 『再生』『鎮魂』テーマに多くの共感」『毎日新聞』2011年12月15日

テレビ・ラジオ：

「心の時代 洋画家 野見山暁治」NHK教育テレビ、2011年9月11日放映（2011年9月25日再放映）
 「野見山氏インタビュー」（熱烈発信！福岡NOW）NHK福岡放送局、2011年9月22日放映



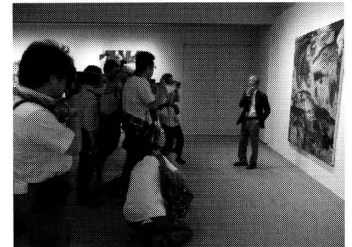
会場風景



会場風景



会場風景



記者会見風景

もっと知る美術・展 エピソード編〈コレクション展示〉

会期：2011年10月26日(水)－2012年3月18日(日)

会場：本館、別館9室

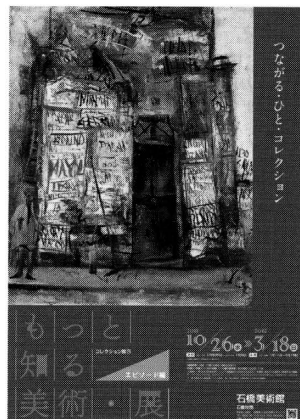
主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：作家や作品にまつわるエピソードを紹介することで、石橋美術館のコレクション、さらには日本近代美術に親しんでもらおうという企画。「ひと」、「とき」、「もの」、「正二郎のコレクション形成」のそれぞれにまつわるエピソードで、4部構成とした。

出品内容：絵画157点、版画6点、彫刻6点、工芸4点、資料15点 計190点

入場者総数：6,694人(12月27日まで)(1日平均：124人)



展覧会ポスター

出品目録：

1. 豊福知徳《半円柱1》 / 1964年 / ブロンズ / 日彫15
2. 豊福知徳《透過する立像(白)》 / 1991年 / 木(マホガニー)・彩色 / 日彫19

1 「ひと」にまつわるエピソード

1-1 森三美と門下生

3. 早川銈太郎《戦場の図》 / 油彩・カンヴァス / 日洋518
4. 森三美《筑後風景(肥前田舎風景)》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
5. 森三美《鶏のいる風景》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
6. 森三美《農夫》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
7. 松本豊太《二人の少女》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋535
8. 松田諦晶《刈跡》 / 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋506
9. 坂本繁二郎《夏野》 / 1898年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
10. 坂本繁二郎《町裏》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
11. 青木繁《月下滞船図》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105

参考1. 森三美旧蔵《A.F.グレース著『油彩風景画の指南書』1885年ロンドン刊》

参考2. 坂本繁二郎《森三美宛葉書 1902年10月21日付》 / 寄託資料

参考3. 坂本繁二郎《森三美宛葉書 1903年9月16日付》 / 寄託資料

1-2 坂本繁二郎もうで

12. 坂本繁二郎《柿》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
13. 坂宗一《久住(晩秋)》 / 油彩・カンヴァス(板に貼付) / 日洋510
14. 伊東静尾《春庭》 / 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋542
15. 田崎廣助《風景》 / 油彩・カンヴァス / 日洋278
16. 大村清隆《坂本繁二郎像》 / 1968年 / ブロンズ / 日彫20
17. 今里龍生《坂本繁二郎像》 / 1961年 / ブロンズ / 日彫4

参考4. 《坂本繁二郎似顔絵カット》

1-3 松田諦晶と古賀春江

- 18. 松田諦晶《自画像》/ 1929年 / 油彩・板 / 日洋312
- 19. 古賀春江《二階より》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 参考5. 松田諦晶《スケッチブック》/ 1922年
- 参考6. 古賀春江《スケッチブック》/ 1914年
- 参考7. 古賀春江《スケッチブック》/ 1922年

1-4 コレクターあるいは絵の歴史

- 20. ジョルジュ・ビゴー《日本の女》/ 油彩・カンヴァス / 外洋111
- 21. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋62
- 22. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277
- 23. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
- 24. 高島野十郎《ベニスの昼》/ 1930-33年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋467
- 25. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
- 26. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
- 27. 青木繁《聞威弥尼》/ 1903年 / 油彩・板 / 日洋89
- 28. 青木繁《光明皇后》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
- 29. 坂本繁二郎《老婆》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋573
- 30. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 31. 坂本繁二郎《箱》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 32. 坂本繁二郎《茄子と梨》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋565
- 参考8. 坂本繁二郎《坂井義三郎（犀水）宛葉書1923年1月1日付》/ 雑83
- 参考9. 坂本繁二郎《坂井義三郎（犀水）宛書簡1925年11月6日付》/ 雑83

2 「とき」にまつわるエピソード

2-1 1904年東京美術学校卒業生

- 33. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋94
- 34. 青木繁《木立（森の暮色）》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97
- 35. 山下新太郎《シュザンヌ》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋211
- 36. 山下新太郎《金閣寺林泉》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋214
- 37. 和田三造《風景（教会の見える）》/ 油彩・カンヴァス / 日洋255

2-2 『エトランゼ』の画家たち

- 38. 小杉未醒《採果童子》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋545
- 39. 金山平三《田沢の春》/ 1941年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋119
- 40. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋120
- 41. 安井曾太郎《水車小屋》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋460
- 42. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
- 43. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
- 44. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋133
- 参考10. 《島崎藤村『エトランゼ』1922年9月、春陽堂刊》

2-3 1920年代パリ

- 45. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192

-
46. 辻永《春（パリ郊外）》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋117
 47. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
 48. 清水多嘉示《衣裳室》/ 1926年 / 油彩・板 / 日洋472
 49. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
 50. 伊原宇三郎《アルル風景》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋276

3 「もの」にまつわるエピソード

3-1 タイトル

51. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / 日洋103
52. 古賀春江《無題》/ 1921年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋345
53. 松田諦晶《コンポジション》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋572
54. 駒井哲郎《版画》/ 1958年 / アクワチント、エッチング / 日版11 / *前期
55. 駒井哲郎《エチュード》/ 1959年 / シュガーアクワチント / 日版12 / *後期
56. 井上三綱《相》/ 1960年 / 水彩、油彩・紙 / 日洋335 / *前期
57. 猪熊弦一郎《作品》/ 墨、水彩・紙 / 日洋488 / *後期
58. 古賀春江《窓外風景》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / 日洋577 / *前期
59. 古賀春江《窓外風景》/ 1927年 / 水彩・紙 / 日洋582 / *前期
60. 古賀春江《《無題》のためのスケッチ》/ 1929年 / 鉛筆・紙 / 日洋347 / *後期
61. 古賀春江《円筒形の画像》/ 1926年頃 / 水彩・紙 / 日洋574 / *後期
62. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋524
63. エミリー・カーム・ウンワリイ《無題》/ 1996年 / 合成ポリマー絵具・アーティストポリエステル / BMA / 外洋223
64. 佐藤敬《作品》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 日洋490

3-2 額縁

65. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
66. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
67. 古賀春江《曲糸につく》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋546
68. 古賀春江《誕生》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋167
69. 坂田一男《エスキース》/ 1953年 / 油彩・板 / 日洋179
70. 川端実《Work》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋569

3-3 絵の裏側

71. 藤島武二《池畔の女》/ 1908-09年 / 油彩・紙 / 日洋36
72. 森三美《海岸風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
73. 坂本繁二郎《母の像》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
74. 林倭衛《フランス風景》/ 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋171
75. 林倭衛《サント・ヴィクトワール》/ 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋170
76. 小出檣重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
77. 坂本繁二郎《少女》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋111
78. 藤島武二《唐様三部作》/ 1924年 / 水彩、油彩ほか・紙 / 日洋45-1 / *前期
79. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩・紙 / 日洋45-2 / *前期
80. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩、パステル・紙 / 日洋45-3 / *前期
81. 古賀春江《花のある静物》/ 1919-20年頃 / 水彩・紙 / 日洋576 / *後期
82. 古賀春江《花》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / *後期

3-4 サイン

83. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
84. 古賀春江《柳川風景》/ 1914年 / 水彩・紙 / 日洋523 / *前期
85. 古賀春江《筑後川》/ 1914年頃 / 水彩・紙 / 日洋471 / *後期
86. 坂本繁二郎《風景》/ 1905年 / 水彩・紙 / 寄託作品 / *前期
87. 坂本繁二郎《水縄山風景》/ 1898年 / 水彩・紙 / 日洋536 / *後期
88. 坂本繁二郎《香炉》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
89. 坂本繁二郎《塩屋の娘人形》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
90. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
91. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
92. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156

3-5 補筆あるいは描き直し

93. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
94. 中沢弘光《思い出（下図）》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋72
95. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197
96. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
97. 伊原宇三郎《女の顔》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋199
98. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
99. 坂本繁二郎《婦人像》/ 1922-68年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
100. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 日洋300
101. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
102. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
103. 井上三綱《裸婦群像》/ 1955年 / 石膏、水彩・紙 / 日洋334-1
104. 井上三綱《裸婦群像習作》/ 1954年頃 / 石膏、水彩・紙（板に貼付）/ 日洋334-2

3-6 こだわりのモチーフ

105. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
106. 坂本繁二郎《新聞》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
107. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋229
108. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
109. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
110. 内野秀美《ひとり》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋515
111. 山下新太郎《百合子像》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / 日洋422
112. 山下新太郎《山下百合子像》/ 1919年頃 / 油彩・板 / 日洋424
113. 山下新太郎《和子像》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋425
114. 山下新太郎《春の庭》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 日洋433
115. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
116. 和田英作《早春（富士）》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
117. 岡田三郎助《富士山》/ 1918年 / 油彩・板 / 日洋522
118. 吉田博《奔流》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
119. 吉田博《マッターホルン 夜》/ 1925年 / 木版 / 日版27 / *前期
120. 吉田博《剣山の朝》/ 1926年 / 木版 / 日版25 / *後期
121. 藤島武二《日の出》/ パステル・紙 / 日洋239 / *前期
122. 藤島武二《日の出》/ パステル・紙 / 日洋243 / *後期
123. 藤島武二《旭光（新高山）》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 日洋244

-
124. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋49
125. 坂本繁二郎《能面と鼓の胴》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / 日洋568
126. 坂本繁二郎《能面》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
127. 坂本繁二郎《二馬》/ 1930年 / 鉛筆・紙 / 日洋450 / *前期
128. 坂本繁二郎《水より上る馬》/ 1935年 / 水彩・紙 / 日洋449 / *後期
129. 坂本繁二郎《窓の馬》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
130. 牧野虎雄《罌粟》/ 油彩・カンヴァス / 日洋153
131. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
132. 満谷国四郎《脱衣》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 日洋233
133. 満谷国四郎《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋232
134. 満谷国四郎《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋69
135. 満谷国四郎《ばら（絶筆）》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋71
136. 安井曾太郎《ばら》/ 水彩・紙 / 日洋269 / 前期
137. 安井曾太郎《ばら》/ 1932年 / 木版 / 日版36 / 後期
138. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
139. 藤田嗣治《猫》/ 1934年 / 胡粉、墨、顔彩・紙 / 日洋262 / *前期
140. 藤田嗣治《女と猫》/ c.1938年 / 墨、淡彩・紙 / 日洋263 / *後期
参考11. 坂本繁二郎《権藤俊子宛書簡1914年4月16日付》

4 「正二郎のコレクション形成」にまつわるエピソード

4-1 正二郎の初期コレクション

141. 豊田勝秋《鑄銅小花生（寿恵広）》/ 1967年 / 鑄銅 / 雑84
142. 豊田勝秋《春日》/ 1930年 / 鑄銅 / 雑46
143. 竹内栖鳳《潮汐去来》/ 1927-30年頃 / 絹本著色 / 日書65 / *前期
144. 竹内栖鳳《鯉図》/ 1927-30年頃 / 絹本著色 / 日書66 / *後期
145. 富田溪仙《昇鯉図》/ 1930年 / 絹本著色 / 日書27 / *前期
146. 横山大観《神州第一峰》/ 1930年 / 絹本著色 / 日書23 / *後期
147. 近藤浩一路《暁港（島原港）》/ 1930年 / 紙本墨画 / 日書29 / *前期
148. 筆谷等観《山湖雨後》/ 1927-30年頃 / 紙本墨画 / 日書78 / *後期
149. 筆谷等観《飛瀑双鶴》/ 1930年 / 絹本著色 / 日書24 / *前期
150. 大智勝観《双鶴》/ 1930年 / 紙本墨画淡彩 / 日書91 / *後期
151. 藤井浩祐《人物文壺》/ ブロンズ / 寄託作品
152. 板谷波山《氷華磁葡萄文花瓶》/ 1927-30年頃 / 磁器 / 陶器194
153. 坂本繁二郎《あらしの海》/ 1917年 / 油彩・板 / 日洋110
154. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
155. 和田三造《伊豆の富士》/ 1927-30年頃 / 油彩・紙 / 日洋256
156. 辻永《伊豆の海村》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋454
157. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159
参考12. 『秩父宮同妃両殿下御滞泊記念写真帖』1930年8月発行

4-2 正二郎ゆかりの作品

158. 青木繁《農家》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋96 / *前期
159. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87 / *後期
160. 坂本繁二郎《自画鏡像》/ 1929年 / 油彩・紙 / 日洋113
161. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
162. 坂本繁二郎《肉弾三勇士》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 日洋115

163. 辻永《ハルピンの冬》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋116
164. 金山平三《石母田の堤》/ 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋121
165. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋12
166. 藤島武二《ネミ湖》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋24
167. 藤島武二《雲（ローマ）》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋33
168. 藤島武二《ヴィラ・デステの池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋40
169. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
170. 山本豊市《若い女》/ 1956年 / 乾漆 / 日彫3
171. 須田国太郎《禰原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
172. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
173. 高田力蔵《アングル《泉》の模写》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋407
174. 北村西望《月昇る》/ ブロンズ / 日彫11
175. 棟方志功《工楽両妃の柵》/ 1960年 / 木版 / 日版7 / *前期
参考13. 石橋正二郎『私の歩み』1962年
参考14. 石橋正二郎『私の歩み』1968年
参考15. 石橋正二郎『回想記』1970年7月

* 寄託作品以外で、BMAはブリダストン美術館の所蔵、表記のないものは石橋美術館の所蔵であることを示す。

* 会期中一部展示替えを行った。前期10/26-1/9、後期1/11-3/18。

関連事業：

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

田籠良太「逸話通し魅力深める 3月18日まで石橋コレクション展」『西日本新聞』2011年2月17日

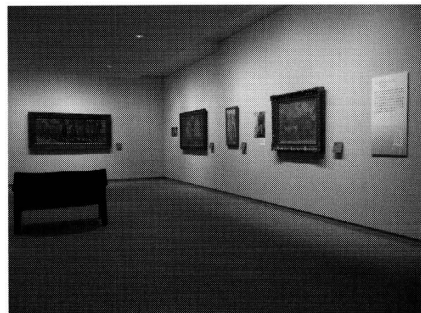
テレビ・ラジオ：

「ルックアップふくおか 金曜日～週末チェックウ！」TVQ、2011年12月2日放映

「ひるまえ情報便」NHK佐賀放送局、2011年12月8日放映



会場風景



会場風景

〈土曜講座〉

土曜日 14:00－16:00 ホール

通算回数 月 日 講座題目

講師

《美の交差点3—展覧会プレビュー 2011》

企画＝貝塚 健

2196 2011年 2月 5日 39年ぶりの、青木繁展—28年の生涯と没後100年

貝塚 健（プリヂストン美術館学芸員）

2197 2月12日 マリー・アントワネットの画家ヴィジェ・ルブラン

—華麗なる宮廷を描いた女性画家たち—— 安井裕雄 氏（三菱一号館美術館主任学芸員）

2198 2月19日 酒井抱一と鈴木其一 江戸琳派という異彩

宗像晋作 氏（出光美術館学芸員）

2199 2月26日 「華麗なる〈京時絵〉—三井家と象彦漆器」予告編

小林祐子 氏（三井記念美術館学芸員）

《巨匠たちの「ライバル伝説」》

企画＝中村節子

2200 2011年 3月26日 記憶の中の対話—マティスとピカソ —— 関 直子 氏（東京都現代美術館主任学芸員）

2201 4月 2日 レンブラントとそのライバルルーベンスを中心にして

尾崎彰宏 氏（東北大学教授）

2202 4月 9日 そもそも精神は、眼にみえるのか、みえないのか—カンディンスキーとクレー

前田富士男 氏（中部大学教授、慶應義塾大学名誉教授）

2203 4月16日 アングルとドラクロワ—アリーナにのせられたライバルたち

阿部成樹 氏（中央大学教授）

* 3月19日に予定していた土曜講座は、東日本大震災の影響により4月16日に延期し、振替開催となった。

《地中海世界の歴史、古代～中世—異なる文明の輝き》

企画＝高山 博 氏（東京大学教授、地中海学会）

2204 2011年 4月30日 古代ギリシアと地中海世界—“古典古代”の誕生—美術の視座から

篠塚千恵子 氏（武蔵野美術大学教授）

2205 5月 7日 古代ローマと地中海世界—ローマ帝国の遺産

島田 誠 氏（学習院大学教授）

2206 5月14日 ビザンツ帝国と地中海世界—東地中海における美術の変容

益田朋幸 氏（早稲田大学教授）

2207 5月21日 ゲルマンと地中海世界—西ローマ帝国以後の新秩序、古代から中世へ

高山 博 氏（東京大学教授）

2208 5月28日 中世イスラームと地中海世界—華麗なるイスラーム帝国の繁栄

私市正年 氏（上智大学教授）

《戦後フランスの抽象絵画とアンフォルメル》

企画＝新畑泰秀

- 2209 2011年 6月 4日 アンフォルメル以前—フォートリエの憂鬱
林 道郎 氏（上智大学教授）
- 2210 6月11日 日本におけるアンフォルメルの受容 ——— 加藤瑞穂 氏（大阪大学総合学術博物館招聘准教授）
- 2211 6月18日 戦後フランスの抽象絵画とアンフォルメル
新畑泰秀（ブリヂストン美術館学芸課長）

《真夏の青木繁講座》

企画＝貝塚 健

- 2212 2011年7月23日 青木繁の生涯と芸術 ——— 植野健造 氏（福岡大学教授、元石橋美術館学芸員）
- 2213 7月30日 青木繁を通してみる文学と美術の交流 ——— 森山秀子（石橋美術館学芸課長）
- 2214 8月 6日 「画を仕上げる力」とは—青木繁の芸術 ——— 田中 淳 氏（東京文化財研究所企画情報部長）
- 2215 8月13日 青木繁《海の幸》をうみだしたもの ——— 貝塚 健（ブリヂストン美術館学芸員）

《芸術家と地中海都市》

企画＝小池寿子 氏（國學院大學教授、地中海学会）

- 2216 2011年9月17日 ニコラ・プッサンとローマ ——— 望月典子 氏（慶應義塾大学講師）
- 2217 9月24日 ティツィアーノとヴェネツィア ——— 池上英洋 氏（國學院大學准教授）
- 2218 10月 1日 エル・グレコとトレード ——— 松原典子 氏（上智大学准教授）
- 2219 10月8日 アントニ・ガウディとバルセロナ ——— 鳥居徳敏 氏（神奈川大学教授）
- 2220 10月15日 アーノルド・ベックリオンとフィレンツェ
秋山 聰 氏（東京大学教授）

《野見山暁治の軌跡》

企画＝中村節子

- 2221 2011年11月19日 野見山さんと「無言館」 ——— 窪島誠一郎 氏（信濃デッサン館・無言館館主）
- 2222 11月26日 わたしの見てきた風景
——— 対談：野見山暁治 氏（洋画家）×山根基世 氏（LLPことばの杜代表、元NHKアナウンサー）
- 2223 12月 3日 野見山暁治の世界 ——— 中村節子（ブリヂストン美術館学芸員）

〈特別講座〉

アンフォルメル展の開催にあわせて、下記の特別講座を美術館1階ホールにて開講した。

2011年5月14日（土）17:00－19:00

「アンフォルメルとその時代」高階秀爾氏（大原美術館館長）×堂本尚郎氏（画家）

〈アーティスト・トーク〉

野見山暁治展の開催にあわせて、アーティスト・トークを美術館1階ホールにておこなった。

11月12日（土）14:00－16:00

「野見山暁治をもっと知る」野見山暁治氏（洋画家）

〈ギャラリートーク〉

展示室でのギャラリートークを、青木繁展期間中を除く毎週水曜日と金曜日、下記の時間帯に当館学芸員が実施した。

水曜日、金曜日 15:00－16:00

〈スライドトーク〉

青木繁展の開催にあわせて、スライドトークを美術館1階ホールにておこなった。

水曜日、金曜日 15:00－16:00（計14回実施）

〈ファミリープログラム〉

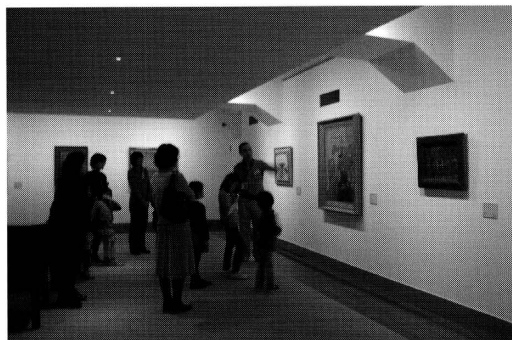
小学生を含む家族を対象にしたプログラムを、下記の時間帯に実施した。

日曜日 10:30－12:30

2011年 1月16日 「形のかくれんぼ」

6組14人（子ども7人、大人7人）

- 1月23日 「形のかくれんぼ」
6組16人（子ども9人、大人7人）
- 1月30日 「形のかくれんぼ」
6組15人（子ども7人、大人8人）
- 2月13日 「はじめまして」
6組13人（子ども6人、大人7人）
- 2月20日 「はじめまして」
2組4人（子ども2人、大人2人）
- 3月 6日 「はじめまして」
5組13人（子ども7人、大人6人）
- 3月27日 「木の表情」
2組4人（子ども2人、大人2人）
- 4月 3日 「木の表情」
5組15人（子ども6人、大人9人）
- 4月10日 「木の表情」
3組9人（子ども5人、大人4人）
- 6月12日 「ふしぎな色」
5組11人（子ども5人、大人6人）
- 6月19日 「ふしぎな色」
5組13人（子ども7人、大人6人）
- 6月26日 「ふしぎな色」
6組17人（子ども7人、大人10人）
- 10月 2日 「絵画探偵～筆あとを追え～」
5組10人（子ども5人、大人5人）
- 10月 9日 「絵画探偵～筆あとを追え～」
5組10人（子ども5人、大人5人）
- 10月16日 「絵画探偵～筆あとを追え～」
6組13人（子ども6人、大人7人）
- 12月 4日 「絵の中の景色」
4組9人（子ども5人、大人4人）
- 12月11日 「絵の中の景色」
6組13人（子ども7人、大人6人）
- 12月18日 「絵の中の景色」
5組11人（子ども6人、大人5人）



ファミリープログラム



ファミリープログラム

〈インターンシップ〉

2011年4月3日から2012年3月31日まで、下記の通り教育普及部門のインターンシップを行った。

インターン：

秋本真奈帆(武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻造形理論・美術史コース 修士課程)

石川育子(成城大学大学院 文学研究科美学美術史専攻修士課程)

伊藤小夜子(学習院大学大学院 人文科学研究科美術史学専攻修士課程)

加藤信元(成城大学大学院 文学研究科美学美術史専攻修士課程)

高橋真理子(東京学芸大学大学院 教育学研究科修士課程)

実習活動日：37日間

主な実習内容：美術館における教育普及活動の実務

担当：貝塚 健、細矢 芳

〈美術講座〉

| | 月 日 | 講座題目 | 講師 |
|-------------------|-------|--------------------------|------------------------------------|
| 《「没後100年 2011年 | | 青木繁—よみがえる神話と芸術」開催記念美術講座》 | 講座室 14:00－15:30 |
| | 4月 9日 | 青木繁 実像と小説あいだ | 渡辺 洋 氏 (神戸大学名誉教授、『悲劇の洋画家 青木繁 伝』著者) |
| | 4月16日 | 青木繁と日本前衛の〈前夜〉 | 長田謙一 氏 (首都大学東京教授) |
| | 4月23日 | 青木繁の生涯と芸術 | 植野健造 氏 (福岡大学教授、元石橋美術館学芸員) |
| | 5月14日 | 布良という聖地—《海の幸》が生まれた場所 | 貝塚 健 (ブリヂストン美術館学芸員) |

| | | |
|------------------------|----------------------|-------------------------------|
| 《「高島野十郎 里帰り展」開催記念美術講座》 | | 講座室 14:00－15:30 |
| 7月16日 | 温石（おんじゃく）に帰りがたかった野十郎 | 多田茂治 氏 (ノンフィクション作家、『野十郎の炎』著者) |
| 7月23日 | 野十郎の作品をめぐって | 西本匡伸 氏 (福岡県教育庁社会教育課) |

| | |
|--------------------|----------------------------|
| 《「野見山暁治展」開催記念イベント》 | |
| 9月17日 | 「対談 野見山暁治×村田喜代子」 |
| | 野見山暁治 氏、村田喜代子 氏 (作家) |
| | 石橋文化会館小ホール 14:00－15:00 |
| 10月 1日 | 「トーク 野見山暁治+野村正育」 |
| | 野見山暁治 氏、野村正育 氏 (NHKアナウンサー) |
| | 石橋美術館 1階ギャラリー 14:00－15:00 |



対談風景

〈展覧会関連イベント〉

《「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」プレイベント 福岡ユネスコ文化講演会》

エルガーホール中ホール（福岡市中央区天神） 14:00－16:00

2011年 3月12日 米倉斉加年 青木繁を語る ————— 米倉斉加年 氏（俳優・演出家・画家）
青木繁の生涯と芸術 ————— 植野健造 氏

《「高島野十郎 里帰り展」関連イベント》 展示室 14:00－14:30

7月30日 漫オトーク de やじゅうろう ————— 凸凹兄弟



会場風景

〈ギャラリートーク〉

野見山暁治展期間中を除く毎週土曜日はサポートボランティアが、日曜日は学芸員が担当し、本館および別館の展示室で実施した。高島野十郎展期間中のみ、土曜日は学芸員、日曜日はボランティアが行った。

時間：14:00－14:20

〈ファミリーツアー〉

「10のとびら—絵からひろがる世界」の関連プログラムとして、小学生以上の子どもと保護者を主な対象としたファミリーツアーを展示室で行った。

時間：14:00－15:30

2011年 1月26日（水）2組4名
2月 5日（土）5組16名

〈学習の場としての美術館利用〉

2011年 7月29日（金）久留米信愛女学院中学校3年「職場体験学習」 3名（対応＝伊藤・泉田）
9月21日（水）久留米市立青陵中学校1年「久留米の良さを学ぶ」 5名（対応＝泉田）
9月28日（水）久留米市立南薫小学校2年「生活科町探検」 8名（対応＝泉田）
10月28日（金）久留米市立南薫小学校6年2組「福岡県図画工作教育研究大会研究授業」（対応＝泉田）

〈館外活動〉

- 2011年 6月 3日（金） 早朝緑陰講座「『もっと知る美術・展—名作選』へようこそ」
於：文化センター園内 約80名（担当=伊藤）
- 6月13日（月） 久留米大学経済学部「地域文化政策論：石橋美術館の概要と地域における役割」
於：久留米大学 130名（担当=後藤）
- 9月29日（金） 久留米大学「久留米学：筑後の画家たち」
於：久留米大学 約200名（担当=森山）
- 11月 8日（火） 平成23年度えーるピアシニアカレッジ
「画家とエピソード もっと知る美術・展を楽しむ」
於：えーるピア久留米 約200名（担当=森山）
- 12月24日（土） 第93回鳥栖市民大学「石橋コレクションと洋画家・青木繁と坂本繁二郎について」
於：鳥栖市立図書館 80名（担当=後藤）

〈サポートボランティア〉

2011年度の登録者は24名（昨年度と変わらず）。年間6回の研修を実施。ギャラリートーク、坂本旧アトリエ解説、学校を主とする団体受入や、文化センター内のイベント等で7500名を超える来館者に対応した。（ボランティアの活動期間は4月から翌3月までの1年間）

サポートボランティア：

赤尾征子、稲益円、小島裕子、近藤孝子、坂井弘美、里中健、佐野由美子、高橋有嘉子、高橋佑太、豊福真知子、仲上祥世、中野直美、藤井喜美子、藤木康宏、細川典彦、本田博子、三好愛未、虫明しのぶ、牟田麻里耶、森房乃、諸富孝子、矢ヶ部節子、杠和子、渡邊睦美 以上24名（50音順 敬称略）

〈博物館実習生受入〉

学芸員資格取得のための博物館実習を下記のように実施した。

期間：2011年10月15日(土)。10月22日(土)－25日(火)のうちいずれか2日。11月5日(土)、6日(日)、12日(土)、13日(日)、19日(土)、20日(日)、26日(土)。以上10日間。

実習生：7名(7校)

実習内容：

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---------------|---------------|---------------|---|---------------|---------------|-----------------|
| | 9:30-10:45 | 10:45-12:00 | 13:00-14:15 | 14:15-15:30 | 15:30-16:45 | 16:45-17:30 |
| 10月15日 (土) | ガイダンス 後藤 | 美術館運営 後藤 | 施設見学、アトリエトーク見学 後藤 13:30-14:00 アトリエトーク | | | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 10月22日 (土) | 展示替え作業 森山 | | 展示替え作業 森山 | | | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 10月23日 (日) | 展示替え作業 森山 | | 展示替え作業 森山 | | | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 10月24日 (月) | 展示替え作業 森山 | | 展示替え作業 森山 | | | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 10月25日 (火) | 展示替え作業 森山 | | 展示替え作業 森山 | | | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月5日 (土) | 教育普及1 後藤 | 展覧会1 平間 | 展覧会2 平間 15:00-15:30 アートゲーム、サポート | 教育普及2 後藤 | 展覧会3 平間 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月6日 (日) | 作品管理 森山 | 作品調査1 森山 | 作品調査2 平間 | 作品調査3 平間 | 文献・情報検索 後藤 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月12日 (土) | リーフ作成説明 後藤 | グループ決め 後藤 | テーマ決め1 後藤 | テーマ決め2 後藤 | テーマ発表 後藤 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月13日 (日) | 文献調査1 森山 | 文献調査2 森山 | リーフ作成3 森山 | リーフ作成4 森山 | プラン発表1 森山 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月19日 (土) | 文献調査3 平間 | 文献調査4 平間 | 文献整理5 平間 | リーフ作成5 平間 | リーフ作成6 平間 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月20日 (日) | リーフ作成7 平間 | リーフ作成8 平間 | リーフ作成9 平間 | リーフ作成10 平間 | リーフ作成11 平間 | 質疑・応答 ノートまとめ |
| 11月26日 (土) | リーフ作成12 後藤 | リーフ作成13 後藤 | リーフ作成14 後藤 | リーフ作成15 後藤 | リーフ設置 後藤 | 質疑・応答 終了会 |

入場者数

ブリヂストン美術館

| 月 | 開館日数 | 有料 | | | | 無料 | | 総計 | 一日平均 |
|----|------|---------|-------|-------|---------|--------|---------|---------|-------|
| | | 一般 | 大高生 | 団体 | 合計 | 招待他 | (うち中小生) | | |
| 1 | 24 | 7,533 | 636 | 77 | 8,246 | 2,341 | 230 | 10,587 | 441 |
| 2 | 24 | 9,744 | 764 | 178 | 10,686 | 2,496 | 491 | 13,182 | 549 |
| 3 | 18 | 4,776 | 497 | 42 | 5,315 | 1,397 | 217 | 6,712 | 373 |
| 4 | 16 | 3,716 | 361 | 91 | 4,168 | 1,348 | 131 | 5,516 | 345 |
| 5 | 27 | 5,236 | 484 | 112 | 5,832 | 1,953 | 165 | 7,785 | 288 |
| 6 | 26 | 5,317 | 677 | 275 | 6,269 | 2,784 | 353 | 9,053 | 348 |
| 7 | 18 | 7,742 | 666 | 433 | 8,841 | 3,091 | 395 | 11,932 | 663 |
| 8 | 29 | 23,089 | 1,191 | 496 | 24,776 | 6,184 | 989 | 30,960 | 1,068 |
| 9 | 19 | 10,984 | 725 | 85 | 11,794 | 3,418 | 328 | 15,212 | 801 |
| 10 | 18 | 7,897 | 787 | 371 | 9,055 | 2,903 | 285 | 11,958 | 664 |
| 11 | 26 | 7,458 | 418 | 415 | 8,291 | 2,778 | 374 | 11,069 | 426 |
| 12 | 22 | 8,242 | 528 | 70 | 8,840 | 3,244 | 231 | 12,084 | 549 |
| 合計 | 267 | 101,734 | 7,734 | 2,645 | 112,113 | 33,937 | 4,189 | 146,050 | 547 |

※3月は東日本大震災の影響により、12日以降9日間休館した。

石橋美術館

| 月 | 開館日数 | 有料 | | | | 無料 | | | 総計 | 一日平均 |
|----|------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|------|
| | | 一般 | 大高生 | 団体 | 合計 | 中小生 | 招待他 | 合計 | | |
| 1 | 25 | 867 | 34 | 196 | 1,097 | 702 | 179 | 881 | 1,978 | 79 |
| 2 | 24 | 1,037 | 58 | 213 | 1,308 | 462 | 296 | 758 | 2,066 | 86 |
| 3 | 18 | 1,408 | 82 | 622 | 2,112 | 425 | 752 | 1,177 | 3,289 | 183 |
| 4 | 26 | 5,127 | 185 | 2,089 | 7,401 | 609 | 1,686 | 2,295 | 9,696 | 373 |
| 5 | 20 | 7,367 | 220 | 2,368 | 9,955 | 861 | 3,056 | 3,917 | 13,872 | 694 |
| 6 | 17 | 956 | 23 | 401 | 1,380 | 174 | 52 | 226 | 1,606 | 94 |
| 7 | 28 | 5,371 | 137 | 2,624 | 8,132 | 1,182 | 1,920 | 3,102 | 11,234 | 401 |
| 8 | 19 | 7,661 | 344 | 2,649 | 10,654 | 860 | 3,164 | 4,024 | 14,678 | 773 |
| 9 | 27 | 2,195 | 72 | 988 | 3,255 | 160 | 1,021 | 1,181 | 4,436 | 164 |
| 10 | 20 | 1,923 | 81 | 1,025 | 3,029 | 242 | 1,523 | 1,765 | 4,794 | 240 |
| 11 | 26 | 1,333 | 28 | 1,187 | 2,548 | 831 | 175 | 1,006 | 3,554 | 137 |
| 12 | 23 | 810 | 32 | 229 | 1,071 | 1,092 | 162 | 1,254 | 2,325 | 101 |
| 合計 | 273 | 36,055 | 1,296 | 14,591 | 51,942 | 7,600 | 13,986 | 21,586 | 73,528 | 269 |

坂本繁二郎旧アトリエ（石橋文化センター内）

| イベント名 | 開催日 | 日数 | 入場者数 |
|------------|------------|----|-------|
| つばきまつり | 3/5 ～ 6 | 2 | 293 |
| SAKURA まつり | 4/2 ～ 3 | 2 | 528 |
| バラフェア | 5/1 ～ 5 | 5 | 1,596 |
| はなしょうぶまつり | 6/4 ～ 5 | 2 | 200 |
| 秋のバラフェア | 10/15 ～ 16 | 2 | 447 |
| 合計 | | 13 | 3,064 |

新収蔵作品 New Acquisition

絵画 Paintings

ギユスターヴ・カイユボット

Gustave CAILLEBOTTE

1848-1894

ピアノを弾く若い男

1876年

油彩・カンヴァス

81.0×116.0cm

右下に署名・年記

外洋229

Young Man Playing the Piano

1876

Oil on canvas

81.0×116.0cm

Signed and dated lower right: G. Caillebotte 1876



来歴 Prov. : Eugène Daufresne, acquired from the artist, Paris; c.1896, Martial Caillebotte, acquired from the above; Caillebotte's heirs, by descent from the above, Paris; 2005, Private Collection, Switzerland; 2011, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : April 1876, 11 rue Le Peletier, Paris, *2e Exposition impressionniste*, no.19; 1886, American Art Galleries & National Academy of Design, New York, *Works in Oil and Pastels by the Impressionists of Paris*, no.28; June 1894, Galerie Durand-Ruel, Paris, *Rétrospective d'œuvres de Gustave Caillebotte*, no.43; 1921, Salon d'Automne, Paris, *Rétrospective Gustave Caillebotte*, no.2704; 25 May-24 July 1951, Galerie Beaux-Arts, Paris, *Rétrospective Gustave Caillebotte*, no.6; 22 October 1976-2 January 1977, Museum of Fine Arts, Houston, 12 February-24 April 1977, Brooklyn Museum of Art, *Gustave Caillebotte: A Retrospective Exhibition*, p.92, no.13, reproduced; 22 May-21 October 1984, Musée Pissarro, Pontoise, *Gustave Caillebotte*, no.4; 12 September 1994- 9 January 1995, Galeries Nationales du Grand Palais, Paris, 15 February- 28 May 1995, The Art Institute of Chicago, *Gustave Caillebotte 1848-1894*, no.71, reproduced in color; 1996, Royal Academy of Arts, London, *Gustave Caillebotte: the Unknown Impressionist*, no.19, pp.114-115, 115 reproduced in color.

文献 Biblio : 1 April 1876, Alfred de Lostalot, "L'exposition de la rue de Le Peletier", *La Chronique des arts et de la curiosité*, p.119; 4 April 1876, Emile Porcheron, "Promenades d'un flâneur: les impressionnistes", *Le Soleil*; 5 April 1876, Simon Boubée, "Beaux-Arts: exposition des impressionnistes chez Durand-Ruel", *Gazette des France*; 8 April 1876, Marius Chaumelin, "Actualités: l'exposition des intransigeants", *Gazette des étrangers*; 9 April 1876, Emile Blémont, "Les Impressionnistes", *Le Rappel*; 10 April 1876, Louis Enault, "Mouvement artistique: l'exposition des intransigeants dans la galerie Durand-Ruel, rue Le Peletier", *Le Pays*; 10 April 1876, G. d'Olby, "Salon de 1876: avant l'ouverture. Exposition des intransigeants chez M. Durand Ruel, rue Le Peletier", *Le Pays*; 13 April 1876, Georges Rivière, "Les Intransigeants de la peinture", *L'Esprit moderne*; 15 April 1876, Philippe Burty, "Fine Art: the Exhibition of the 'Intransigeants'", *The Academy*; 7 June 1894, François Thiébault-Sisson, "l'Exposition Caillebotte", *Le Temps*; 1951, Marie Berhault, *La vie et l'œuvre de Gustave Caillebotte*, Paris; 1968, Marie Berhault, *Caillebotte l'impressionniste*, Lausanne-Paris, p.22; 1978, Marie Berhault, *Caillebotte: sa vie et son œuvre: Catalogue raisonné des peintures et pastels*, Paris, no.30, reproduced; 1987, Kirk Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, New Haven and London, pp.64-65, no.12, reproduced in color; 1988, Marie-Joséphine de Baland, *Gustave Caillebotte*, Lausanne, pp.68-69, reproduced in color; 1989, Jean Chardeau, *Les Dessins de Caillebotte*, Paris, pp.26-29; 1990, Jean-Jacques Lévêque, *Les Années Impressionnistes, 1870-1889*, Paris, p.297, reproduced in color; 1994, Jean-Jacques Lévêque, *Gustave Caillebotte, L'Oublié de l'Impressionisme 1848-1894*, (Collection: ACR Edition, Poche Couleur), Paris, pp.33-39, pp.38-39 reproduced in color; 1994, Eric Darragon, *Caillebotte* (Collection: Tout L'Art Monographie), Paris, pp.32-33, p.34 reproduced in color; 1994, Marie. Berhault, *Caillebotte: Catalogue Raisonné des Peintures et Pastels*, Paris, p.78, No.36, reproduced; 1996, Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume II, Exhibited Works*, San Francisco, p.33, p.47, reproduced; 2005, Pamela Todd, *The Impressionists at Home*, London, p.31, reproduced in color; 2011, Éric Darragon, "Gustave Caillebotte, une nouvelle peinture", in Exh.cat. *Dans l'intimité des frères Caillebotte: Peintre et Photographe*, Musée National des Beaux-Arts du Québec & Musée Jacquemart-André, Institut de France, p.37, reproduced in color.

カイユボットは、印象派展に自らも出品する一方で、その活動を経済的に助けたことで知られる。1876年に制作されたこの作品は同年に開かれた第2回印象派展に出品された作品のうちの1点。モデルは画家の弟マルシャル。同時期のモネやルノワールに見られる筆致は見られないが、近代都市に変貌しつつあるパリの都市風俗を、写真のように捉え、逆光を効果的に用いた明るい空間のうちに描き出した様式は、初期の印象派の手法のヴァリエーションを示していると捉えられる。

青木繁

AOKI Shigeru

1882-1911

甘楽物語

1904-07年

鉛筆・紙

15.5×24.0cm

裏面にも人物デッサンあり

日洋581



表



裏

Kanra Monogatari

1904-07

Pencil on paper

15.5×24.0cm

来歴：原敬二郎、福岡；2011年、石橋財団へ寄贈

Prov. : HARA Keijiro, Fukuoka; 2011, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 2011、石橋美術館 / 京都国立近代美術館 / プリダストン美術館「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」no.154

文献 Bibl. : 1972、河北倫明『青木繁』日本経済新聞社、no.209

古賀春江

KOGA Harue

1895-1933

窓外風景

1927年

水彩・紙

38.2×29.0cm

左下に署名：Koga-Harue

日洋582

A View from a Window

1927

Watercolor on paper

38.2×29.0cm

Signed lower left



来歴：原敬二郎、福岡；2011年、石橋財団へ寄贈

Prov. : HARA Keijiro, Fukuoka; 2011, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1927、新宿紀伊國屋「林重義・吉田卓・古賀春江小品展」；1934、東京府美術館「第21回日本水彩画会展特陳」；1975、福岡県文化会館「古賀春江回顧展」；1986、石橋美術館 / プリダストン美術館「古賀春江—前衛画家の歩み」；1996、石橋美術館 / 茨城県近代美術館「古賀春江と三岸好太郎」no.K-39; 2010、石橋美術館 / 神奈川県立近代美術館 葉山「古賀春江の全貌」no.106

文献 Bibl. : 1931、『古賀春江画集』第一書房; 1974、『牛を焚く—古賀春江詩画集』東出版; 1976、『近代の美術36 古賀春江』至文堂、no.88

古賀春江

KOGA Harue

1895-1933

散歩

1932年頃

水彩・紙

24.0×32.3cm

右下に署名：HARUE KOGA

日洋584

Walk in the Park

c.1932

Watercolor on paper

24.0×32.3cm

Signed lower right



来歴：内本浩亮、福岡；間中糸重、柏；2011年、石橋財団へ寄贈

Prov.：UCHIMOTO Koryo, Fukuoka; MANAKA Itoe, Kashiwa; 2011, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.：1975、福岡県文化会館「古賀春江回顧展」no.116; 1986、石橋美術館 / プリヂストン美術館「古賀春江―前衛画家の歩み」no.92; 2010、石橋美術館 / 神奈川県立近代美術館 葉山「古賀春江の全貌」no.148

文献 Bibl.：1976、『近代の美術36 古賀春江』至文堂、no.108

岡鹿之助

OKA Shikanosuke

1898-1978

セーヌ河畔

1927年

油彩・カンヴァス

60.0×73.0cm

右下に署名・年記：OKA / 1927

日洋583

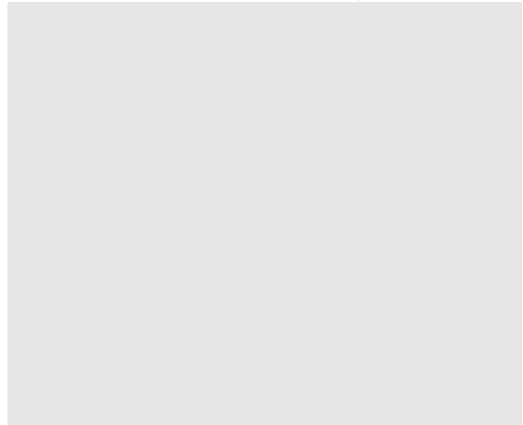
Bank of the Seine

1927

Oil on canvas

60.0×73.0cm

Signed and dated lower right



来歴：村山密、パリ；2011年、石橋財団

Prov.：MURAYAMA Shizuka, Paris; 2011, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.：1984、和光ホール、東京「岡鹿之助未発表作品展」no.5; 1984年、プリヂストン美術館 / 北九州市立美術館「岡鹿之助展」no.11; 1998年、京都国立近代美術館 / 福島県立美術館 / 奈良そごう美術館 / そごう美術館、横浜「岡鹿之助展」no.9; 2008年、プリヂストン美術館「岡鹿之助展」no.8

文献 Bibl.：1974、『岡鹿之助作品集』美術出版社、no.9; 1978、『岡鹿之助画集』美術出版社、no.8

岡鹿之助（1898-1978）は、東京美術学校で岡田三郎助に師事したのち、1925年にパリに渡り、第二次世界大戦が勃発する1939年まで14年間滞在した。その間、藤田嗣治と親しく交わり、渡仏早々にサロン・ドートンヌに入選。その展示会場で自作のマティエールの弱さを実感し、油彩の画材と技法の研究に取り組むきっかけとなる。藤田の初期作品や、アンリ・ルソー、ジョルジュ・スーラなどを学び、やがて考え抜かれた構図を細やかな筆致で描く表現の風景画を描くようになる。帰国後は春陽会を主な作品発表の場として活動する。ひとけのない堀割、雪の中の発電所、時間が堆積したかのようなヨー

ロッパの城館や廃墟、そして三色スミレなどを繰り返し描いた。風景画のほとんどは実景に即した写生ではなく、黄金比などを利用して幾何学的に組み合わせられた心象風景である。本作は、渡仏後の岡が新たな様式を確立して間もないころの、初期の代表作品。藤田の1910年代の抒情的風景画や、アンリ・ルソーの都市風景の影響が顕著であるが、色彩、モチーフ、構図などは岡独自のものといえる。海景とならんで、都市の河川風景は初期の岡の重要な題材であった。先行する《橋》(1927年頃、個人蔵)と《水門》(1926年、個人蔵)を合成したような構図で、岡が自作を引用し組み合わせながら作品を作り出すプロセスを典型的に示すもの。

猪熊弦一郎
INOKUMA Genichiro
1902-1993

女の肖像
水彩・紙
33.5×23.0cm
日洋585

Portrait of a Woman
Watercolor on paper
33.5×23.0cm

来歴：個人蔵；山本美術研究所；2011年、石橋財団
Prov.: Private collection; Yamamoto Art Institute; 2011, Ishibashi Foundation.

1902年に香川県で生まれた猪熊弦一郎は、東京美術学校に入学し、学生時代から帝国美術院展に入選するなど、若くしてその頭角をあらわす。1930年代を通じて彼は数多くの美術家団体と積極的に関わり、定期的に作品の出品を重ねた。1938年に渡仏した猪熊は、パリにアトリエを構える。2年間の滞在中、マティスから指導・助言を受け、ピカソとも親しく交流した。マティスからの影響は大きく、第二次世界大戦後に制作された作品にも現れる。1955年からニューヨークに20年間滞在したのち、抽象的な表現へと向かうことになる。そして1980年代後半以降、再び具象的な世界へと戻ってくる。この水彩画では、マティスから影響されたかのような色面が用いられている。

©公益財団法人ミモカ美術振興財団

新収図書

ブリヂストン美術館

| | 購入 | 寄贈 | 計 |
|----|------|------|------|
| 和書 | 39 冊 | 8 冊 | 47 冊 |
| 洋書 | 45 冊 | 2 冊 | 47 冊 |
| 計 | 84 冊 | 10 冊 | 94 冊 |

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

石橋美術館

| | 購入 | 寄贈 | 計 |
|----|------|------|------|
| 和書 | 19 冊 | 59 冊 | 78 冊 |
| 洋書 | 0 冊 | 1 冊 | 1 冊 |
| 計 | 19 冊 | 60 冊 | 79 冊 |

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

修復記録

ラウル・デュフィ《開かれた窓の静物》

水彩・紙

46.2×58.8cm

ブリヂストン美術館

外洋74

A. 作品の組成

支持体：作品は中位の厚さの漉き紙 (laid paper) に描かれている。簾目(chain line)の間隔は約2.5cmである。「Arches」のウォーターマークが見られる。本紙はハトロ紙で裏打ちされ、ボード(厚紙)に貼られている。ボードは上辺2箇所のヒンジ(Tヒンジ)で台マットにとめられている。ボードの裏面には、現在のヒンジの他に、以前に使用されたヒンジ及びヒンジ跡が上下辺各3箇所、計6箇所に見られる。また、各コーナーにコーナー留めの跡が見られる。ボード裏面に「GALERIE VILDRAC / 1 let 12, Rue de Seine / Paris / Dufy / No664 / s / ag」と記されたラベルが貼られている。また、ボード裏面左上に黒インクによる文字「664」が記されている。

絵画層：水彩絵具を用いて制作されている。サインは、右下に黒い鉛筆(グラファイト)で「Raoul Dufy」と記されている。殆ど色は水に溶解しないが、赤は水にゆっくり溶解し、黄色はエタノールに溶解する。

B. 作品の状態

本紙は、左辺の縁6mm、上下辺の縁2mm幅の部分以外の殆ど全面が焼けて茶色に変色している。また、全面にフォクシングが見られる。フォクシングは紫外線下で暗紫色を呈している。本紙が貼られているボードの裏面にもフォクシングが見られる。裏面の右側に特に多い。フォクシングはカビ、紙に含有される鉄分、湿度、光などが関係して発生する現象であると言われているが、詳しいメカ

ニズムは解明されていない。この作品のフォクシングも、カビ、作品及びその周辺材料、環境が関係していると考えられる。上辺2箇所に短いクリーズが見られる。斜光線で見ると、本紙を厚紙に貼りつけた際に発生したしわが数箇所に見られる。

本紙の裏打ち紙として用いられているハトロ紙は酸性であり、かつ艶のある裏面が水分を遮断している。また、作品が貼られている台紙も酸性である。

絵具層の状態は安定しているが、手前のかごの中の果物の色彩が褪色していると思われる。紫外線下で観察すると、かごの右下の丸い果物などに色彩が塗られていた跡が見られる。

コメント：

この作品に発生したフォクシングの印象は、水分の使用及び紙に安全な水素化ホウ素ナトリウムの使用で軽減されたが、現状への回復が限度であった。

窓マットの幅が狭い。台マットは薄いので厚いものに取り替えた方がよい。また、作品の安全のためにマットに蓋をつけた方がよい。

C. 今回の修復で行なった処置

1. 素材及び状態の調査をし、写真を撮影した。
2. カビ殺菌を行った。(公益法人文化財虫害研究所による)
3. 画面のドライクリーニングを行った。
4. 裏面のボードを除去した。また、ハトロ紙も除去した。
5. クリーニングを行い、脱酸処理(水酸化カルシウム水による)をした。
6. しみをできるだけ軽減した。

(株式会社絵画保存研究所)



fig.1 修復前全図



fig.2 修復後全図

〈保存環境調査の実施〉

ブリヂストン美術館とブリヂストン美術館永坂分室（*以下永坂分室とする）の収蔵庫および展示室の環境測定、虫菌害調査をおこなった。調査者、実施日、場所、内容は下記の通りである。

1. 調査者 ：イカリ消毒株式会社関東CPS
2. 調査実施日：・ブリヂストン美術館 2011年9月26日（トラップ設置期間：9月26日～10月13日）
 ・永坂分室 2011年9月27日（トラップ設置期間：9月27日～10月13日）
3. 調査場所 ：・ブリヂストン美術館 1F正面エントランス、搬出入口、2F展示室（1室～10室）、
 彫刻ロビー、収蔵庫、展示室倉庫等
 ・永坂分室 展示室（1室～2室）、エントランスホール、修復室、閲覧室
4. 調査項目 ：・ブリヂストン美術館
 (1)空中浮遊菌調査 (2)空中浮遊塵埃調査 (3)室内昆虫類捕獲調査 (4)室内温湿度調査
 ・永坂分室
 (1)空中浮遊菌調査 (2)空中浮遊塵埃調査 (3)室内昆虫類捕獲調査 (4)室内温湿度調査
 (5)室内照度・紫外線強度調査

「セーヌの流れに沿って―印象派と日本人画家たちの旅」展
ひろしま美術館 / 2011年1月3日－2011年2月27日

- 1) アルフレッド・シスレー 《サン＝マメス六月の朝》(外洋26)
- 2) 浅井忠 《グレーの洗濯場》(日洋290)
- 3) 浅井忠 《グレーの古橋》(日洋292)
- 4) 浅井忠 《グレーの橋》(日洋3)
- 5) アンリ・ルソー 《イヴリー河岸》(外洋43)
- 6) モーリス・ユトリロ 《サン＝ドニ運河》(外洋77)
- 7) 梅原龍三郎 《ノートルダム》(日洋191)
- 8) モーリス・ユトリロ 《パリのアンジュー河岸》(外洋185)
- 9) フィンセント・ファン・ゴッホ 《モンマルトルの風車》(外洋122)
- 10) ケース・ファン・ドンゲン 《シャンゼリゼ大通り》(外洋87)
- 11) 佐伯祐三 《テラスの広告》(日洋174)
- 12) クロード・モネ 《アルジャントウイユの洪水》(外洋21)
- 13) クロード・モネ 《アルジャントウイユ》(外洋180)
- 14) カミーユ・ピサロ 《ブージヴァルのセーヌ河》(外洋19)
- 15) モーリス・ド・ヴラマンク 《運河船》(外洋69)
- 16) アルベール・マルケ 《道行く人、ラ・フレット》(外洋181)
- 17) クロード・モネ 《睡蓮》(外洋22)
- 18) クロード・モネ 《睡蓮の池》(外洋23)
- 19) ピエール・ボナール 《ヴェルノン付近の風景》(外洋54)
- 20) ウジェーヌ・ブーダン 《トルーヴィル近郊の浜》(外洋172)
- 21) ラウル・デュフィ 《ドーヴィルの突堤》(外洋75)
- 22) カミーユ・コロドー 《オンフルールのトゥータン農場》(外洋8)
- 23) 山下新太郎 《巴里コンコルド広場》(日洋225)
- 24) 藤田嗣治 《巴里風景》(日洋123)

「耳をすまして―美術と音楽の交差点」展
茨城県近代美術館 / 2011年1月22日－2011年3月6日

- 1) ラウル・デュフィ 《オーケストラ》(外洋123)

Picasso: Guitars 1912-1914

The Museum of Modern Art, New York / February 13－June 6, 2011

- 1) パブロ・ピカソ 《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》(外洋173)

「没後120年 ゴッホ展—こうして私はゴッホになった」

名古屋市美術館 / 2011年2月22日－2011年4月10日

1) ボール・ゴッガン 《ポン＝タヴェン付近の風景》(外洋37)

「没後100年 青木繁展」

京都国立近代美術館 / 2011年5月27日－2011年7月10日

1) 青木繁 《海景（布良の海）》(日洋100)

2) 青木繁 《天平時代》(日洋91)

「ルオーと風景」展

パナソニック電工汐留ミュージアム / 2011年4月23日－2011年7月3日

1) ジョルジュ・ルオー 《郊外のキリスト》(外洋142)

「芸術が花開く都市展」

静岡県立美術館 / 2011年7月19日－2011年9月8日

1) カミーユ・コロー 《ヴィル・ダヴレー》(外洋7)

2) カミーユ・コロー 《森の中の若い女》(外洋159)

3) アルフレッド・シスレー 《サン＝マメス六月の朝》(外洋26)

4) クロード・モネ 《睡蓮の池》(外洋23)

5) アンリ・マティス 《画室の裸婦》(外洋56)

6) 浅井忠 《グレーの洗濯場》(日洋290)

7) ウジェーヌ・ブーダン 《トルーヴィル近郊の浜》(外洋172)

8) ピエール＝オーギュスト・ルノワール 《カーニュのテラス》(外洋33)

9) カイム・スーティン 《大きな樹のある南仏風景》(外洋114)

10) 藤島武二 《ナポリ湾》(日洋38)

「藤島武二・岡田三郎助展」

三重県立美術館 / 2011年9月10日－2011年10月23日

1) 藤島武二 《縮図帖》(日洋13)

2) 藤島武二 《縮図帖》(日洋14)

3) 藤島武二 《東海旭光》(日洋51)

ひろしま美術館 / 2011年10月29日－2011年12月11日

1) 藤島武二 《糸杉（ヴィラ・ファルコニエリ）》(日洋27)

2) 岡田三郎助 《婦人像》(日洋60)

「生誕120周年記念 岸田劉生展」

大阪市立美術館 / 2011年9月17日 - 2011年11月23日

- 1) 岸田劉生 《南瓜を持てる女》(日洋293)

「生誕100年記念 ジャクソン・ポロック展」

愛知県美術館 / 2011年11月11日 - 2012年1月22日

東京国立近代美術館 / 2012年2月10日 - 2012年5月6日

- 1) ジャクソン・ポロック 《Number2, 1951》(外洋209)

「ぬぐ絵画 日本のヌード」展

東京国立近代美術館 / 2011年11月15日 - 2012年1月15日

- 1) 小出檣重 《横たわる裸身》(日洋140)

- 2) 古賀春江 《涯しなき逃避》(日洋166)

作品貸出記録 石橋美術館

「セーヌの流れに沿って―印象派と日本人画家たちの旅」展
ひろしま美術館 / 2011年1月3日－2011年2月27日

- 1) 藤田嗣治《カルポーの公園》(日洋133)
- 2) 高田力蔵《エトルタの断崖》(日洋182)
- 3) 高田力蔵《雨後のサン＝マメス》(日洋209)
- 4) 荻須高德《巴里風景》(日洋285)

「高田力蔵展」
はつかいち美術ギャラリー / 2011年3月25日－2011年5月8日

- 1) 高田力蔵《回想のアクロポリス》(日洋387)
- 2) 高田力蔵《アングル (泉) の模写》(日洋407)
- 3) 高田力蔵《ミレー (落穂拾い) の模写》(日洋408)
- 4) 高田力蔵《ターナー (雨・蒸気・速力) の模写》(日洋409)
- 5) 高田力蔵《ヴィラ・メジチの噴水》(日洋475)
- 6) 高田力蔵《ピラミッド広場にて》(日洋479)

「画家たちの 二十歳の原点」展
平塚市美術館 / 2011年4月16日－2011年6月12日
下関市立美術館 / 2011年6月18日－2011年7月31日

- 1) 坂本繁二郎《町裏》(寄託作品)

「没後100年 青木繁展」
京都国立近代美術館 / 2011年5月27日－2011年7月10日

- 1) 青木繁《自画像》(日洋86)
*を含む、全69点→pp.30-37

「酒井抱一と江戸琳派の全貌」展
姫路市立美術館 / 2011年8月30日－2011年10月2日
千葉市立美術館 / 2011年10月10日－2011年11月13日

- 1) 池田孤邨《青楓朱楓図屏風》(日書57)
- 2) 鈴木其一《富士筑波山図屏風》(日書106)
- 3) 酒井抱一《新撰六歌仙四季草花図屏風》(日書107)

「藤島武二・岡田三郎助展」

三重県立美術館 / 2011年9月10日 - 2011年10月23日

ひろしま美術館 / 2011年10月29日 - 2011年12月11日

- 1) 藤島武二 《チョチャラ》(日洋25)
- 2) 藤島武二 《蒙古の日の出》(日洋56)
- 3) 岡田三郎助 《水浴の前》(日洋63)

「青木繁展 駆け抜けた青春の軌跡」

東御市梅野記念絵画館 / 2011年10月1日 - 2011年11月13日

- 1) 青木繁 《自画像》(日洋87)

「昭和摩登 藤島武二と新制作初期会員たち展」

神戸市立小磯記念美術館 / 2011年10月15日 - 2012年1月9日

- 1) 藤島武二 《浪(大洗)》(日洋48)

「素顔の佐伯祐三と山田新一」展

都城市立美術館 / 2011年10月15日 - 2011年12月4日

- 1) 佐伯祐三 《コルドヌリ(靴屋)》(日洋173)

「福岡県の近代絵画展」

田川市美術館 / 2011年11月10日 - 2011年12月18日

- 1) 坂本繁二郎 《魚を持ってきた海女》(日洋204)
- 2) 坂本繁二郎 《放牧二馬》(寄託作品)

「ぬぐ絵画 日本のヌード」

東京国立近代美術館 / 2011年11月15日 - 2012年1月15日

- 1) 百武兼行 《臥裸婦》(日洋2)
- 2) 安井曾太郎 《水浴裸婦》(日洋142)
- 3) 古賀春江 《鳥籠》(日洋164)

〈展覧会カタログ〉

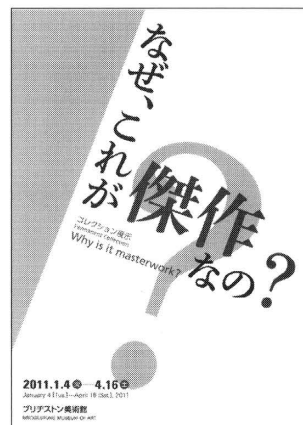
「なぜ、これが傑作なの？」(コレクション展示)

Why is it masterwork? (Permanent Collection)

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2011年1月)

30×21cm 三つ折りリーフレット



「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」(特別展)

AOKI Shigeru: Myth, Sea and Love

本文：

青木繁の生涯と芸術 / 植野健造(pp.10-18)

The Life and Arts of Aoki Shigeru / Ueno Kenzo(pp.273-278)

《海の幸》に見る青木繁の想像力 / 貝塚 健(pp.19-31)

A Gift of the Sea: Aoki Shigeru's Imaginative Powers / Kaizuka Tsuyoshi(pp.279-287)

青木繁と三人の友—坂本繁二郎、蒲原有明、梅野満雄 / 森山秀子(pp.203-207)

「青木繁」再考—美術史上における視点から / 山野英嗣(pp.208-211)

カタログ：

第1章 画壇への登場—丹青によって男子たらん 1903年まで

第2章 豊饒の海—《海の幸》を中心に 1904年

第3章 描かれた神話—《わだつみのいろこの宮》まで 1904-07年

第4章 九州放浪、そして死 1907-11年

第5章 没後、伝説の形成から今日まで

青木繁に関する基本資料(植野健造編)

青木繁関係地図(植野健造編)

青木繁年表(植野健造編)

青木繁文献(森山秀子 / 植野健造編)

出品目録 / 作品解説

図版(カラー 244図)、資料図版(カラー 61図)

編集・執筆：森山秀子、植野健造、貝塚 健、山野英嗣

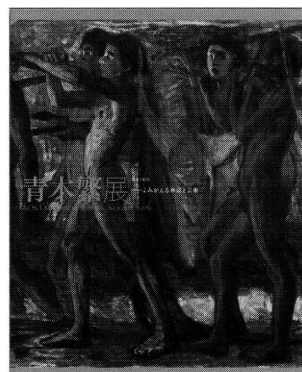
翻訳：小川紀久子、マーサ・マクリントク、ルシー・マクレリー

制作：日本写真印刷

デザイン：高岡健太郎

発行：石橋財団石橋美術館、石橋財団ブリヂストン美術館、京都国立近代美術館、毎日新聞社(2011年3月)

28×23cm 289p



「没後100年 青木繁展」(特別展)

AOKI Shigeru: Myth, Sea and Love

出品目録

図版：モノクロ1図

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2011年3月)

30×21cm 8p



「アンフォルメルとは何か?—20世紀フランス絵画の挑戦」(特別展)

Postwar Abstract Painting in France and Art Informel

本文：

「アンフォルメルとは何か?」展に寄せて / 島田紀夫(pp.8-11)

For the Exhibition, “Postwar Abstract Painting in France and Art Informel” / Shimada Norio (pp.162-165)

戦後フランスの抽象絵画とアンフォルメル / 新畑泰秀 (pp.12-19)

Postwar Abstract Painting in France and Art Informel / Shimbata Yasuhide (pp.166-173)

カタログ(章解説・作品解説・コラム / 新畑泰秀)

1. 抽象絵画の萌芽と展開(Budding and Development of Abstract Painting)
コラム：「冷たい抽象」と「熱い抽象」、あるいは「抒情的抽象」
2. 「不定形な」絵画の登場—フォートリエ、デュビュッフェ、ヴォルス
(The Appearance of “Informel” Painting—Fautrier, Dubuffet, and Wols)
ジャン・フォートリエ / ジャン・デュビュッフェ / ヴォルス
3. 戦後フランス絵画の抽象的傾向と「アンフォルメルの芸術」(Abstract Painting in Postwar France and Art Informel)
コラム：アンフォルメル / タシスム / アンフォルメルと同時代のヨーロッパの動向—コブラと空間主義 / プリヂストン美術館とアンフォルメル

主要参考文献

Selected Bibliography

作品リスト(英文併記)

図版(カラー 152図、参考図版12図)

編集：石橋財団ブリヂストン美術館

執筆：島田紀夫、新畑泰秀

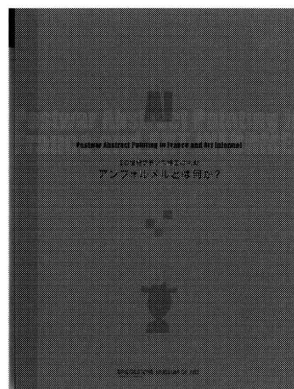
翻訳：スタンレー・N.アンダソン

表紙デザイン・デザイン監修：丸山和広(亀山社中)

本文デザイン制作・印刷：野毛印刷社

発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2011年4月)

26×19cm 191p



「アンフォルメルとは何か？— 20世紀フランス絵画の挑戦」(特別展)
 Postwar Abstract Painting in France and Art Informel

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2011年4月)

30×11cm 八つ折りリーフレット



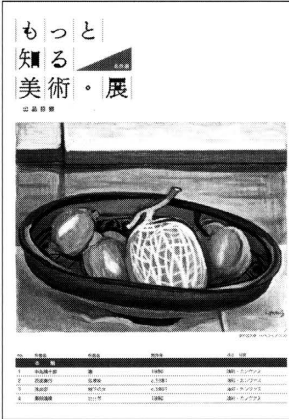
「もっと知る美術・展 名作選」(コレクション展示)

出品目録

図版：モノクロ1図

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2011年5月)

26×18cm 二つ折りリーフレット



「高島野十郎 里帰り展」(特別展)
TAKASHIMA Yajuro: Homecoming Exhibition

本文：

高島野十郎のまなざしの対話篇 / 西本匡伸(pp.8-16)

The Dialogues of Takashima Yajuro's Looks / Nishimoto Masanobu
(pp.198-204)

野十郎のヨーロッパ体験 / 川崎 浹(pp.18-21)

Yajuro's Experience in Europe / Kawasaki Toru(pp.205-209)

技法から見る高島野十郎 / 大久保伊織(pp.158-163)

まなざしの行方 / 森山秀子(pp.164-167)

図版：

第1章 画家・野十郎の誕生

第2章 ヨーロッパ遊学

第3章 ものへのまなざし

第4章 自然へのまなざし

第5章 まなざしの光

資料：

年譜(西本匡伸編)

参考文献(西本匡伸編)

出品目録 / 作品解説(稲富景子)

図版：カラー 150図

編集：森山秀子、稲富景子

企画協力：福岡県立美術館

翻訳：小川紀久子

制作：瞬報社写真印刷

デザイン：平井直樹、加藤久美子

発行：石橋財団石橋美術館、久留米市(2011年7月)

28×23cm 210p



「高島野十郎 里帰り展」(特別展)
TAKASHIMA Yajuro: Homecoming Exhibition

出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2011年7月)

28×23cm 二つ折りリーフレット



「もっと知る美術・展 エピソード編」(コレクション展示)

出品目錄

図版：カラー 12図

編集・発行：石橋財団石橋美術館（2011年10月）

28 × 23cm 8p



〈その他の刊行物〉

「あおきしげる」(特別展)

図版：カラー 11図

編集：石橋財団石橋美術館

デザイン：クリエイティブワークナチュラル

発行：石橋財団石橋美術館(2011年3月)

21×15cm 四つ折りリーフレット



「手紙 高島野十郎からのメッセージ」

執筆・編集：竹口浩司、稲富景子

デザイン：クリエイティブワークナチュラル

発行：石橋財団石橋美術館、福岡県立美術館(2011年6月)

18×7cm 四つ山折りリーフフレット

手紙

高島野十郎からのメッセージ

「ノミヤマさんから お手紙ついた。」

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2011年9月)

20×21cm 8p



「館報」59号（2010年度）

Annual Report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容：

設立趣旨、機構・運営

展覧会（コレクション展示、新収蔵品特別展示、テーマ展示、特別展）

教育普及（講座、ギャラリートーク、ファミリープログラム、インターンシップ、サポートボランティア、実習生受入など）

入場者数（2010年度）

新収蔵作品（作品8点）

新収図書

修復記録

作品貸出記録

刊行物一覧

研究報告 エドゥアール・マネ《自画像》（上） / 島田紀夫(pp.77-82)

アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレックの《サーカスの舞台裏》について / 新畑泰秀(pp.83-92)

黒田清輝《プレハの少女》の名づけをめぐって / 貝塚 健(pp.93-100)

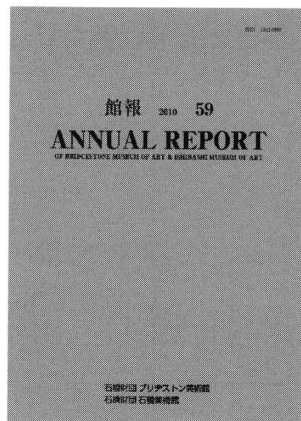
美術館案内

石橋財団職員

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館、石橋財団石橋美術館（2011年3月）

制作：昭和堂

26×19cm 102p ISSN1341-8548



エドゥアール・マネ《自画像》(下)

島田紀夫

〈ベラスケス《ラス・メニナス》〉

フランスの思想家ミシェル・フーコーはその著『言葉と物－人文科学の考古学』(1966年)のなかで、古典主義時代(フーコーによれば17世紀から18世紀にかけての150年間)の表象のシステムとして、文学ではセルバンテス作『ドン・キホーテ』第二部(1615年)を、美術ではベラスケス作《ラス・メニナス》(fig.1、1656年、プラド美術館)を、それぞれ挙げている。『言葉と物』の冒頭が《ラス・メニナス》の精緻な分析ではじまっているのは周知のとおり。

ベラスケス作《ラス・メニナス》は、画家ベラスケスが国王夫妻の肖像画を制作しているところに、王女マルガリータが侍女たち(ラス・メニナス)をともなって挨拶に来た場面を描いている。しかし、国王夫妻の姿は、画面の中央にある鏡のなかにしか描かれていない。国王夫妻は画面の外に立っているわけだが、フーコーによれば、この場所こそコンポジションのまことの中心である。

この中心は、きわめて象徴的なことだが、実際に至上のものなのだ。中心を占めているのが国王フェリペ4世と王妃だからである。だがとりわけそれが至上のものであるのは、絵との関係でそれが演ずる三重の機能による。つまり、描かれている瞬間のモデルの視線、場面を見つめている鑑賞者の視線、そしてその絵(表象されている絵ではなく、われわれのまえにあって、

われわれがそれについて語っているところの絵)を創作している瞬間の画家の視線が、正確に重なりあうにいたるのは、まさしくそこにおいてだからだ。¹⁾

フーコーによれば、この「王の場所」に実際に王が存在していなくても、この絵が存在していることが重要である。この絵のなかには、モデル(国王夫妻)と画家(ベラスケス)と鑑賞者(私たち)の視線を表象化する形象が描かれている。つまり、鏡のなかの反映(画面中央)と、パレットを手にしてカンヴァスの前に立つ画家の姿(画面左端)と、部屋の入口に立つ訪問者の姿(画面右端)と、である。画面のなかの形象は、外部に立つ「至上のもの」である王が不在であっても、存在する。画面内部に表象されているものの関係(表象関係)だけで絵画が自律的に成立しているとすれば、《ラス・メニナス》は近代絵画としての先駆的な位置をしめていることになるだろう。しかし、この絵のなかに、「古典主義時代における表象関係の表象のようなもの、そしてそうした表象のひらく空間の定義がある」とすれば、不在というかたちで王の存在が想定されていることも無視するわけにはいかない。この王は、その王権を神から授けられた存在である(王権神授説)。

《ラス・メニナス》が成立する場所は、神の代理人(至上のもの)としての虚構の王と、その王を表象する絵画を制作する現実の画家とが、「瞬く間にいわば際限もなく交代していく両義的场所」である。そして、この場所の最終的な主人公は鑑賞者自身にほかならない。フーコーによれば、この鑑賞者こそ近代的な意味での「人間」の登場である。

バロック時代の絵画作品は、表象と思考の中心的存在であった神と王が、その位置を人間に譲り渡す時期に制作されている。そこでは古典主義的要素とバロック的要素が混在しているだけでなく、ルネサンス時代のエピステーメと近代的なエピステーメとが交錯しているのである。

〈ファンタン＝ラトゥールの自画像〉

マネを「パリのベラスケス」として称賛する意図をもって制作された作品がある。1865年にマドリッドからファンタン＝ラトゥール宛に出した手紙のなかでマネがベラスケスペラを称賛していた



fig.1
ディエゴ・ベラスケス《ラス・メニナス》
1656年、プラド美術館

ことはすでに述べたが²⁾、そのファンタン=ラトゥールが描いた《パティニョールのアトリエ》(fig.2、1870年のサロン入選、オルセー美術館)がその作品である。ベラスケス《ラス・メニナス》のなかの画家はカンヴァスを前にして立っているが、ここでは画家はカンヴァスを前にして座っている。しかし、左手にパレットをもち右手に絵筆を握るポーズは同一である。また、両作品とも舞台は画家の仕事場(アトリエ)で、画家の周りには、制作中の現場を訪れた王女と女官たち(《ラス・メニナス》)、あるいは画家の友人たち(《パティニョールのアトリエ》)がいる。ファンタン=ラトゥールが《パティニョールのアトリエ》を制作したとき、ベラスケスの《ラス・メニナス》が念頭にあったことは疑い得ない。

周知のようにファンタン=ラトゥールは芸術家の集団肖像画を5点残している。最初の作品は《ドラクロワ礼賛》(fig.3、1864年のサロン入選、オルセー美術館)、2番目は《乾杯(真実礼賛)》(1865年のサロン入選後、破棄)、3番目が《パティニョールのアトリエ》、4番目は《テーブルの隅》(1872年のサロン入選、オルセー美術館)。5番目は《ピアノの周りで》(1885年のサロン入選、ジュ・ド・ポム美術館)。

最初の作品《ドラクロワ礼賛》は1864年に制作された。前年に亡くなったドラクロワの肖像画を中心に、画面に向かって右側前列に座る批評家シャンフルーリ(1821-1889)と詩人ボードレール(182-1867)、その間に立つマネ、右端に画家のブラックモン(1833-1914)とド・バルロワ(1828-1873)。左側に立つホイッスラー(1834-1903)とルグロ(1837-1911)、その間で座っているように見えるファンタン=ラトゥール自身。左端に座る批評家デュランティ(1833-1880)と立つ画家コルディエ(1823-不明)。

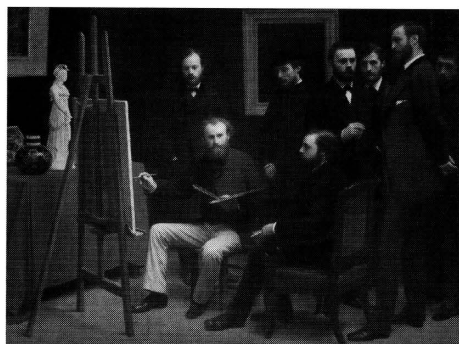


fig.2
ファンタン=ラトゥール《パティニョールのアトリエ》
1870年、オルセー美術館

この作品の右側には、ドラクロワを賞賛した批評家(シャンフルーリとボードレール)と画家(マネ)、左側にはドラクロワを賞賛する画家(ホイッスラーとルグロとファンタン=ラトゥール)とが相対している。美術史家アンリ・フォションは『19世紀と20世紀の美術-レアリズムからわれわれの時代まで』(1928年)のなかで、1863年のいわゆる「落選者展」の意義を強調し、マネと「落選者たち」を「1863年のグループ」と呼んだ³⁾。そのなかにファンタン=ラトゥールとルグロとホイッスラーがいたが、かれらはすでに「3人組」を形成していた。

『マネのモダニズム、あるいは1860年代の顔』(1996年)を著したマイケル・フリードもマネをふくむこの3人を「1863年の世代」と名付けた⁴⁾。フリードによれば、「1863年の世代」の画家たちはクールベのレアリズムと印象派のレアリズムの中間に位置する。クールベのレアリズムとは、観者(最初の観者は画家自身である)は壁や幕などに遮られることなく画面のなかに入り込み、いわば絵画と肉体的に結合することができる。そこでクールベを「肉体のレアリズム」と呼び、視覚(具体的には眼)に固執した印象派を「眼のレアリズム」と呼んで区別した⁵⁾。印象派の場合には、作品のなかに入り込むのではなく、作品の前で作品を鑑賞する観者を想定している。

フリードはファンタン=ラトゥールの自画像に関して、クールベ流の「肉体のレアリズム」と印象派流の「眼のレアリズム」とが混在していることを指摘した⁶⁾。その顕著な作例が《ドラクロワ礼賛》である。この作品のなかで、白い衣装をつけたファンタン=ラトゥール以外の人物(モデル)は、現実世界で当時の人たちが実際に見ていた通りの容姿と同じ姿形をしている。たとえば、前景で座るシャンフルーリの容姿は、当時の人たちが

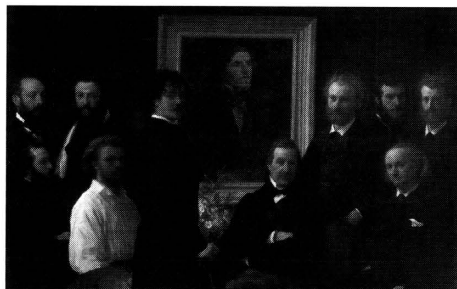


fig.3
ファンタン=ラトゥール《ドラクロワ礼賛》1864年、オルセー美術館

自分の眼で見ていたシャンフルーリの姿形のままである。つまり、現実世界でのシャンフルーリの右手は絵画のなかでも右手として表現され、左手は左手として表現されている。ところが、ファンタン=ラトゥール自身の容姿だけは、現実世界の左右が反転して表現されている。画面のなかのファンタン=ラトゥールは右手にパレットを持っているのである（左手はホイッスラーの衣装に隠れて見えない）。ファンタン=ラトゥールは右利きであると信じられているので、現実世界では、左手にパレットを持ち右手に絵筆を握っていたはずだ。画面におけるこの反転表現は、ファンタン=ラトゥールが鏡に映った像（鏡像）をそのまま画面に再現した結果である。

フリードの考えに従えば、ファンタン=ラトゥール以外の人物（モデル）は現実世界の人物の左右の構造を保持しているのも、私たち観者が作品の世界に侵入したとしても、少なくとも左右の構造で戸惑うことはない。この絵のなかではファンタン=ラトゥールの容姿だけが異空間にいる人物のように見える。何故こういう奇妙な事態が生じたのか。それは、鏡に写った自分の像（鏡像）を、自分の眼で見た通りに画面に忠実に再現したからである。ファンタン=ラトゥール以外の人物は、当時の人たちが自分の眼で見ていた人物の姿形がそのまま表現されている。たとえばシャンフルーリの上着は、右襟の上に左襟が重ねられている（いわゆる「男合わせ」）。ところが、ファンタン=ラトゥールの襟は「男合わせ」とは逆になっている。ファンタン=ラトゥールの姿形だけが鏡像なのだ。

床から垂直に、人物と平行に置かれた鏡は、その前に立つ人物の姿形を現実世界と左右を反転して映す。もちろん、人物だけでなくすべてのものを左右反転して映している。人間の顔面は鼻の垂直軸を中心にして左右がほぼ対称だから、一見したところでは奇異には思わない。しかし、熟視すると左右が反転していることがわかる。この鏡像（鏡に映った自分の顔面）は、他人が自分を見たときの顔面のイメージとは異なる。ミシェル・デヴォーは『不実なる鏡』（1996年）のなかで、アンディー・ウォーホルの次の言葉を引用している。「私が鏡に眼をやるとき、私にわかるのは、他人が私を見るように私は私を見ていない、ということだけである」⁷⁾。

ファンタン=ラトゥールは、鏡像が現実世界を左右反転して映していることに気づいていた。1860年前後に描かれた油彩と素描による自画像（単身像）では鏡像をそのまま画面に再現している。たとえば、油彩の《23歳の自画像》（fig.4、1859年、

ゲルノーブル美術館）とか素描の《自画像》（1860年頃、ルーヴル美術館）など。ここでは画家は左手に絵筆あるいはペンを握っているのである。

マイケル・フリードが指摘するように⁸⁾、批評家ルイ・ルロワが風刺雑誌『ル・シャリヴァリ』の1861年のサロン評（官設展覧会の批評）で取り上げるほど、ファンタン=ラトゥールの自画像は奇異なものに見えたのだ。批評家ルイ・ルロワが1874年4月25日付けの風刺雑誌『ル・シャリヴァリ』に掲載した「印象派画家たちの展覧会」という展覧会評によって、印象派という言葉が世に広められるきっかけになったことはよく知られている⁹⁾。その展覧会評でルイ・ルロワは、ヴァンサンという架空の画家と筆者（ルイ・ルロワ）との対話形式で出品作品を批評しているのだが、1861年のサロン評でも同じような対話形式でファンタン=ラトゥールの作品に触れている。

バルボ「—やあ、驚いた。非常に気難しい顔をした画家がいる。」

ウスパン「—しかも、左利きだ。」

（『ル・シャリヴァリ』1861年6月10日（月曜日）¹⁰⁾

〈左右反転の自画像〉

フリードによれば、「描いているさなかの画家が鏡に映し出された自己のイメージを左右反転のまま肖像化する」ようになるのは1860年頃からである¹¹⁾。先に引用したタバランの文章にも、「画家たちのアトリエ（画室）では鏡を用いたこのささやかな遊びは高く評価されていた」、という一節があった¹²⁾。目が見たままの現実の光景を画面に再現しようとすれば、鏡に映った左右反転した

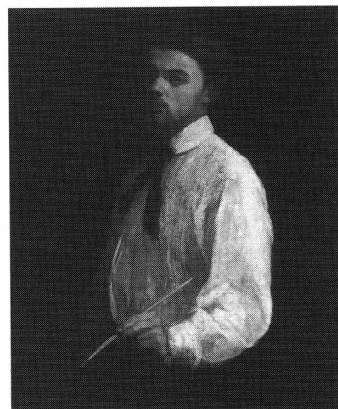


fig.4
ファンタン=ラトゥール 《23歳の自画像》
1859年、ゲルノーブル美術館

姿を画面にそのまま（左右反転したまま）描かなければならない。マネは1880年頃に自画像を制作しようと思いついたとき、20年ほど前にはやっていた鏡像による自画像に取り組んだのである。しかし、西洋絵画のなかで自画像の歴史をたどると、左右反転した鏡像がないわけではない。

ベラスケスが《ラス・メニナス》(1656年)を制作したときより少し前、1650年頃に、フランスの古典主義絵画を確立したニコラ・プサン(1593-1665)は2点の自画像を描いた。1650年の年記がある《自画像》(ルーヴル美術館)は友人で保護者だったシャントルーに贈られた。その前年(1649年)に描かれたもう1点の《自画像》(fig.5、ベルリン国立美術館)は鏡像である。その理由は、画中の画家が左手にペンを持っているからである。しかし、このペンは絵を描くためのものではなく、著述するためのものである。左手で支えているのはカンヴァスではなく本(芸術理論書)である。

フランス革命(1789年)以前にすでにフランス絵画における新古典主義の理想を実現していたジャック・ルイ・ダヴィッド(1748-1825)は、ジャコバン派の指導者ロベスピエールに心酔し、国民議会の議長を務めた。しかし、ロベスピエールの失脚するのにもない逮捕され、1794年8月2日から12月28日までのあいだリュクサンプール宮の監獄に収監された。獄中で《リュクサンプール庭園の眺め》(ルーヴル美術館)と《自画像》(fig.6、ルーヴル美術館)を残す。前者は印象派に近い写実的な手法で描かれた風景画、後者は鏡に映った自分の姿形をそのまま(つまり左右反転のまま)描いた肖像画(自画像)である。画中の画家は、左手に絵筆を握り右手にパレットを持つ。

古典主義風のいわゆる物語画(歴史画)的風景画を扱いながら印象派を予告するような風景画も描いたカミーユ・コロー(1796-1875)は2点の

自画像を残している。そして、この2点は明らかに鏡像である。最初の自画像(fig.7、ルーヴル美術館)は、1825年に初めてイタリアに遊学する直前に、画家の姿を手元に置いておきたいという両親の希望をかなえる目的で制作された。右手にパレットと支え棒をかかえているが、左手はキャンバスに隠れて見えない。右襟が左襟の上に重なっている(「男合わせ」の逆)。2番目の自画像(ウフィツィ美術館)は1840年頃の制作。1872年、フィレンツェのウフィツィ美術館の自画像コレクションからの申し出に対し、30年以上前のこの作品をコローは寄贈した。絵筆を握っている左手は見えるが、パレットを支える右手は見えない。首から黒いリボンのようなものが垂れ下がっているの襟の合わせ方もわからない。背景の緑色がかったオリーブ色はダヴィッドの《自画像》を思わせる。

モネやルノワールが印象派のグループ展を開く前の1860年代、彼らと親しく交わっていたフレデリック・バジール(1841-1870)は、1865年から67年頃のあいだに《パレットを持った自画像》(fig.8、アート・インスティテュート・オブ・シカゴ)を描いた。左手に絵筆を握り、右手にパレットと支え棒を持つ。ファンタン=ラトゥールの《パティニョールのアトリエ》の右端に描かれたバジール像より、この自画像の方が本人の顔貌に近い。ファンタン=ラトゥールの《23歳の自画像》(fig.4、1859年、グルノーブル美術館)との関連を指摘する人もいる。

マネが2点の鏡像による自画像を描いたのは1878-79頃である。マネの死後(1883年)にも鏡像による自画像を描いた画家たちがいる。ポスト印象派と通称されることになるゴーガンとゴッホとセザンヌである。ゴーガンが株式仲買商ベルタ

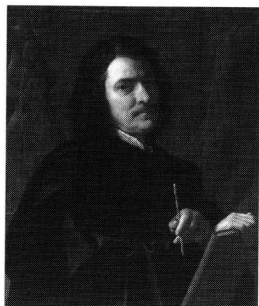


fig.5
ニコラ・プサン《自画像》
1649年、ベルリン国立美術館

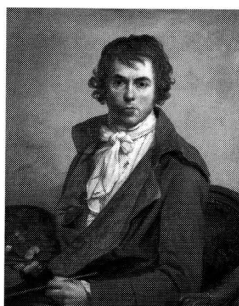


fig.6
ジャック・ルイ・ダヴィッド
《自画像》1794年、
ルーヴル美術館

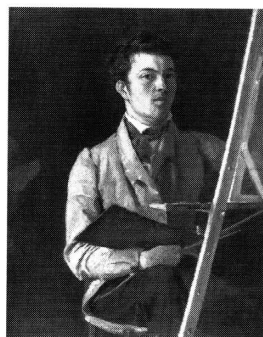


fig.7
カミーユ・コロー《自画像》
1825年、ルーヴル美術館

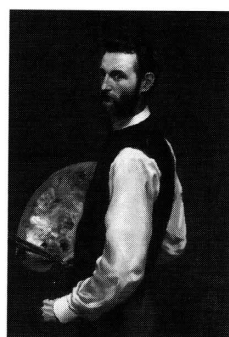


fig.8
フレデリック・バジール
《パレットを持った自画像》
1865-67年頃、アート・イ
ンスティテュート・オブ・
シカゴ

ンの店を辞め(1883年)、初めてブルターニュ地方を訪れる(1886年)までのあいだに描いた自画像《カンヴァスの前の自画像》あるいは《パレットを持つ自画像》(fig.9、ベルン、個人蔵)は、鏡像による作品である。画面の左辺にわずかに見えるキャンバスを前に、画家はキャンバスと反対方向の右側に視線を向ける。たぶんそこに鏡があるのだろう。絵筆は左手に握るが、パレットを持つ右手は見えない。右襟は左襟の上に重なっている(「男合わせ」の逆)。

ゴッホはパリ時代(1886-1888年)に30点ちかい自画像を描いた。最後に描いた自画像《イーゼルの前の自画像》(fig.10、1888年、国立ゴッホ美術館)では、画家は画面右辺にあるイーゼルを前にして立つ。右手でパレットを持つが、左手はイーゼルの陰になって見えない。上着の左襟が右襟の上に重なり、ここでは「男合わせ」になっている。アルル時代(1888-1889年)にゴーガンと別れてすぐに描いた数点の《包帯を巻いた自画像》は、包帯を巻いた耳と襟の重ね合わせ具合から鏡像であることが明白である。ゴッホの《イーゼルの前

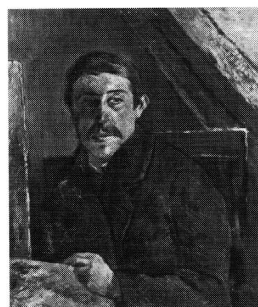


fig.9
ポール・ゴーガン《カンヴァスの前の自画像》あるいは《パレットを持つ自画像》1883-1886年頃、ベルン、個人蔵



fig.10
フィンセント・ファン・ゴッホ《イーゼルの前の自画像》1888年、国立ゴッホ美術館

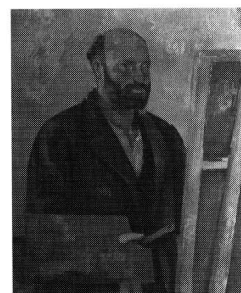


fig.11
ポール・セザンヌ《パレットを持った画家の肖像》1890年頃、ピュルレ・コレクション

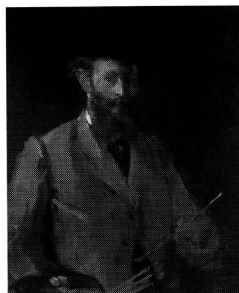


fig.12
エドゥアール・マネ《パレットを持った自画像》1878-79年頃、個人蔵

の自画像》の構図の源泉としてルーヴル美術館にあるレンブラントの《イーゼルの前の画家の肖像》が指摘されているが、レンブラントの自画像は鏡像ではない。

ゴッホの《イーゼルの前の自画像》の構図とセザンヌの《パレットを持った画家の肖像》(fig.11、1890年頃、ピュルレ・コレクション)との影響関係も言及されることがある。しかし、リウォルドが編纂したカタログ・レゾネ(作品総目録)ではセザンヌ作品の制作年代は1890年頃になっている¹³⁾。そうだとすれば、ゴッホはセザンヌの作品を目にすることはできなかっただろう。セザンヌの自画像はゴッホと同じように、画面右辺にあるイーゼルを前にして立ち、右手でパレットを持つが左手はイーゼルの陰になって見えない。襟は開いているので襟の合せ方では鏡像であるかどうかを見分けられない。

〈2点の自画像ふたたび〉

マネが1878-79年頃に描いた2点の自画像はともに鏡像である。《パレットを持った自画像》(fig.12)は、右手にパレットを持ち左手に絵筆を握り、襟も右側が左側の上に重なる「男合わせ」の逆だから、鏡像であることは明白である。ブリヂストン美術館の《(キャロットをかぶった)自画像》(fig.13)は両手を腰に当てて立っているの、パレットと絵筆で左右反転を判断することはできない。しかし、襟の重ね具合と左右の足の重心の置き方から、鏡像であることがわかる。襟は右側が左側の上に重なる「男合わせ」の逆である。画中の画家は、左足に重心を置き(支脚)、右足を前方に出して遊ばせている(遊脚)。ところが現実のマネは、この頃から病魔が左足を襲い始め、ついに死を招くことになる。現実世界のマネが左足を支脚にすることはあり得ないのである。

この時期に2点の自画像を描いたマネの動機と

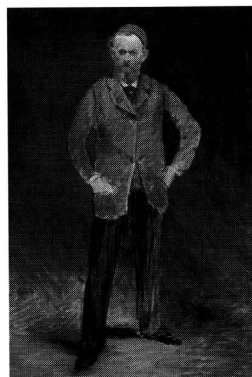


fig.13
エドゥアール・マネ《(キャロットをかぶった)自画像》1878-79年、石橋財団ブリヂストン美術館

して、死を招くかもしれない病魔への恐怖を指摘することもできる¹⁴⁾。そうだとすれば、『パレットを持った自画像』はマネの自負を表明しているのだけなのに対し、『(キャロットをかぶった)自画像』は自負と同時に病魔への恐怖をも暗示しているように思える。

《(キャロットをかぶった)自画像》の画家は『パレットを持った自画像』に比べると、画面の奥の方に位置している。ということは、『パレットを持った自画像』の画家は鏡に接近して立ち、『(キャロットをかぶった)自画像』の画家は鏡からやや距離を置いて立っているはずである。フリードは、鏡に接近して立つ『パレットを持った自画像』のマネは、見ることに描くこととがほぼ同時に行われているようだ、と言う。『パレットを持った自画像』から想像されることは、マネが鏡の中の反転した自らの姿に一瞥を与えるやいなや、彼はその手と絵筆の達人的な行為によって絵の具でそれを描写した¹⁵⁾。

フリードは『マネのモダニズム』のある注記で《(キャロットをかぶった)自画像》についても言及している¹⁶⁾。フリードは基本的に《(キャロットをかぶった)自画像》は鏡像ではないという立場に立っているのだ、拙論とは相いれない。しかし、その議論には興味ある部分もあるので検証しておきたい。彼の議論は次の4点に要約されている。

(1) 《(キャロットをかぶった)自画像》のなかでマネは、自分が自分自身を描く、という行為を描写していない。絵筆もパレットも持っていないので、この絵が鏡像であるという表徴はない。

(2) 《(キャロットをかぶった)自画像》のなかの全身像の画家は、『パレットを持った自画像』のなかの胸像の画家より、画面空間のなかでより深い位置に立っている。この2点の自画像を比較してわかることは、描く行為の描写と鏡像の装置との関係は、画家が絵画作品の面に接近していることと関連する。つまり、モデル＝画家と絵画作品とは、両者が出会うことができる腕の延びる範囲内にいること関連する。

(3) 《(キャロットをかぶった)自画像》のなかのモデルになっている人物(画家)の位置は、彼が演じている行為に関係がある。つまり、彼の前面にある距離とほぼ同じ距離にある何ものかを熱心に注視している行為に関係がある。(フリードが『マネのモダニズム』のなかで論じてきた仮説に従えば)、その何ものかは鏡に映った自分の姿にはかならない。しかし、彼のまなざしの特徴は、奇妙にも強烈に集中的で、そしてなによりも批判的である。そのまなざしは、彼が見つめてい

るのはエポーシュの状態の絵そのものではないのか、ということを暗示する。それは次のような意味だ。この2番目の作品(エポーシュの状態の絵)は、絵が仮想の鏡と取り替わった(一般的な鏡像による肖像画の基本的な構造)のではなく、絵が仮想の鏡を浸食した、あるいは、いわば否定した、という意味だ。言い換えれば、『(キャロットをかぶった)自画像』のなかのマネは、あたかも見るという行為を表そうとしているのだ。見るという行為は、画家＝モデルが鏡のなかの自分自身の姿に集中するのは異なる絵画の企てに、本質的に属している。この鏡のなかの自分自身の姿は、(フリードが『マネのモダニズム』のなかで論じてきたように)、マネの世代が模範的な意味を与えたものであり、マネ自身も『パレットを持った自画像』で実現したものである。マネは次のことに気づいたのかもしれない。見るという行為を表すためには、自分自身を描くという行為は避け、代わりに、比較的距離をとって、個人の感情を帯びない判断を示すようなまなざしを喚起すべきだということ。このまなざしによって、(モデルとしてのマネではなく)画家としてのマネは、制作中の作品に接近することができるのだ。そして、このまなざしは鏡像では明らかにされないだろう、ということは強調されなければならない。(この2点の自画像のうちどちらが先に描かれたかは明確には言えない。私(フリード)の理解では、『(キャロットをかぶった)自画像』は、たとえ『パレットを持った自画像』そのものではないとしても、鏡像による自画像の先行作品がともかく存在していることを前提にしている。因みに、『後続』作品《(キャロットをかぶった)自画像》の明らかに未完成な状態は、描くという行為がまだ完成していないということを暗示することによって、批判的なまなざしというテーマを強調している)。

(4) この2点の自画像に見られる深い構造上の対立は、『パレットを持った自画像』の当世風の黒い山高帽と《(キャロットをかぶった)自画像》の予想外のキャロットという帽子の違いによって、さらに強調される。前者は自分の画室における私的な生活だが、後者は対照的に彼の肖像の社会性を示している。このことは、ここで論じたように見るという行為をテーマ化するのに役立つ。

以上がフリードの議論である。この議論は、『パレットを持った自画像』は鏡像だがブリヂストン美術館の《(キャロットをかぶった)自画像》は鏡像ではない、という仮説に基づいている。『パレットを持った自画像』が鏡像であることの根拠のひとつは、パレットと絵筆が通常の場合の左右

の手とは反対の手にあることである。しかし、ブリヂストン美術館の《(キャロットをかぶった)自画像》はパレットと絵筆をもっていないので、左右が反転していること(つまり鏡像であること)が明示されてない、と結論付けている。だが、このフリードの結論は事実誤認に基づいていると思う。すでに述べたように、右襟と左襟の重ね具合と左右の足の重心の置き方から、ブリヂストン美術館の《(キャロットをかぶった)自画像》が鏡像であることは明らかである。

事実誤認があるにしてもフリードの議論には興味ある部分がある。(a) 鏡とモデル＝画家とのあいだの距離の問題、および(b) 描かれたモデル＝画家のまなざしの問題である。《(キャロットをかぶった)自画像》が鏡像であるという立場から、フリードのこのふたつの指摘を検証しておこう。

(a) 鏡とモデル＝画家とのあいだの距離の問題

フリードの議論に従えば、《パレットを持った自画像》の場合には、画架の上に載せられたカンヴァスは、画家の右脇ないしは左脇に、並んで置かれている。画家は目の前に置かれた「鏡の中の反転した自らの姿に一瞥を与えるやいなや、彼はその手と絵筆の達人的な行為によって絵の具で(すぐ脇に置かれたカンヴァスの上に)それを描写した」はずである。そのためには、「モデル＝画家と絵画作品とは、両者が出会うことができる腕の延びる範囲内にいること」¹⁷⁾が重要になる。しかし、《(キャロットをかぶった)自画像》でも、画家は自分の右脇ないしは左脇に、画架の上に乗せられたカンヴァスを、並べて置くことができる。描くという行為だけに注意を向ければ、鏡と自分とのあいだの距離は、《パレットを持った自画像》の場合のように、必ずしも近接している必要はない。

(b) 描かれたモデル＝画家のまなざしの問題

フリードの議論に従えば、《(キャロットをかぶった)自画像》の場合には、鏡が画家から離れた距離にあるから、鏡に映った自分の像を見るのは《パレットを持った自画像》の場合より困難がともなう。しかし、そうであれば、《(キャロットをかぶった)自画像》の目つきがやや陰しいのはそのためだと考えられる。

フリードは次のように仮定した。鏡に接近して立つ《パレットを持った自画像》は、見ることに描くことを同時に表現している。一方、鏡から離れて立つ《(キャロットをかぶった)自画像》は、描く行為ではなく見る行為を表現している。さらにフリードは、この2点の自画像によって描く行為と見る行為とを対比させようとしたために、次のような結論になってしまったのだ。《(キャロ

ットをかぶった)自画像》は鏡像ではなく、またモデル＝画家が見つめているのは鏡に映った自分の姿ではなくエボーシュ状態の描きかけの絵だ、という結論である。

《(キャロットをかぶった)自画像》は鏡像であると筆者は結論したが、その場合でもまだいくつかの問題点が残っている。この2点の自画像の制作順序、2点の自画像の帽子(当世風の黒い山高帽とキャロット)の違いなど。こうした問題があるにせよ、ブリヂストン美術館の《(キャロットをかぶった)自画像》が鏡像であること、また1880年前後のマネが自分をパリの画家として「最高の高みに登った」という意識と共に、死に至る病魔に襲われているという恐怖感をも、同時に表明した作品であることは疑い得ない。

〈鏡像としての自画像〉

石橋財団所蔵の自画像のなかに鏡像であることが明白な作品がある。小出檐重《帽子をかぶった自画像》(fig.14, 1924年)と坂本繁二郎《自画鏡像》(fig.15, 1929年)である。小出檐重は1921年に6カ月間フランスに旅行、1923年に関東大震災に遭遇した。この自画像はその翌年の制作。左手で絵筆を握り右手にパレットをもっているのも、鏡像であることは確かである。坂本繁二郎の《自画鏡像》は、タイトルと襟の重ね方から鏡像であることは明白。坂本にはもう1点《自像》(1923-30年)があるが、これには鏡像であることを示す明白な表徴はない。《自画鏡像》はこの自画像の制作期間中の最後の方で描かれたものだろう。

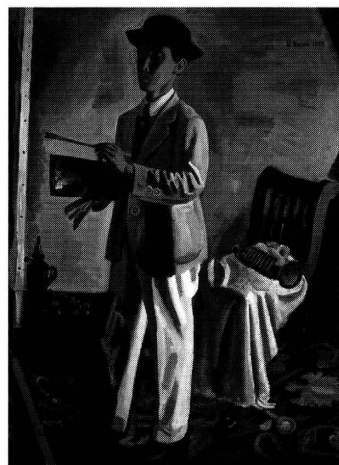


fig.14

小出檐重《帽子をかぶった自画像》1924年、
石橋財団ブリヂストン美術館

藤島武二《自画像》(1903年頃)、青木繁《自画像》(1903年)、それにセザンヌの振り向いている《帽子をかぶった自画像》(fig.16、1890-94年頃)も鏡像である可能性が高いが、もはやここで詳論する余裕はない。

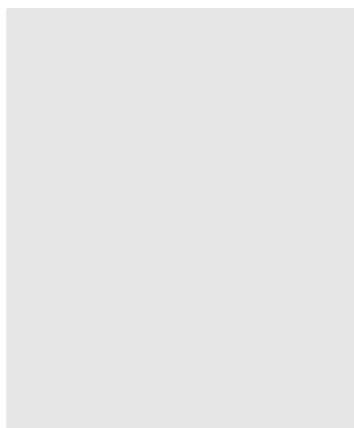


fig.15
坂本繁二郎《自画像鏡像》1929年、
石橋財団石橋美術館

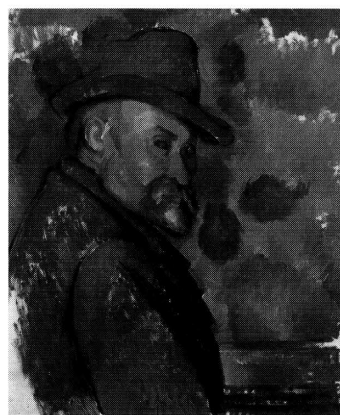


fig.16
ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》
1890-94年頃、石橋財団ブリヂストン美術館

註

- 1) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Paris, 1966〔ミシェル・フーコー (渡辺一民・佐々木明訳)『言葉と物—人文科学の考古学』1974年、新潮社、p.39〕
- 2) 拙稿「マネ《自画像》(上)」『館報』59号(石橋財団ブリヂストン美術館・石橋財団石橋美術館編集・発行)、2011年、p.81
- 3) Henri Focillon, *La Peinture aux XIX et XX Siecles du Realisme à nos Jours*, Paris, 1928, p.154
- 4) Michael Fried, *Manet's Modernism or The Face of Painting in the 1860s*, Chicago and London, 1996, p.185
- 5) 三浦篤は「肉体のリアリズム」と「眼のリアリズム」の狭間に「認識のリアリズム」という段階を提案した(三浦篤「ファンタン=ラトゥールの絵画世界」、『ファンタン=ラトゥール展』カタログ、宇都宮美術館、1998年、p.34)
- 6) Michael Fried, *op. cit.*, pp.382-383〔マイケル・フリード(有木宏二訳)「リアリズムの狭間」『ファンタン=ラトゥール展』カタログ、宇都宮美術館、1998年、pp.235-236参照〕
- 7) Michel Thevoz, *Le miroir infidel*, Paris, 1996〔ミシェル・デヴォー(岡田温司・青山勝訳)『不実なる鏡—絵画・ラカン・精神病』人文書院、1999年、p.29〕
- 8) Michael Fried, *op. cit.*, p. 251, p. 252 note 10
- 9) 拙著『印象派の挑戦』小学館、2009年、pp.88-95
- 10) ルイ・ルロワは「1861年のサロン評」を『ル・シヤリヴァリ』に何度かに渡って執筆しているが、ファンタン=ラトゥールの作品に触れているのは1861年6月10日号である。Luis Leroy, "Salon de 1861", *Le Charivari*, 10 June 1861
- 11) Michael Fried, *op. cit.*, p. 371〔前掲註6〕「リアリズムの狭間」『ファンタン=ラトゥール展』カタログ、p.229参照〕
- 12) 前掲註2)「マネ《自画像》(上)」『館報』p.79
- 13) John Rewald, *The Painting of Paul Cézanne, A Catalogue Raisonné*, Vol.1, p.420, No.649
- 14) J.Wilson-Bareau, "E.Manet, 'Self-Portrait with Palette'", *Exh.Cat. Manet / Velazquez, The French Taste for Spanish Painting*, p.502
- 15) Michael Fried, *op. cit.*, p.397〔前掲註6〕「リアリズムの狭間」『ファンタン=ラトゥール展』カタログ、p.244参照〕
- 16) Michael Fried, *op. cit.*, p.610 note 33
- 17) *Ibid.*, p.610 note 33

ギュスターヴ・カイユボット 《ピアノを弾く若い男》

新畑泰秀

レースのカーテンを通して、窓から柔らかな光が降り注ぐ瀟洒な邸宅の一室。部屋の中央にはグランド・ピアノに向かう男。パリジャンが過ごす午後のひとときを、隣室の鍵穴より覗き見ているかのようだ (fig.1)。構図、賦彩と光の表現に気を配って描かれたこの絵画が、モネやルノワールとともに絵画の革新運動を担った画家の作品と聞いて、不思議に思う人もいるだろう。作者はギュスターヴ・カイユボット。1876年の第2回印象派展以降5回にわたって印象派展に参加した。画家としての存在は、それほど広く知られているわけではない。その名はむしろ、印象派の援助者、あるいは世紀末にパリの美術界を賑わせた「カイユボット事件」の中心人物として、知られているかもしれない。

1848年、軍隊に寝具を供給する事業により財を成したマルシャル・カイユボットの息子としてギュスターヴ・カイユボットは、パリのフォブール＝サン＝ドニに生まれた。恵まれた環境に育ち、名門リセ（後期中等教育機関）ルイ＝ル＝グランを卒業した後、1869年に法律大学資格免状を得、翌年には法律特許を取得。同年から翌年にかけては普仏戦争に従軍した後絵画を志し、印象派と関わりながら多数の作品をのこした。生涯独身を貫き、パリ8区ミロメニル通りに父親が建てた邸宅を住まいとし、あるいはパリ近郊エソンヌ県のイエールの別荘で過ごし、園芸、川船の設計と船遊びを楽しみ、絵を描きながら過ごした。1882年にはパリの北西部セーヌ河畔のプティ・ジュヌヴィリエに弟と建てた邸宅に移り住み、1894年に当地で没した¹⁾。享年45歳であった。

カイユボットの画家としての活動は、印象派展

期より認められて生涯を通じて続けられた。しかし自ら作品を売却せず、展覧会への出品も印象派展の第2回展から第6回展を除く第7回展まで出品されるが、それが最後となる。さらに没後に遺された作品もその多くが遺族のもとに長らく留めおかれて来たために、作品が世に示された機会は決して多くはなかった。すなわち1894年にデュラン＝リュエル画廊で個展、1921年にサロン・ドートンヌで回顧展が開かれたが、後には小規模の展覧会がパリの画廊と地方で開かれたにすぎない。比較的大規模な展覧会としては、1976年から翌年にかけてヒューストン美術館とブルックリン美術館で開催された回顧展があるが、画業を総括する展覧会としてはさらに20年の時を経て1994から翌年にかけて、生誕100年を記念して開催されたパリのグラン・パレ・ナショナル・ギャラリーとアート・インスティテュート・オヴ・シカゴでの回顧展を待たねばならなかった。近年では2005年にローザンヌのエルミタージュ財団で、2008年から翌年にかけてコペンハーゲンのオードロップゴー美術館とブルックリン美術館で個展が、2011年から12年にかけては、パリのジャックマール＝アンドレ美術館とケベックのカナダ国立美術館でカイユボット兄弟を主題とした展覧会が開催され、画業への関心がようやく高まり始めている²⁾。

ギュスターヴ・カイユボットが没して120年が過ぎようとしている。都会的なセンスに溢れ、現代性を強く喚起させるその作品は今あらたに見出されようとしている。印象派に位置づけられながら着実な造形感覚に支えられた伝統的な表現手法を遵守し、当時のアカデミズムの自然主義的表現とも通じる特異な位置を確立している画家である。2012年に開館60年目を迎える石橋財団ブリヂストン美術館は、ギュスターヴ・カイユボットの初期の作品《ピアノを弾く若い男》(fig.1)をこのたび新たに収蔵した。本稿はカイユボットと印象派とのかかわりに触れながら、この作品について紹介しようとするものである。

1. カイユボットと印象派

裕福な家柄ゆえ、幼少期より芸術に接する機会に恵まれて育ったと想像されるカイユボットが本格的に絵筆を取るに至った経緯は何ら想像に難くない。有閑階級にあってさらに画業を本格化させ



fig.1
ギュスターヴ・カイユボット 《ピアノを弾く若い男》
1876年、石橋財団ブリヂストン美術館

た一つの契機となったのは、1872年に父親と訪れたイタリア旅行であったらしい。この時、父子はロンドン、パリと幅広く活動していた画家ジュセッペ・デ・ニティスと接触する機会を得たとされる。自然風景と都会風景を明るく彩色、生氣溢れる筆触で描き、第1回印象派展にも出品することになるイタリア人画家との出会いは、若きカイユボットの絵画への志を喚起したものと想像される。直後にアカデミーの肖像画家レオン・ボナのアトリエに通うようになり、翌年にはその弟子としてエコール・デ・ボザールへの入学を果たしている。

この頃カイユボットはさらにエドガー・ドガと知り合い、絵画の革新を目指す一群の画家たちと交流するようになる。しかし1874年の第1回印象派展に出品することはなかった。それは、保守的な家柄が革新運動に参加することを躊躇させたのかもしれないし、あるいは美術学校で伝統的技法を叩き込まれている最中に、印象派を目指す急進的な方向性を理解するのに時間を要したのかもしれない。2年後には、オーギュスト・ルノワールとドガの弟子エルネスト・ルアールの招きで、第2回印象派展に参加。出品目録によると、8点の作品を出品し、以後その情熱の多くを絵画の革新運動に注ぎ込むことになる³⁾。

第2回印象派展（名称は第1回展と同様その名に「印象派」の名はなく、単に「第2回絵画展」であった）は、ル・ペルティエ通り11番地のデュラン＝リュエル画廊で、1876年4月11日から5月9日まで開催され、20人の作家による252点の作品が展示された。参加者は初回に比べると減少していた。

その理由は、第1回展の参加者たちの何人か、すなわちセザンヌ、ブラックモン、ブーダン、ギョマンらが、絵画の革新を声高に叫ぶことを旨とする展覧会に出品して、再び酷評を浴びることを恐れたからであった。展覧会目録によると、モネは18点、ルノワールは15点、ドガは24点、モリゾは17点、ピサロは13点、シスレーは8点を出品し、初参加のカイユボットは以下の8点を出品している⁴⁾ (fig.2)。

- 17 床割り 〈パリ、オルセー美術館 Berhaut 1978-No.28: 1994-No.34〉
- 18 床割り 〈個人蔵、パリ Berhaut 1978-No.29: 1994-No.35〉
- 19 ピアノを弾く若い男 (マルシャル・カイユボット) 〈ブリヂストン美術館 Berhaut 1978-No.30: 1994-No.36〉
- 20 窓辺に立つ男 (ルネ・カイユボット) 〈個人蔵、ニューヨーク Berhaut 1978-No.26: 1994-No.32〉
- 21 昼食 〈個人蔵、パリ Berhaut 1978-No.32: 1994-No.37〉
- 22 庭 〈?〉
- 23 庭 〈?〉
- 24 昼食の後 〈所在不明 Berhaut 1978-No.20: 1994-No.2〉

第2回印象派展は、ブーダンらの予想に違わず、開催されるや否や一部の保守的な批評家たちの暴言に曝されることになった。たとえばアルベール・

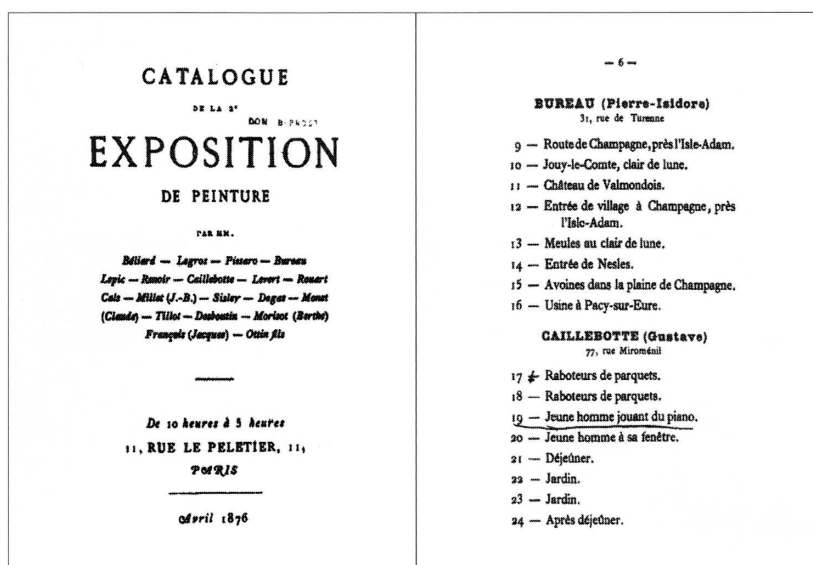


fig.2
『第2回絵画展図録』
(第2回印象派展図録) 1876年4月、
※右頁にカイユボットの出品作
Berson, 1996, Vol.1より

ヴォルフは『フィガロ』紙(4月3日付)に「これらの芸術家たちは、妥協することのない印象主義者であると自称している。彼らはすなわち、カンヴァスを用意し、絵具を塗り、筆を走らせ、いくつかの色調をでたらめに置いて、署名して終わり、といった具合だ」と記している⁵⁾。しかし批判ばかりでもない。初回がスキャンダルとなったが故に様々な期待を持って受け入れられた第2回展は、広く新聞や雑誌に報道されてヴァリエーションのある評論を得ることになった。たとえばエミール・ゾラは「われわれが今まさに新たな流派の誕生に立ち会っているのだと、確信させる内容だった。このグループには、やがては美術アカデミー自体を打破するであろう革命の萌芽を見出すことができる」と記し⁶⁾、グループの存在意義を認めて新たな絵画史の流れに位置づけようと試みた。

カイユボットも、新人ながら複数の批評家による評価を受け、それは結果として画家としての意識を以前に増して自覚させ、印象派への関わりをさらに深めていく契機となった。カイユボットは、翌年の第3回展実現のために奔走し、自らもより大型の作品に挑むことになる。さらには展覧会開催のための資金までを調達し、もうひとりの同派の支援者ヴィクトール・ショケとともに、グループでの存在感を増していった。

カイユボットが、仲間の作品を蒐集しはじめるのもこの頃のことである。それはやがて印象派の重要作を網羅した大コレクションを形成するに至る。と同時に自らのコレクションの行く末を考え始め、1876年27歳の時に早々と遺言状を作成し、コレクションを国家に一括して寄贈する意思を示した。この時、カイユボットは作品を、最初は当時の近代美術館として機能していたリュクサンブール美術館で展示してもらい、最終的にルーヴル美術館に収めてもらうことを併せて求めた。カイユボットが没したのは1894年2月21日。同年遺言執行人に指定されたルノワールは、3月11日に美術局長アンリ・ルージョンにこのカイユボットによる遺言状を送付した。そして国立美術館諮問委員会において故人の遺志は3月20日に受諾されることになった。

ところが当時のリュクサンブール美術館は、さほど広い展示空間を持たず、遺贈願の出された作品の全てを受け入れることを断念した。遺族との間で善後策について協議が続けられたが、結果として展示可能な作品だけが受け入れられることになった。受贈されたのは、申し込み69点のうちの40点—マネ2点、セザンヌ2点、モネ8点、ルノワール6点、シスレー6点、ピサロ7点、ドガのバス

テル7点、ミレーのデッサン2点等であった⁷⁾。ようやくこれら作品がリュクサンブール美術館で公開されると、今度はそこを自らの牙城としていたアカデミーの画家たちが、領域を侵犯されたと激怒し、大きなスキャンダルとなり、新聞や雑誌を賑わすことになった。その後、遺族が強く望むも残りの作品が国に収められることはついぞなかった。このカイユボットの国家への遺贈の顛末は「カイユボット事件」と呼ばれ、世紀末にあつてさえ印象派が保守的な人たちと闘わねばならなかったエピソードとして、しばしば引用されることになる。

国家に受贈された作品は、その後第2次大戦後の1947年にテュイルリー公園内の「印象派美術館」として知られたジュ・ド・ボム美術館(現在のジュ・ド・ボム国立美術館)で公開されて人気を博し、さらに1986年にオルセー美術館に移管されて、今では同館を代表する19世紀部門の重要なセクションを担っている⁸⁾。

2. ピアノを弾く若い男

オルセー美術館には、カイユボット自身の作品《床削り》(fig.3、1875年、パリ、オルセー美術館)も収められている。これは前年のサロンに出品して落選した後に印象派展へ出品された初期の画家渾身の作品である。幾何学的に計算された構図の中で画面は緊密に仕上げられ、光の表現が印象的な作品として注目された。

《ピアノを弾く若い男》は、《床削り》の直後に描かれた作品で、同様に第2回印象派展に出品された。描かれているのは、ギュスターヴの弟マルシャル・カイユボット(1854-1910)(fig.4)。彼がいるのは《床削り》と同じ、兄弟が住むミロメニル通りの邸宅の一室である。見るからに裕福な市民の邸宅の瀟洒な部屋は、同様に計算された構

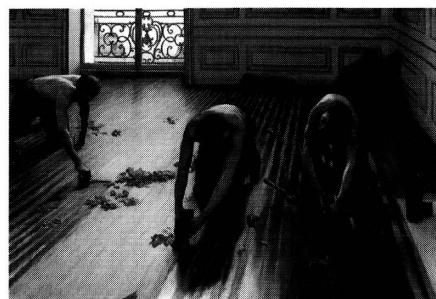


fig.3
ギュスターヴ・カイユボット《床削り》
1875年、パリ、オルセー美術館

図の中に注意深い筆致により繊細に描き出されている。壁面、カーテン、絨毯のそれぞれには、華やかな植物文が施されており、レースのカーテンを通してパリの町並みがうかがえる。窓から注ぐ柔らかな光は室内をほんのりと照らし出している。中央に鎮座するのは当時の最新機器にして贅沢な調度、エラル社（Eral）のピアノである。その表面は、漆黒の鏡面となり、マルシャルの手、鍵盤、部屋の隅に垂直方向に走る2本の金の飾りを鈍く映し出している。主人公たるマルシャルは薄暗いこの部屋で、外部から届く柔らかい光の巧みな表現によって引き立たされ、穏やかに、しかし真摯に鍵盤に楽譜に目を向けている。ピアノの上には無造作に積まれた3冊の厚巻な楽譜集が見える。

楽譜集が如何なる音楽家によるものかは未だ明らかではない。ひとつの説には、コンセルヴァトワールの教授であったアントワヌ＝フランソワ・マルモンテル（1816－1898）によるものではないか、との指摘がある⁹⁾。マルシャルはコンセルヴァトワールに通い、マルモンテルにピアノの指導を受けていた。自身も音楽家として知られ、1885年にノートルダム・ド・ロレット教会のオルガン曲を作曲し、1887年には「バレエの調べ *Airs de Ballets*」という曲の楽譜がアルトマンという出版者から上梓されている。その音楽様式を娘のシャルドー夫人は「ワグネリアン」（ワグナー楽曲の心酔者）、と伝えている¹⁰⁾。この絵に彼が描かれたのは22歳の時。兄と同様に、自らの芸術的才能の赴くままに過ごすことが出来た弟は、その関心を音楽へと向けたが、兄と同様それを専業とせず、生涯を兄と親密に暮らし、写真や切手蒐集、園芸等々趣味を分かち合い、それぞれの芸術的感性を認め合っていたという。

《ピアノを弾く若い男》に描かれたミロメニル通りの邸宅は、父親がパリ大改造の折り、1866年にパリ市から取得した土地に建てられ、同年の11

月に竣工したものであった（fig.5）。《ピアノを弾く若い男》というタイトルに、あるいは気取らないモデルの姿勢に示されているように、カイユボットは、この作品を弟の肖像画として描いた、というよりは、風俗画の如く「室内でピアノに向かう人」の図像を意図して描いたのかもしれない。というのも、第2回印象派展にはもうひとりの弟ルネを描いた《窓辺に立つ男》（fig.6、1875年、個人蔵）が出品されており、それにも固有名詞がタイトルにつけられておらず、しかも、ルネは背面から描かれている。これは、カイユボットが家族をモデルとした親密な情景を描きながらも、その匿名性において、近代生活の一面を切り取って描いた査証とも捉えられ、それは印象派における風景画制作に相通じるものがある。ちなみに《窓辺に立つ男》は、《ピアノを弾く若い男》と縦横の違いはあれ、ほぼ同じ大きさの作品であり、これらが対画、あるいは連作を意図して制作されたことさえ想像される。

3. ピアノのある風景

鍵盤楽器のある情景を描いた絵画の歴史は古い。宗教画においては、たとえば15世紀にファン・アイク兄弟によって描かれた《ゲントの祭壇画》（1432年、シント・バーフ大聖堂）の上段、聖なる父の右側にパイプ・オルガンを弾く様子が思い出される。風俗画における表現としては、17世紀オランダ絵画においてしばしばあらわれる。知られたイメージとしては、フェルメールによる《音楽のレッスン》（fig.7、1662－65年、ウィンザー城王室コレクション）があらう。これは18世紀ロココの時代のフランス絵画にも受け継がれ、たとえばジャン＝オノレ・フラゴナールは、1769年に《音



fig.4
《ピアノを弾くマルシャル・カイユボット、スクリヴ通り9番地》、個人蔵



fig.5
旧カイユボット邸、向かって左がミロメニル通り、右がリスボン通り（筆者撮影）



fig.6
ギュスターヴ・カイユボット《窓辺の若い男》1875年、個人蔵

楽の練習》(パリ、ルーヴル美術館)において、貴族の室内遊戯の情景としてこれを描いている。19世紀になってもこの主題は受け継がれるが、絵筆を持つ画家の肖像と同様に、音楽家の肖像として描かれる場合も多い。たとえば、新古典主義の画家ルイ・レオポルド・ボワイーが描いた《作曲家フランソワ・アドリアン・ボワルデュエの肖像》(fig.8、19世紀初頭、ルーアン美術館)は、その典型的な表現と言えよう。

カイユボットの時代、19世紀後半にも鍵盤楽器のある情景を描いた作品は多くあらわれる。たとえば1869年頃にエドガー・ドガは《ピアノを弾くディオ嬢》(オルセー美術館)、エドワール・マネは1868年に《ピアノを弾くマネ夫人》(オルセー美術館)などが代表的な例と言えよう。さらには《ピアノを弾く若い男》と同じ、第2回印象派展に、ルノワールは《ピアノを弾く女》(fig.9、1875-76年、アート・インスティテュート・オブ・シカゴ)を出品しており、「ピアノを弾く女」はルノワールを代表するイメージとしてその後もこの主題は描き続けられる。これらは、何れの場合も、西洋美術史における室内画の伝統を踏まえながらも、パリの近代化に伴う新しい時代の要素を付加している¹¹⁾。

この時代にピアノという楽器が描かれる意味は、それまでの図像と異なる質も包含している。現在で最もポピュラーな鍵盤楽器であるピアノは、19世紀のフランスにおいては、エラール社によるピアノがそれを代表していた。同社の創立者は、セバスティアン・エラール(1752-1831)。彼は1821年にダブル・エスケープメン・アクション、すなわちピアノの高速連打を可能にし、音楽表現の可能性を大きく広げる画期的な技術を生み出した人物として知られる。19世紀後半にエラール社のピアノの製造は興隆を極め、フランスでは「エラール」という言葉自体がピアノを指し示すことさえあったという。たとえば、ルイ・エノートルは印象派展を見て、『コンスティテューションネル』

紙(1876年4月10日付)の「芸術的運動、デュラン=リュエル画廊の非妥協派の展覧会」と題した評論の中で《ピアノを弾く若い男》に描かれたピアノについて触れているが、マルシャルが「大きく堂々たるエラールの前に座っている」と記している¹²⁾。

ピアノという楽器が社会生活の中で文字通り市民権を獲得したのは、当時のフランスの経済状況を背景としている。それは、社会の経済力が次第に高まり、経済力を持った市民が都市文化を形成し、そしてその上に強い国家意識が生み出された時代であった。産業革命により勤労者の生活が、労働時間と非労働時間に区分されるようになった。この非労働時間の中で「余暇」、「自由時間」という概念が生まれた。職業を離れた教養や趣味の領域があらたに形成されたのである。ピアノの発展は、音楽を愛好する人々の増大だけではなく、富裕な市民階層において、ピアノが身分を象徴する機能を持ったことにも関連しており、《ピアノを弾く若い男》も明らかに近代化を進める首都パリの新しい時代をささやかに表象している、と見なすことができる¹³⁾。

4. 《ピアノを弾く若い男》の様式

《ピアノを弾く若い男》はオルセーの《床削り》とともに、第2回印象派展の展評において比較的好意的に受け取られた。論評の多くは、何よりも新人画家の絵画が湛える瑞々しさを讃えている。たとえばフィリップ・ビュルティはロンドンで発行された『アカデミー』誌(4月15日付)に掲載した「〈非妥協派〉の展覧会」と題した評論の中で、カイユボットが「情景を偽ることなく真摯に鑑者に伝える見事な肖像画を出品している」と述べ¹⁴⁾、エミール・ブレモンは、『ラペル』誌(4月9日付)



fig.7
ヨハネス・フェルメール《音楽のレッスン》
1662-65年、ウインザー城王室コレクション

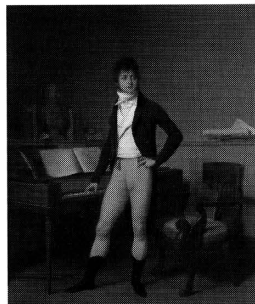


fig.8
ルイ・レオポルド・ボワイー《作曲家フランソワ・アドリアン・ボワルデュエの肖像》
19世紀初頭、ルーアン美術館



fig.9
ピエール=オーギュスト・ルノワール《ピアノを弾く女》
1875-76年、アート・インスティテュート・オブ・シカゴ

に掲載した「印象主義者たち」と題した評論の中で、カイユボットの『《窓辺に立つ男》』『ピアノを弾く若い男』『床削り』は、驚くほどの近代性を示している。そして堅固にかたち作られた空間を内包している。それは、気取らず実直に真実、生活、親密さを見事に表現している」と記している¹⁵⁾。

エミール・ゾラは『メッサジェ・ドーロップ』誌に掲載した「パリ便り—5月のふたつの展覧会」(6月6日付)の中で、同年のサロンについて概観した後、第2回印象派展について触れて、モリゾ、ピサロ、ルノワール、シスレー、そしてモネを賞賛している。ドガについては、明るく軽やかな筆致で描かれた洗濯女やバレエの絵を賞賛する一方で、丁寧な筆致で室内の情景を克明に描き出した『《事務所の人々、ニューオリンズ》』(fig.10、1873年、ポー市立美術館)について「創造的ではないのかもしれない」と苦言を呈している。そして同様な質を示す新人カイユボットについては『《床削り》』と『《窓辺に立つ男》』について「驚くべき立体感をもつ作品だ。ただし、まったく芸術的でない絵画である。あまりに正確すぎるが故に、鏡のように明晰で通俗的な絵画となってしまう。現実を撮影した写真は、独創的な芸術的才能の刻印によって引き立てられない限り嘆かわしいものとなる」とドガと同様に厳しい評価を示している¹⁶⁾。

『ピアノを弾く若い男』『窓辺に立つ男』『床削り』の3点の絵画を特徴付けるのは、比較的暗い色調、入念な仕上げ、堅固な線描といった点である。印象派の大胆な賦彩、明るい色彩や屋外の情景の描写といった特徴よりはむしろ伝統的な手法に近いということだ。カイユボットの初期の絵画様式は、明らかにエコール・デ・ボザールの師レオン・ボナの、アカデミストにしては「態とらしさ」のない比較的穏やかな描法に拠っている。カイユボッ

トの絵画は一方で、印象派のスナップショット的な構図の取り方に対し、遠近法を駆使した計算された構図を特徴とする。それはドガの絵画、たとえば『《事務所の人々、ニューオリンズ》』やバレエを主題とした一連の作品の、画面の一方の上方に消失点を設定した遠近法を使う手法と類似している。さらにはドガ同様に、カイユボット兄弟が関心を持った写真による構図の研究が関係しているのかもしれない。幾人かの批評家たち、たとえばルイ・エノートルやエミール・ボルシュロンは『ピアノを弾く若い男』の、俯瞰して見たピアノがすこし歪な形であることを難じているものの¹⁷⁾、その準備素描を見れば (figs.11-13)¹⁸⁾、画面構成においてカイユボットが遠近法を如何に気遣っているかがわかる。カイユボットの絵画が構図への配慮と、綿密な筆致による仕上げのみを特徴とするならば、確かにゾラが危惧するように、絵画としての革新性はモネやルノワールのそれよりも穏やかかもしれない。

『ピアノを弾く若い男』に明らかな、カイユボットの初期作品に共通する伝統的な描法は、印象派の初期の活動にあつては、モネやピサロらの手法が突出して革新的であつたが故に違和感があつたかもしれない。それは、印象派がアカデミズム、つまりはサロン画家たちと真っ向から対立する立場にあつた、と当時のマスコミが煽り立てた構図においてもっともな見方であろう。しかし、伝統を遵守するアカデミズムを、前衛の画家が敵視してばかりいたわけではない。ルノワールは、第1回印象派展以前に、すでに何度かサロンに出品・入選していたし、その後自らの印象派的手法に伝

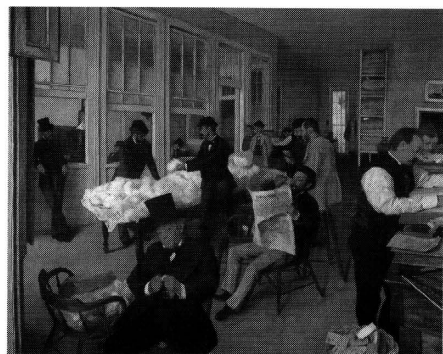


fig.10
エドガー・ドガ『《事務所の人々、ニューオリンズ》』
1873年、ポー美術館

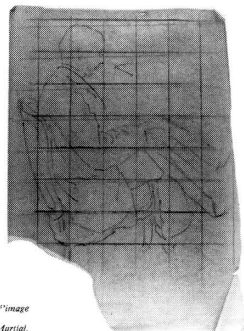


fig.11

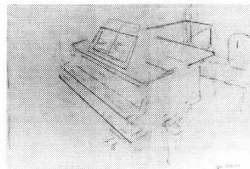


fig.12



fig.13

fig.11-13
ギュスターヴ・カイユボット
『《ピアノを弾く若い男
(準備素描)』、個人蔵

統的な手法を見直すことにより修正を加え、1879年のサロンには《シャルパンティエ夫人とその子供たち》を出品して、成功を収めている¹⁹⁾。セザンヌもまた、初回に印象派展に参加するも、早々とグループと距離を置いたことが知られる。セザンヌは、印象派の芳醇で破綻のない見たままの自然の色調を伝えるがために純色のみで描く方法は、しばしば遠近感と現実感を失うことに気付き、17世紀の画家ニコラ・プッサンを手本に、過去の偉大な芸術の堅固な量感、永劫に耐えられる強靱さをとどめた印象派の創造に人生を懸けた。一方で、印象派の衝撃とその動向は、伝統を遵守してきたサロンの画家たちにも多分に影響を与え、1880年代後半には印象派の手法は彼らの作品にも認められはじめる。伝統と前衛は、対立しつつも互いに関係を持ち、影響も与え合っていた。印象派とアカデミズムは互いに実は浸透しあい、19世紀という芳醇な世界を織り上げていったのだ²⁰⁾。

このように見るならば、印象派展の初期も実は多様な様式を各々の画家は示していたことがあらためて認識される。モネの《印象、日の出》のように決定的に伝統との乖離を示す傾向があった一方で、ドガの《事務所の人々、ニューオリンズ》やカイユボットの《ピアノを弾く若い男》を含む一連の作品のように、描法としてはモネのそれにくらべて「穏やかな」手法をとった作品も、印象派の初期活動を定義づける上で重要な要素と考えられはじめる。《ピアノを弾く若い男》の様式は、今一度ここで新古典主義の画家ボワイーの《フランソワ・アドリアン・ボワルドューの肖像》(fig.8)と、印象派様式の典型であるルノワールの《ピアノを弾く女》(fig.9)と並べてみるならば、その差異が見えてこよう。《ピアノを弾く若い男》は、確かに賦彩は伝統に拠るが、主題は古めかしい物語の再現に拘泥しないスタイリッシュな近代都市パリを象徴する情景を選択し、逆光の中で映える主題のイメージ、モチーフの表面に描かれた繊細な反射の効果の表現を研究しており、それはモネたちが真摯に取り組もうとした「光」の表現と同列に置かれるべき試みであろう。そして画面全体が醸し出す雰囲気は、アカデミズム絵画にしばしば見られる画面作りの「態とらしさ」が微塵も見られない。この傾向は実はその後の印象派が徐々に認められていく過程にあって、サロン絵画の中で後に徐々に顕著となる傾向であり、カイユボットは彼ら折衷派の先鞭を付けた、とも言えるかも知れない。

革新的なグループにあって、ギュスターヴ・カイユボットという画家が、自ら何をすべきと考え、

それをどうやって果たし得たのかについては、より詳細に議論されなければならない。しかし1874年に革新的グループに出会って後、1876年の第2回印象派展に出品された、短い期間に集中して描かれた作品群は、より詳細に検討すべき要素を多分に残している。たとえば、その影響関係を考察するならば、師ボナのみならず、同時代を意識したスタイリッシュな表現については《赤いソファに腰掛ける女》(fig.14、1876年、個人蔵)に見られるような、近代都市を洗練されたセンスと描法で描き出したジュセッペ・デ・ニティスのなどは手本とし得た画家として注目される²¹⁾。

エミール・ゾラは、先に引用した1876年の展覧会の批評の1年後、『セマフォール・ド・マルセイユ』誌(4月19日付)に寄稿した「パリ・ノート、印象派の展覧会」において、あらためてカイユボットについて触れている。ここでゾラが対象とするのは、同年の印象派展にカイユボットが出品した《パリの街路、雨》(fig.15、1877年、アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ)。場所は屋外へと変更されているものの画家が目指す絵画の方向性は前年と何ら変わるところがない。ゾラはここでカイユボットは「最も勇気ある若き画家であり、正真正銘の現代的主題にも尻込みしない。……カイユボット氏はその才能がもう少しだけ柔軟になれば、必ずやこの集団における最も大胆な画家の一人となるだろう」と記している²²⁾。これはすなわち革新的画家たちを擁護する作家の評価の転換にはかならない。カイユボットの絵画はそれから間もなく印象派的な明るい戸外風景を描いた作品へとシフトしていくが、印象派の画家としての独自性は、初期の作品においてむしろ顕著にあらわれていると言えよう。《ピアノを弾く若い男》は、その意味において、カイユボットの画家としての特質を存分に内包しているのだ。

《ピアノを弾く若い男》は、画家の手を離れた後、一度はギュスターヴ・カイユボットの母親の従兄弟ウジェーヌ・ドフレーヌの手になつた (fig.16、1878年、個人蔵)。ドフレーヌはカイユボットの10点の作品、すなわち《床削り》、《ピアノを弾く若い男》そして《読書するウジェーヌ・ドフレーヌの肖像》などを所蔵していた。彼が1896年に没した後、それら絵画は《ピアノを弾く若い男》とともに弟マルシャル・カイユボットの手に戻され、その遺族により保存されてきたという。このたび、縁あって石橋財団ブリヂストン美術館の所蔵となり、印象派コレクションの中に加えられることとなった。



fig.14
ジョゼッペ・デ・ニティス
《赤いソファに腰掛ける女》
1876年、個人蔵

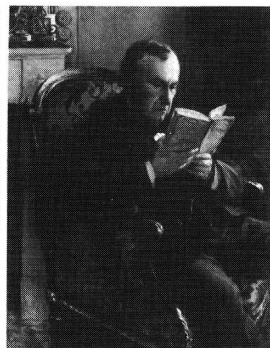


fig.16
ギュスターヴ・カイユボット
《ウジェーヌ・ドフレーヌの肖像》
1878年、個人蔵



fig.15
ギュスターヴ・カイユボット《パリの街路、雨》1877年、
アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ

註

- 1) Kirk Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, New Haven and London, 1987, pp.1-12; 島田紀夫「印象派の風景画家」『世界美術大全集 第22巻印象派時代』小学館、p.277.
- 2) Exh.cat., *Gustave Caillebotte 1848-1894* (eng. vers., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*), Galeries Nationales du Grand Palais, Paris, 12 September, 1994-9 January 1995; The Art Institute of Chicago, 15 February-28 May, 1995; *Dans l'intimité des frères Caillebotte: Peintre et Photographe*, Musée Jacquemart-André, Institut de France, Paris, 25 March-11 September 2011; Musée National des Beaux-Arts du Québec, 6 October 2011 – 8 January 2012.
- 3) Anne Distel, "Chronology", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.312.
- 4) Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume II: Exhibited Works*, San Francisco, 1996, pp.33-34; Marie Berhault, *Caillebotte: Sa vie et son œuvre, catalogue raisonné des peintures et*

pastels, Paris, 1878.

- 5) Albert Wolff, "Le Calendeire parisiern", *Le Figaro*, 3 April 1876, p.1. in Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, San Francisco, 1996, pp.53-113.
- 6) Emile Zola, "Deux Expositions d'art au mois de mai", *Le Messager de l'Europe*, June 6, 1876; in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.111-113. エミール・ゾラ、三浦篤・藤原貞朗訳『美術論集』藤原書店、2010年、p.323.
- 7) Anne Distel, "Appendix III: Gustave Caillebotte Collection", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.322-340.
- 8) Jean Laurent, Pierre Vaisse & Jacques Chardeau, "The New Caillebotte Affair", *October*, volume 31, Winter 1984, pp.69-90. 高階秀爾「ルーヴルが選んだ印象派—カイユボット・コレクション遺贈の真相」(ルーヴル収集秘話・最終回)『芸術新潮』第37巻第6号(通巻438号)、1986(昭和61)年6月、pp.110-114
- 9) Grorial Groom, "71 Yourng Man Playing the Piano", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.193.
- 10) Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, 1987, p.64. マルシャルの音楽については、以下の音楽CDがリリースされている。*Musique de Martial Caillebotte par Mario Hacquard, baryton, Claude Collet et Pascal Dessein, piano*, 2011.
- 11) James Parakilas & Charlotte N. Eyerman, "Five 1820s to 1870s: The Piano Calls the Tune", in James Parakilas, et al., *Piano Roles: A New History of the Piano*, New Haven and London, 2001, pp.150-183.
- 12) Louis Enault, "Mouvement artistique: L'Exposition des intransigeants dans la galerie de Durand-Ruelle", *Le Constitutionnel*, 10 April 1876, p.2. in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.81-83.
- 13) 大宮真琴『新版ピアノの歴史——楽器の変遷と音楽家のはなし』(オルフェ・ライブラリー)、音楽之友社、2009年、pp.150-162; 西原稔『ピアノ大陸ヨーロッパ—19世紀・市民音楽とクラシックの誕生』アルテスパブリッシング、2010年、pp.102-110.
- 14) Ph. Burty, "Fine Art: The Exhibition of the 'Intransigeants'", *The Academy* (London), 15 April 1876, pp.363-364, see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.64-65.
- 15) Emile Blémont, "Les Impressionnistes", *Le Rappel*,

- 9 April 1876, pp.2-3. see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, p.63.
- 16) Emile Zola, “Deux Expositions d’art au mois de mai”, *Le Messager de l’Europe*, June 6, 1876; see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.111-113. ゾラ『美術論集』、2010年、pp.326-327.
- 17) Enault, 1876, p.2; Emile Porcheron, “Promenades d’un flâneur: les impressionnistes”, *Le Soleil*, 4 April, 1876, pp.2-3. in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.103.
- 18) Jean Chardeau, *Les dessins de Caillebotte*, 1989, p.28.
- 19) 千足伸行「時代の中のルノアール」『ルノアール展』図録、名古屋市美術館、1988年、pp.20-31.
- 20) ブリュエノ・フカール「IV. アカデミズム第三世代と印象派以後の展開」『フランス絵画の19世紀』展図録、島根県立美術館、横浜美術館、2009年、pp.38-139.
- 21) ニティスもまた、近年再評価が進む画家の一人である。2010年から11年にかけてパリのプティ・パレ美術館で大規模な展覧会が開かれている。Exh. cat., *Giuseppe De Nittis: La modernité élégante*, Petit Palais, Musée des Beaux-Arts de la Ville de Paris, 2010-2011, cat.no.95, pp.248-249.
- 22) Emile Zola, “Notes parisiennes: Une Exposition: Les Peintres impressionnistes”, *Le Sémaphore de Marseille*, 19 April 1877, p.1; in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.190-191. ゾラ『美術論集』、2010年、pp.334-335.

作品基本情報

ギュスターヴ・カイユボット (1848-1894)

ピアノを弾く若い男

1876年

油彩・カンヴァス

81.0×116.0cm

署名、年記（右下に）: G.Caillebotte 1876

Gustave Caillebotte (1848-1894)

Young Man Playing the Piano (Jeune homme au piano)

1876

Oil on canvas

81.0×116.0cm

Signed and dated lower right: G. Caillebotte 1876



展覧会歴 Exhibition

2e Exposition impressioniste, April 1876, 11, rue Le Peletier, Paris, No.19. *Works in Oil and Pastels by the Impressionists of Paris*, American Art Galleries & National Academy of Design, New York, 1886, No.28. *Rétrospective d'œuvres de Gustave Caillebotte*, Galerie Durand-Ruel, Paris, June 1894, No.43. *Rétrospective Gustave Caillebotte*, Salon d'Automne, Paris, 1921, No.2704. *Rétrospective Gustave Caillebotte*, Galerie Beaux-Arts, Paris, 25 May-24 July 1951, No.6. *Gustave Caillebotte: A Retrospective Exhibition*, Museum of Fine Arts, Houston, 22 October 1976-2 January 1977; Brooklyn Museum of Art, 12 February-24 April 1977, p.92, No.13, reproduced. *Gustave Caillebotte*, Musée Pissarro, Pontoise, 22 May-21 October 1984, No.4. *Gustave Caillebotte 1848-1894*, Galeries Nationales du Grand Palais, Paris, 12 September 1994-9 January 1995; The Art Institute of Chicago, 15 February-28 May 1995, No.71, reproduced in color. *Gustave Caillebotte: the Unknown Impressionist*, Royal Academy of Arts, London, No.19, pp.114-115, 115 reproduced in color.

文献 Bibliography

A. de L. (Alfred de Lostalot), “L’exposition de la rue de Le Peletier”, *La Chronique des arts et de la curiosité*, 1 April 1876, p.119. (see Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.86).
 Emile Porcheron, “Promenades d’un flâneur: les impressionnistes”, *Le Soleil*, 4 April 1876, pp.2-3. (see J. Kirk T. Vanedoe, Translated by J. Kirk T. Vanedoe and Suzanne Boorsch, “Appendix A-Criticism” by in Exh. Cat., *Gustave Caillebotte: A Retrospective Exhibition*, The Museum of Fine Arts, Houston and The Brooklyn Museum, 1976-77, p.207; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.103).
 Simon Boubée, “Beaux-Arts: exposition des impressionnistes chez Durand-Ruel”, *Gazette des France*,

5 April 1876, p.2. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.64).

Marius Chaumelin, "Actualités: l'exposition des intransigeants", *Gazette des étrangers*, 8 April 1876, pp.1-2. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.68).

Emile Blémont, "Les Impressionnistes", *Le Rappel*, 9 April 1876, pp.2-3. (see J. Kirk T. Vanedoe, 1976-77, p.20; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.63).

Louis Enault, "Mouvement artistique: l'exposition des intransigeants dans la galerie Durand-Ruel, rue Le Peletier", *Le Constitutionnel*, 10 April 1876, p.2. (see J. Kirk T. Vanedoe, 1976-77, pp.207-208; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, pp.82-83).

G. d'Olby, "Salon de 1876: avant l'ouverture. Exposition des intransigeants chez M. Durand Ruel, rue Le Peletier", *Le Pays*, 10 April 1876, p.3. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.100).

Georges Rivière, "Les Intransigeants de la peinture", *L'Esprit moderne*, 13 April 1876 (reprint: Pierre Dax, "Chronique", *L'Artiste*, 1 May 1876, pp.347-439, see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.70).

Philippe Burty, "Fine Art: the Exhibition of the 'Intransigeants'", *The Academy*, 15 April 1876, pp.363-364. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.65).

Edmond Duranty, *La Nouvelle Peinture: A propos du groupe d'artistes qui expose dans les galeries Durand-Ruel*, Paris, 1876. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.72-81).

François Thiébaud-Sisson, "l'Exposition Caillebotte", *Le Temps*, 7 June 1894.

Marie Berhault, *La vie et l'œuvre de Gustave Caillebotte*, Paris, 1951.

Marie Berhault, *Caillebotte l'impressionniste*, Lausanne & Paris, 1968, p.22.

Marie Berhault, *Caillebotte: sa vie et son œuvre: Catalogue raisonné des peintures et pastels*, Paris, 1978, No.30, reproduced.

Kirk Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, New Haven & London, 1987, pp.64-65, No.12, reproduced in color.

Marie-Joséphine de Balanda, *Gustave Caillebotte*, Lausanne, 1988, pp.68-69, reproduced in color.

Jean Chardeau, *Les Dessins de Caillebotte*, Paris, 1989, pp.26-29.

Jean-Jacques Lévêque, *Les Années Impressionnistes*, 1870-1889, Paris, 1990, p.297, reproduced in color.

Jean-Jacques Lévêque, *Gustave Caillebotte, L'Oublié de l'Impressionisme 1848-1894*, (Collection: ACR Edition, Poche Couleur), Paris, 1994, pp.33-39, pp.38-39 reproduced in color.

Eric Darragon, *Caillebotte* (Collection: Tout L'Art Monographie), Paris 1994, pp.32-33, p.34 reproduced in color.

Marie Berhault, *Caillebotte: Catalogue Raisonné des Peintures et Pastels*, Paris, 1994, p.78, No.36, reproduced.

Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, pp.53-113

Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume II. Exhibited Works*, San Francisco, 1996, p.33, p.47, reproduced.

Pamela Todd, *The Impressionists at Home*, London, 2005, p.31, reproduced in color.

Daniel Chaperon, "Caillebotte, peintre du plain-pied. Points de vue naturalists", in Exh. cat. *Caillebotte: Au Coeur de l'impressionnisme*, Fondation de l'Hermitage, Lausanne, 2005, p.66, reproduced.

Éric Darragon, "Gustave Caillebotte, une nouvelle peinture", in Exh.cat. *Dans l'intimité des frères Caillebotte: Peintre et Photographe*, Musée National des Beaux-Arts du Québec & Musée Jacquemart-André, Institut de France, 2011, p.37, reproduced in color.

Gustave Caillebotte ou les aventures du regard (DVD), un film d'Alain Jaubert, Coproduction RMN, Musée d'Orsay, Paris, 1994.

来歴 Provenance

Eugène Daufresne, Paris; acquired from the artist.

Martial Caillebotte; acquired from the above circa 1896.

Caillebotte's heirs, Paris; by descent from the above.

Private Collection, Switzerland; acquired in 2005.

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundation; from 2011.

※引用図版の典拠は、注で引用の図版か、所蔵館による資料に拠る。

岡鹿之助《セーヌ河畔》、1927年のパリ風景

貝塚 健

1. はじめに

岡鹿之助（1898－1978）は、東京美術学校で岡田三郎助（1869－1939）に師事したのち、1925年にパリに渡り、第二次大戦が勃発する1939年まで14年間滞在した。その間、藤田嗣治（1886－1968）と親しく交わり、渡仏早々にサロン・ドートンヌに入選。その展示会場で自作のマティエールの弱さを実感し、以後、油彩の画材と技法の研究に取り組むきっかけとなる。藤田の初期作品や、アンリ・ルソー（1844－1910）、ジョルジュ・スーラ（1859－1891）などを学び、やがて考え抜かれた構図を細やかな筆致で描く風景画をものにした。帰国後は春陽会を主な作品発表の場として活動する。ひと気のない堀割、雪の中の発電所、時間が堆積したかのようなヨーロッパの城館や廃墟、そして三色スミレなどを繰り返し描いた。風景画のほとんどは实景に即した写生ではなく、黄金比などを利用して幾何学的に組み合わせられた心象風景である。

《セーヌ河畔》（fig.1）は、1927年に描かれ、渡仏後の岡が新たな様式を確立して間もないころの典型的な作品である。藤田の1910年代後半の、またルソーのパリ風景の影響が顕著であるが、色彩、モチーフ、構図などは岡独自のものといえる。海景とならんで、都市の河川風景は初期の岡の重要な題材であった。先行する《橋》（1927年頃、個人蔵）と《水門》（1926年、個人蔵）を合成した構図で、岡が自作を引用し組み合わせながら作品を作りだすプロセスを典型的に示している。

画面を見てみよう。画面に平行にセーヌ川が流れている。その中ほどに、奥から手前に向かって支流が本流に、T字型を作るように合流している。右手の船に2人、川べりに4人、一段上がった土手

の上に通行人が1人、合計7人の、人形のような人影が描かれている。このうち3人は釣り糸を垂れている。川べりの左手に街路樹が3本描かれ、笑いを誘うかのような枝振りを空中に広げる。支流の合流地点にかかる鉄橋がセーヌ本流に平行して描かれ、それらの二つの水平線が画面に安定を与えている。上を道路が走る土手の向こうは煉瓦作り、石造りの家々が立ち並んでいる。それらは舞台の書き割りのように平面的で、屋根の稜線を見ると遠近法は故意に無視されていることが分かる。

全体に、水平線と垂直線がリズムカルに交錯する。画面を横に三つに分けてみよう。下三分の一は、セーヌ川と土手が支配する水平線の世界である。中ほどは、家々の輪郭や大小の煙突たちがつくりだす垂直線が立ち並ぶ。上三分の一を占める空は、ふたたび、雲が横にたなびく水平の世界に転じている。縦横の直線に混じって、柔らかな曲線が二つ存在する。中央下、支流の流路が作る湾曲線と、これに平行するように右に描かれたクレーン車のアームである。これらの有機的な曲線が、固くなりそうな画面を心地よくほぐしている。

色彩は、濃い黒褐色、薄い褐色、オレンジ、黄色、青がバランスよく配られている。たとえばオレンジは、船の側面、川べりに立つ一人の服装、左上の看板、右の煙突の側面に用いられていて、それらは上部の、近づく夕暮の反映らしい雲の薄いオレンジに呼応している。

描法は、ごく薄塗りである。額からはずしてみると、カンヴァスも薄く光が透過するほどである。筆跡はほとんど残らない。カンヴァスの地の凹凸を生かし、細かいタッチを重ねているのが分かる。

1927年という時期は、岡にとって重要な転機となった。この新たに確立したスタイルの淵源から成り立ちについて探してみたい。

2. 藤田嗣治と岡鹿之助

フランス滞在中の岡に、最も大きな影響を与えた人物は、藤田嗣治である。親しい交流は数年間続いた。藤田との関わりは渡仏前から始まっている。

1922（大正11）年秋、パリの藤田は《私の部屋、目覚まし時計のある静物》（1921年、パリ、国立近代美術館）を東京へ送り、第4回帝展に出品した。東京美術学校在学中だった岡は、「この絵を見るために、いくども文展に通った」¹⁾らしい。岡は、

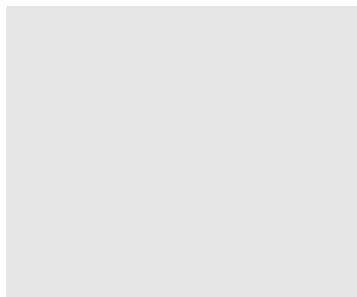


fig.1
岡鹿之助《セーヌ河畔》1927年、
石橋財団ブリヂストン美術館

岡田三郎助と小山内薫の藤田への紹介状を持って渡仏する。「他の画家には会わなくても藤田さんだけには会いたいと思った」²⁾という。

1925年2月1日、岡はパリに到着した。日本大使館近くのオテル・アンテルナショナルに、のちオテル・ド・パンテオンに南城一夫(1900-1986)とともに滞在する。どちらも日本人がよく使ったホテルである。2月17日、岡は藤田と初めて会う。4月21日、ドランプル街5番地のガレージを改装した画室に移る³⁾。ここは以前、藤田が使っていた画室だった。

岡家には、岡鹿之助が滞仏中、東京にいる家族あてに送った約200通の書簡が保存されている。その一部が、1998年に刊行された岡鹿之助文集『ひたすら造形のこぼれ』に、また、2008年にブリヂストン美術館で開催された岡鹿之助展の展覧会カタログに収載された。そのうち、1925年から27年にかけての書簡に藤田が頻出する。いくつかを見てみよう。到着後1カ月でまだホテル住まいだった1925年3月6日付書簡には、以下のようにある。

藤田氏への許へはよく伺ひます。藤田氏も私の所へ来て下さいます。いつも数時間、芸術に就いて話し合ひます。曾て学校に対し、先生に対して抱いて居た私の考へが茲に来て、藤田さんに会つて、初めて新しい力となつて参りました。私は今自分が芸術家である喜びを感じて居ります。仕合せで御座るます。藤田さんはフランスに来た初めの頃(今から十年前)の画まで取り出して、そして、漸く今の天地を創つたまでの苦しい過程など、まざまざと話されました⁴⁾。

藤田はアトリエに残されていた旧作を惜しみなく岡に見せている。多数あったはずの旧作の中で、岡が1910年代の作品に言及していることに注意したい。

1925年8月1日付書簡では、藤田からキュビズムを学んだことが語られている。藤田は1910年代半ば、キュビズム風の作品を残した。自分の通過してきたプロセスを後輩・岡に伝えようとしている。

藤田先生のお陰で先生が三月か、つて研究したキュービズム(立体派)を私は一カ月で大体終りました。まことにまことに得る所甚大で、これを知らずしては現代の絵画は解りません。絵に対する私の考へが全然一変したと同時に、故国の洋画壇に行われて居る所謂新傾向の絵の余りに出鱈目なるに只々驚き入る次第であります。(中略)

藤田先生は、昨日も亦今日も来られました。一週に少くとも一回、多い時は三回見えますが(私は先生の許へは月二回位の訪問)、その間に手紙が盛んに参ります。一週間も手紙が来ない時に訪れる便りの中には、大変御無沙汰したが、御変わりはありませんかなどと云つて来られます。

昨日は四時間に亘つて、芸術家たるものの生活の本義を論ぜられ、聴いて居る私は、全身の戦いを禁じ得ませんでした。

藤田氏は日本人画家の許へは殆んど訪問せられぬ由で、君のところへ来る位のものだとの事でした⁵⁾。

藤田がこのドランプル街5番地のアトリエを使用したのは、1917年から24年までのことである。第一次大戦末期から、「乳白色の下地」と線描によって画壇で評価を確立するまでの間にあたる。藤田はこのアトリエに強い愛着があったのだろう。だからこそ頻繁に岡をそのアトリエに訪ねたのではないだろうか。

1925年10月24日には、藤田に連れられてモンパルナスのヴァヴアン画廊でパウル・クレーの作品を見ている。また、11月17日にアトリエにやってきた藤田は、岡の目の前で、1時間あまりでその画室の一隅を小品に描き岡に進呈した⁶⁾。藤田の可愛がりようは、目を見張るばかりである。その要因はよく分からないのだが、東京生まれ、文学者を近親に持つことなど共通点があり、馬が合ったのだろう。藤田は後年、「僕は岡君の絵の地味なような所が非常に好きだった」⁷⁾と語っている。

この年秋のサロン・ドートンヌに、藤田に勧められて岡は風景画を出品した。後年繰り返し語るところの、展示会場で自作のマティエールの弱さを実感するのはこのときである。堅固なマティエールの追求、新しいスタイルの模索が始まる。

翌1926年、6月から9月にかけて、岡はブルターニュ半島北岸のトレガステルに滞在した。このとき新しい様式への手掛かりを得ることになる。滞在中に制作した《信号台》(目黒区美術館)がその自信作で、秋、サロン・ドートンヌに入選する。

1927年春、《海》を制作した。5月29日付書簡には、以下のようにある。

本日、四十号の大作『海』を完成いたしました。巴里に来て以来、初めての会心の作で御坐ひます。昨夏、トレガステルの仕事と較べて見て、大いなる進歩の跡を見出す事が出来まして、湧き出る喜びの情を禁じ得ません。(中略)た

またま、昨日藤田先生が来られて、『海』を見て、大いなる好評と激励の言葉とを置いて行かれまして⁸⁾。

この《海》は、完成後まもなく、パリで岡のバトロンとなった薩摩治郎八（1901–1976）が購入する。薩摩の手許からその年の11月、サロン・ドートンヌに《セレニテ》の題名で出品される。さらに第二次大戦後、《滞船》（fig.2、1927年、所在不明）と改題された。後年、岡は迷いが生じたとき、不調に陥ったときに、繰り返しこの「セレニテ」を原点と位置づけて振り返っている。岡にとっての最重要作品だが、現在は所在不明、再発見が待たれるところである。

岡の藤田への感情が微妙に変化するののは、岡の滞仏3年を過ぎようとする頃である。岡は藤田への敬意や感謝の気持ちを生涯忘れることがなかったが、二人はあまりに対照的な性格だった。1927年12月21日付書簡には、以下のように書かれている。

藤田先生とは相変わらず親しくはしてをりますが、私の心が次第に先生から遠ざかって行く様な気がします。それは二人の性格がひどく違っているからです。殊に近頃、先生の生活は乱棒な様な気さへします。日本で云えば鎌倉とでも云うべき平俗な海岸で、真赤な水着を着て、広告用の身の丈ほどの鉛筆を持ちあるいて写生したので、人気の中心になって巴里の新聞、雑誌に写真が出ました。そうかと思うと近頃は耳輪をはめました。オペラ（座）で柔道着を着て余興をしました。私が静かな事が好きなのを、そう引込んでいては駄目だとばかり、いためつけられるのには閉口です。最近には絵に対する意見の相違もありました。絵の中に詩があつては文学になるから純絵画とは云われん、と云うのです。私はどんなものでも大芸術に詩のないも

のではないと例まで引いて見せるのですが、詩は文学だと思い込んでいるので、先生には判らないのです。従って君の絵から、その詩情を早く捨てちまへと云はれます。これは困りものです。そのくせ、先生の初期の作品には心憎いほどの奥ゆかしい詩が溢れているのです⁹⁾。

ここでもまた、岡は藤田の「心憎いほどの奥ゆかしい詩が溢れている」「初期の作品」に触れている。1920年代後半の二人の作品を較べてみると、共通点を見出すのは難しい。岡は一貫して藤田の1910年代の作品を支持しているのである。藤田の、モンパルナスのエドガー・キネ広場を描いた《巴里風景》（fig.3、1918年、石橋財団ブリヂストン美術館）やかつてのパリ城壁跡を描いた《パリ風景》（fig.4、1918年、東京国立近代美術館）などの憂愁感あふれる風景画が、岡の心をとらえた。林洋子は、「岡は藤田の油絵らしくないマティエール、そしてビデオでストップモーションをかけたような、フリーズしたような物寂しい風景表現を受け継いでいる。これはまさに藤田作品の現物や画家本人に接した結果といえるだろう。」¹⁰⁾と指摘している。

岡が藤田の初期作品から受け取った影響は、第

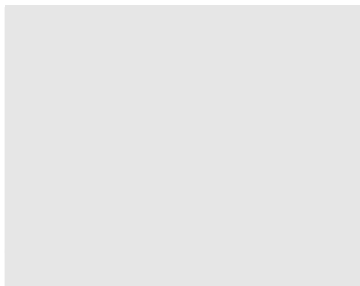


fig.2
岡鹿之助《滞船》1927年、所在不明

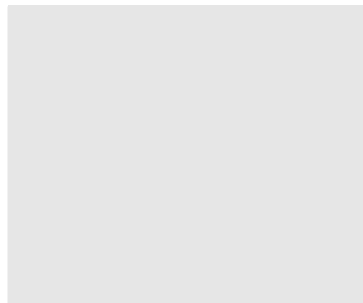


fig.3
藤田嗣治《巴里風景》1918年、石橋財団ブリヂストン美術館

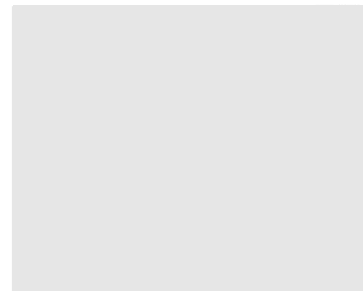


fig.4
藤田嗣治《パリ風景》1918年、東京国立近代美術館

一に、パリの周縁部に見出した画題である。岡もパリ郊外の風景を繰り返し描くことになる。第二に、19世紀以降のフランス美術の俯瞰図である。岡は、藤田は「私にとっては近代絵画に目を開いてくれた最大の恩人である」¹¹⁾と語っている。近代美術全体を見通す眼差しを学んでいるのである。フォーヴィスム、キュビスム、抽象絵画など20世紀美術の様々な潮流を教えられ、藤田が「乳白色の下地」に日本画の面相筆を用いて描く独自の表現を築き上げる過程を知った岡は、自己に忠実なスタイルを確立させることの重みと意義を学んだのである。

岡の風景画にあって、藤田のパリ風景にないものは、清澄な明るさだろう。これは、おそらくアンリ・ルソーの影響からもたらされている。次に、ルソーと岡の関わりをみてみよう。

3. アンリ・ルソーと岡鹿之助

岡は第二次大戦後、アンリ・ルソーについて数多くの著述を発表し、日本におけるルソー研究の足がかりをつくった。特に、優れた業績は、「ルソー構図の卓抜さに着目し、それを精密に分析している」¹²⁾点である。

岡はおそらく藤田を通じて、ルソーを知ったのだろう。藤田による1910年代後半のパリ風景の原点にルソーがあることは、すでに定説化している。渡仏後間もない藤田は、パブロ・ピカソのアトリエで初めてルソー作品を見せられて驚愕した。「絵画というものはかくも自由なものだ」と「目を開いた」と後年、記している。藤田のルソー体験は、繰り返し岡に語られたことだろう。パリの入市税関職員だったルソーは、1890年代以降、かつて自分の職場だったパリの周縁部を描いた。そうした画題を1917年から18年頃の藤田は手がけている。ルソーから藤田へ、藤田から岡へと、パリ周縁部の風景は受け継がれていく。

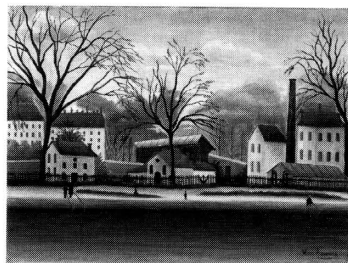


fig.5
アンリ・ルソー 《パリ郊外》1896年、個人蔵

今井敬子は、岡がルソーの画題と構図法に学んだことを、次のように指摘している。

岡鹿之助の作品には、ルソーの作品に学んだ画題が見られる。近代社会を支える物流の要としての川辺の風景がその代表例である。鉄橋やクレーンなど、幾何学的な線のモチーフを中心に置き、自然と人工物が混在する郊外の風景にアクセントをもたらす構図法について、岡はルソーの絵からヒントを得たと思われる¹³⁾。

遠藤望も以下のように述べる。

岡鹿之助もまた1910年代後半の藤田にそっくりの風景画を描くとともに、またルソー風の素朴な風景作品を試みた。《セヌ河畔》における樹木、また空に浮かぶ雲にルソーへの強い憧れが見て取れる。この時期、海老原と岡は、同じように海浜風景をそれぞれ素朴な画風で試みている¹⁴⁾。

この《セヌ河畔》は、ルソーに傾倒する岡の姿をもっとも彷彿とさせる作品である。ルソーもまた、セヌ川をたびたび描いた。試みに、画題の選び方と構図について、ルソーの《パリ郊外》(fig.5、1896年、個人蔵)、《エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望》(fig.6、1896-98年、ポーラ美術館)と比較してみよう。《パリ郊外》では、手前のセヌ川が画面に平行に流れ、中景の対岸には家々が立ち並んで短い垂直線を踊らせている。川に釣り糸を垂らしている人物がいる。3本の樹木が左右に枝を広げている。空を大きくとって、明るい雲をいくつも飛ばしている。家屋の輪郭を見ると、幾何学的遠近法に則っていないことが分かる。ルソーは遠近法を理解しなかったらしい。《エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望》では、セヌ川にかかる橋が太い水平線を形作っている。ル

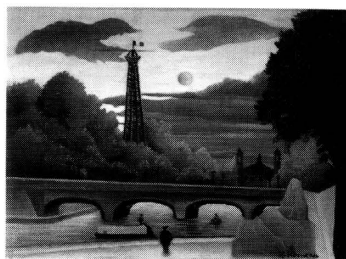


fig.6
アンリ・ルソー 《エッフェル塔とトロカデロ宮殿の眺望》
1896-98年、ポーラ美術館

ソーは橋を真横から臨む水平の構図を好んだ。橋脚が刻むリズムも心地よい。やはり釣り人がいる。鮮やかな夕映えが雲と川面を染めている。画題と構図において岡がルソーに拠っているのは明らかである。

また、筆触についてもルソーとの類似を見ることが出来る。岡は、ルソーの筆触について、次のように述べている。

特別な感情を筆法に託していない。むしろたどたどしい程の、誰にも親しみやすい筆触である。いささかの銜のない素朴な心持が、速度のゆるやかなタッチに実によくマッチしている。

画家の性格と筆触の遅速の度については、またの機会に譲るが、ルソーの筆触は短く、そしてふくらみを持つ。彼の素朴さはむきだしである¹⁵⁾。

「親しみやすい筆触」「速度のゆるやかなタッチ」「筆触は短く」は、そのまま岡の作品を語っているかのようだ。岡の点描のスタイルは2年間の苦闘の末に獲得したものだが、その源流の一つにルソーがあるといえるだろう。岡は自身の点描技法については、以下のように振り返っている。

美術学校時代に、私は師の岡田三郎助先生からいわれたものだ。「君は筆さばきが弱い」、あるいは「筆がたたない」と。(中略)印象派からフォーヴに下るまで、つねに画面を支配する大きな力として筆勢の見事さが重要視され、巨匠の資格に結びついていたのである。(中略)

学校を出てまもなく渡仏、パリに学ぶことになったのは1925年のことだが、はじめの二年間というものは、私自身にとってもっともふさわしい表現方法をただひたすらに模索して過ごした。その結果、得たのが点描による表現であった。筆勢をもったはなばなしい筆さばきの手法には^{ヴィルテュオシテ}練達の腕が必要だが、無機的な点を重ねたり繰り返す方法は、いってみれば子供にでもできることである。しかし私にはこれが自分のテクニクとして一番自然なばかりか最上の方法と考えられたのであった。私は点描による制作をこつこつとはじめていた¹⁶⁾。

「子供にでもできること」という表現がルソーを想起させる。パリで「日本のスーラ」とも評されたが、岡の点描は、視覚混合を徹底的に追求したスーラやポール・シニャックの表現とはまったく異なっている。カンヴァスの細かな凹凸を生か

して、短い筆触で少量の、油分の少ない絵具をこすりつけながらかすらせて描いていく方法である。この技法は、新印象主義よりもむしろルソーに近いといわねばならないだろう。

さらに、部分ごとに描き上げていったという岡の伝説的な描法も、ルソーに通じるものがある。アトリエのルソーを写した写真(fig.7)に関して、岡谷公二は次のように述べている。

《ブリュメルの肖像》と未完成のこの絵《詩人に靈感を受けるミューズ(カーネーション)》1909年、バーゼル美術館)を前にして、仕事着姿のルソーの立っている写真が残っている。ルソーの説明通り、背景は完全に仕上がっているのに、アポリネールとローランサンの部分は、輪郭線が素描されているだけで、カンヴァスは白いままだ。職人が煉瓦を一つ一つ積み上げていくような、あるいは「女が刺繍するとき」のように、至極でいねいに「一センチ四方ずつ描いてゆく」ルソーの方法がわかって興味深い。ドローネはこのような方法を「宮殿や修道院の壁に絵を描いた人たち、細部をただの一つもおろそかにしなかった中世の彩色挿絵画家たちの方法」(「わが友アンリ・ルソオ」)に比している¹⁷⁾。

他の画家にはほとんど見られない部分毎に描いていく技法について、岡はその原点を明らかにしてはくれない。2年間の模索の末に獲得したものだが、その参照元にルソーがあった可能性があるのではないだろうか。岡がルソーを語るとき構図の卓抜さに言及することが多いのだが、その茶色の下地にも触れており、ルソーの技法にも強い関心を持っていたのは確かである。こつこつと短く確信的なルソーの筆触も、岡は愛したに違いない。

岡は、「作品の内奥からにじみ出る醇朴さや愛情ぶかさにもまして、アンリ・ルソーの芸術の偉大さはセレニテ(清澄なる静謐)にあると私は思うのである」¹⁸⁾と述べる。構図、筆触に大きく拠っているのだが、岡はルソーを「セレニテ」のひ

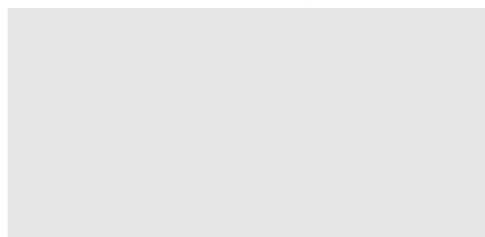


fig.7
アトリエのアンリ・ルソー

と言で言い切っている。この言葉は、岡の作品にもふさわしいものといってよいだろう。

4. 岡鹿之助のモンタージュによる作品づくり

ルソーの影響が色濃い《セーヌ河畔》の構図を、他の岡作品との関係で眺めてみよう。この作品は、《橋》(fig.8、1927年頃、個人蔵)と《水門》(fig.9、1926年、個人蔵)の合成である。

《橋》は、岡が身辺から離さず、1939(昭和14)年に帰朝した際に持ち帰った作品の中の一点である¹⁹⁾。これまで、制作年を「1927-28年頃」とされることが多かったが、筆者は1926年あるいは1927年の前半に描かれたと考えている。筆触が1927年以降のものより荒々しく、構図が1927年というサインのある《セーヌ河畔》の祖型となっているからだ。前述したT字型の流路はこの《橋》を出発点とすることは間違いない。

岡は、画面に強固な水平線を入れようと考えた。そこでセーヌ川を画面に走らせ、さらにそれに平行する橋を加えようとした。それを成り立たせるために、岡はT字型の流路を考え出した。しかしそのままでは、支流の流れを描写することにより、画面に奥行きが生じてしまう。画面をフラットに保つために、あるいは支流上の空間をさけるため

に、岡は支流を大きく左に湾曲させて視界から消してしまうことを思いついた。存在感のある垂直線を加えるために、背景に煙突が描かれた。こうして《橋》が誕生する。後述するように、このT字型流路は岡が繰り返し使用する造形アイテムとなった。

《水門》は、1926年11月のサロン・ドートンヌ出品作と推定されている。おかしみを湛えたクレーン車のアームが描かれている。対岸の家並みは平面的である。この作品はドランプル街のアトリエを飾り(fig.10)、また後年になってもそのヴァリエーションを繰り返した。同構図の作品に、《河岸》(1960年代、早稲田大学會津八一記念博物館)、《水門》(1968年頃、ポーラ美術館)がある。

《橋》を大きくふくらませて、点景に《水門》を組み込むことによって、岡は《セーヌ河畔》の構図を創り上げた。

岡の第一次滞欧時代14年間の画業の全貌は分かっていない。約100点が描かれたと筆者は推定しているが、その多くはフランス、スイス、ベルギーで売却され散逸していて、その全体像をむすぶのは難しい。岡が亡くなる1978(昭和53)年に美術出版社から刊行された『岡鹿之助画集』は、岡自身が編集に深く関与していると思われ、1925年から1977年までの作品が335点掲載されているの

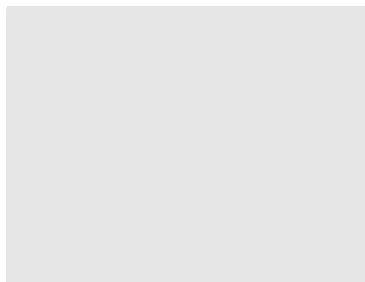


fig.8
岡鹿之助《橋》1927年頃、個人蔵

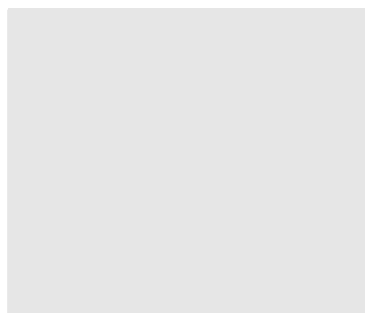


fig.9
岡鹿之助《水門》1926年、個人蔵

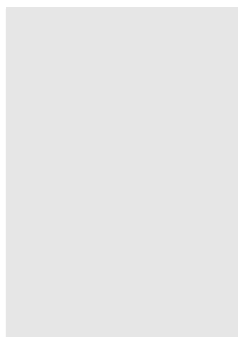


fig.10
パリ、ドランプル街のアトリエ

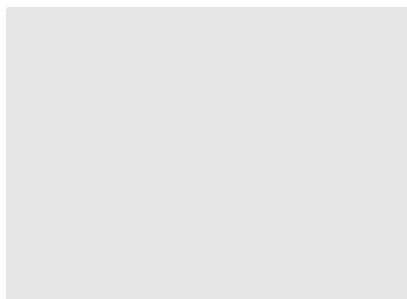


fig.11
岡鹿之助《橋》1948年、横浜美術館

だが、第一次滞欧期の作品は43点に過ぎない。今後、滞欧作が発見されていけば、この実り多い時期の様相が次第に分かってくるだろう。《セーヌ河畔》のヴァリエーションがあった可能性も高い。

第二次大戦後まもなくの1948（昭和23）年、岡は《橋》（fig.11、1948年、横浜美術館）を第25回春陽会展で発表する。ここでは、本流の流れは切り取られて見えないのだが、T字型流路が作品の構造を決定しているのは明らかである。橋は右にずらして、やや斜めになる。川べりには堅固な建物が建ち並んでいる。それらのファサードは人間の顔を思わせる趣がある。7本の電柱が力強い垂直線を形作る。《セーヌ河畔》にあった煙突は、物見櫓に変わっている。雲が柔らかく散らされた空には、やはり清澄な明さが漂う。

この《橋》に満足したからか、あるいは逆に物足りなさを感じたからなのか、翌1949年、岡は《橋》に窓枠をはめ込んだような《窓》（fig.12、1949年、愛知県美術館）を制作し、第26回春陽会展に出品する。窓枠を設定することで、画面下部に水平線を置くことができ、さらにもう一つのお気に入りのモチーフ、花を近景に置くことができた。窓と近景の花や植物は、《滞船》（fig.2）以来、やはり繰り返し試みる構図法である。近景の花に呼応

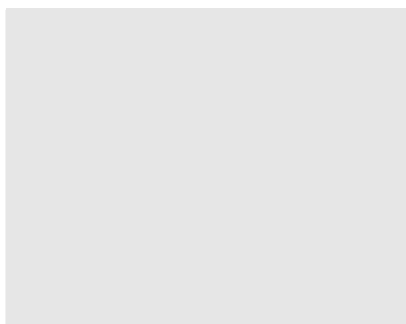


fig.12
岡鹿之助《窓》1949年、愛知県美術館

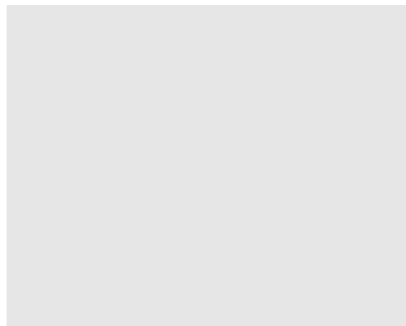


fig.13
岡鹿之助《波止場》1954年、個人蔵

するように画面はより明るくなり、電柱が少なくなって、煙突が復活する。この《窓》で、都市の河川風景の変奏はひとまず完了する。その後、いくつかの例外をのぞいて、河川風景は描かれなくなった。替わって、発電所、雪景、廃墟、群落などのモチーフが岡のアトリエに入り込んでくるのである。

一方、《セーヌ河畔》の右下に描かれたクレーン車と船の組み合わせは、1954（昭和29）年の《波止場》（fig.13、個人蔵）に堂々とした力感溢れる姿で再登場する。船上で立ち働く人間の姿が描き込まれ、複数のクレーンは作動中のようだ。それでいて騒がしさが無い。むしろ音のない世界を描いているようで、岡の特徴がよくあらわれている。

5. むすび

《セーヌ河畔》を軸に、岡に流れ込んできたものと、そこから岡が生みだした展開を見てきた。最後に岡鹿之助の絵画の特質をまとめておこう。

まず第一に、幾何学的遠近法と空気遠近法を無視することによって生じる平面的な不思議な空間である。岡が描く建物は多くの場合、正面観をとる。側面や建物の稜線をたどっても、消失点が一つに結ばれることはない。複数の視点がとられることも少なくない。全体が短いようなタッチで包まれることによって、この心地よい画面をつくっている。これはルソーに学んだものが大きいといえるだろう。

第二に、素朴で清澄な明さである。岡はそのときどきの苦悩を作品で弱々しく吐露することはない。むき出しの感情を控えた節度を備え、つねに明さを画面に充満させることを、厳しく自分に課している。自らを律する振る舞いは、佐賀藩士の血を引く武士道精神につながるかも知れない。

第三に、時間が止まったかのような無時間性、あるいは永遠性である。岡が描く風景は、わずかな例外を除けばどこにもない静謐な心象風景である。透明感溢れる詩情を漂わせながら、人間が生きる現実とは異なる絵画世界をつくりだしている。これは、前述したようにルソーや藤田のパリ周縁部の都市風景から引き継いだものである。

第四に、自己の作品から紡ぎ出す変奏、ヴァリエーションの豊富さである。岡は自作を様々なアプローチでリメイクしたが、リメイクするに従ってより豊かな構成、より厚みのある構成を作り出していった。それらは単なる再制作とは違う。創造することの新鮮さが失われないのである。

第五に、長い時間をかけて次々に化学変化を生

じさせていく運動体のような画業である。《セーヌ河畔》から横浜美術館所蔵の《橋》まで、21年間の時間が横たわっている。気に入った題材を引き出しの中にしまって長い時間熟成させた末に、もう一度取り出すのである。

こうした特質はどれもが、1927年の《セーヌ河畔》にすでに明瞭な姿であらわれている。渡仏後2年間、岡は自己に忠実であるべき様式を模索した。1926年夏に旅行先のトレガステルで手掛かりをつかみ、翌年春に《滞船》で「1927年様式」とでもいうべきものを完成させる。このとき岡は29歳であった。これを原点として、制作に邁進する生涯に、そのスタイルは大きく変化することはなかった。1927年様式のヴァリエーションを、岡は奏で続けたのである。

註

- 1) 岡鹿之助「藤田嗣治—ドランブル時代」『みづゑ』1955年1月号。再録：岡鹿之助（田辺徹編）『フランスへの献花』美術出版社、1982年10月、p.114.
- 2) 藤田嗣治、岡鹿之助、柳澤健「大戦前後のバリ画壇」『パリの昼と夜』世界の日本社、1948年、p.4.
- 3) 岡畏三郎編「岡鹿之助年譜」『岡鹿之助展』（カタログ）、石橋財団ブリヂストン美術館、2008年、p.159.
- 4) 「岡鹿之助第一次フランス滞在期書簡」『岡鹿之助展』（カタログ）、石橋財団ブリヂストン美術館、2008年、p.114.
- 5) 前掲註4)、p.115.
- 6) 前掲註4)、p.116.
- 7) 前掲註2)、p.5.
- 8) 前掲註4)、p.120.
- 9) 岡鹿之助「滞仏三年の歩み 一九二七年十二月二十一日付父宛書簡から」『ひたすら造形のことで』中央公論美術出版、1998年、pp.16-17.
- 10) 林 洋子『藤田嗣治 作品をひらく』名古屋大学出版会、2008年、p.73.
- 11) 岡鹿之助「藤田嗣治さん追悼」『日本経済新聞』1968年2月1日。再録：岡鹿之助『フランスの画家たち』中央公論美術出版、1974年、p.120.
- 12) 岡谷公二『アンリ・ルソー 楽園の謎』平凡社ライブラリー、2006年、p.302
- 13) 今井敬子「岡鹿之助 日本とルソー」『アンリ・ルソー：パリの空の下でルソーとその仲間たち』（展覧会カタログ）、公益財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、2010年、p.121.
- 14) 遠藤望「ルソーの1世紀—アンリ・ルソーと日本の近・現代美術」『ルソーの見た夢、ルソーに見る夢』（展覧会カタログ）、東京新聞ほか、2006年、p.18
- 15) 岡鹿之助「ルソーの構図」『みづゑ』1948年8月号。

再録：岡鹿之助『フランスの画家たち』中央公論美術出版、1974年、p.139.

- 16) 岡鹿之助「ヴィルテュオジテ（巨匠らしさ）の否定から」『世界の巨匠シリーズ・スーラ』（月報）、1968年。再録：岡鹿之助（田辺徹編）『フランスへの献花』美術出版社、1982年、pp.151-152.
- 17) 前掲註12)、pp.253-254.
- 18) 岡鹿之助「口絵解説 アンリ・ルソー作《森の中の散歩》」『美術手帖』1949年4月号、p.57。再録：前掲『フランスへの献花』p.209.
- 19) 岡鹿之助の令弟・故岡畏三郎氏のご教示による。

アルフレッド・シスレー 《森へ行く女たち》

賀川恭子

アルフレッド・シスレー（1839-1899）の《森へ行く女たち》（fig.1）は早い時期に日本にもたらされた。最初に《森へ行く女たち》を所有したのは、塩原又策（1877-1955）である¹⁾。塩原は三共株式会社（現、第一三共株式会社）の創業者で、美術愛好家として日仏芸術社を支援していた。1924（大正13）年に黒田鵬心（1885-1967）がフランス人画家エルマン・デルスニス（Hermann Delsonitz、生没年不詳）と一緒に日仏芸術社を設立したとき、塩原の好意により、事務所を日本橋室町にあった三共ビル5階に置くことになった。その一年後には日仏芸術社の事務所を同ビルの6階に移し、同階に日仏ギャラリーを開いた。そこでデルスニスは多くの作品を販売しており、このシスレーの作品もその一点として日本にもたらされた。日仏ギャラリーで展示されていたこの作品を塩原が購入したのは、1925（大正14）年のこと²⁾。塩原は西洋絵画、骨董ともに多数所有していたと考えられているが、そのコレクションは戦後しばらくして会社の経営状況が悪化したことにもない、散逸してしまった。このシスレー作品は石橋正二郎によって購入され、1952年に開館したブリヂストン美術館で公開された。

シスレーが印象派の画家として活動する以前の作品が日本にもたらされていたことは、フランス人研究者にとっても驚きだったに違いない。そのことは、1958年に石橋コレクションを紹介したバルナール・ドリヴァルの発言からも垣間見られる。

「[ブリヂストン美術館]の作品のおかげで、我々はよくこの[印象派の]運動の精神とその発展の経緯とを理解出来るのであった。印象派とそれに

先立つ写実主義の係累関係は、二つの優れた作品、即ち、シスレーの『村の道』と、ピサロの『ブーヅヴァルのセヌ河』によって、はっきり知ることが出来る。前者は印象派がミレーやクールベに負うところ甚だ多きを示し、後者はコロドーの影響の深さを表す。大体1870年以前の印象派の作品は珍しいものののだが、この美術館に於いて、この二枚の、しかも優秀な作品を見出したことは、まことに仕合わせなことと云わなくてはならない³⁾。

フォンテーヌブローの森

フォンテーヌブローの森のガイドブックが初めて刊行されたのは1820年。その著者シャルル・レマールは、本を販売するために1794年にパリからフォンテーヌブローにやってきて、1813年には宮殿の司書職に就いていた。このガイドブックは森のピトレスクな魅力を伝えるものだったが、中心は宮殿の歴史や建築の説明にあった。つまりこのガイドブックでは宮殿が最大の観光スポットとされていた。それから十数年後、森そのものに注目するガイドブックが刊行される。

1837年にエティエンヌ・ジャンナンによるガイドブック『フォンテーヌブローの森での四つの散歩道』が刊行され、森のすばらしさが述べられた。これより前に刊行されていたガイドブックでは森のなかの宮殿やその庭園に興味向けられていたが、ここで主役となっているのは森そのものである。このガイドブックでは、在野の詩人アレクシス・デュランの詩にインスピレーションを受けつつ、フォンテーヌブローの森の歴史やピトレスクな場所について言及している。ジャンナンによると、人の手の加わっていないフォンテーヌブローの森に吹く風、滝の音、小鳥のさえずり、カラスの鳴き声、羊飼いの楽しい歌声を楽しむことができるという。つまり、都市から訪れた人びとは、森のなかで心の安らぎを得ることができるというわけである。

このガイドブックから影響を受けた森の番人クロード＝フランソワ・ドゥヌクールは、1839年に、旅行者や芸術家のために、お薦めの景観と名所の記された森の地図を刊行した。その地図は好評のために次々と版を重ね、最終的には第18版まで刊行された。版を重ねるにつれ、地図には次々と新たな情報が加わった。1844年版の地図にはバルビゾンやシャイイ、マルロットなどの村もきちんと



fig.1
アルフレッド・シスレー 《森へ行く女たち》
1866年、石橋財団ブリヂストン美術館

記されるようになり、1856年版の地図には鉄道の線路も通っている。フォンテーヌブローの森の周囲にはいくつもの村がある。北にはブロール、南にはマルロット、ルクローズ、モンティニー、西にはシャイイ、バルビゾンなどがあり、パリ市民は、週末になると、フォンテーヌブローの森に近いそれらの村に滞在するようになった。

パリに住む画家たちの間でも、すでに19世紀の前半から、フォンテーヌブローの森の美しさが評判になっていた。この森で制作をしていたバルビゾン派の画家たちは、1860年代から1870年代にかけて、評価を確立しつつあった。パリでバルビゾン派の作品を見て感銘を受けた若い画家たちにとって、フォンテーヌブローの森は主要なモチーフとなり、バルビゾン村は聖地のような存在になった。

1860年代以降になると、シスレー、ピエール＝オーギュスト・ルノワール、クロード・モネ、フレデリック・バジールなど、のちに印象派と呼ばれるようになる若い画家たちが、バルビゾンやマルロットなどフォンテーヌブローの森周辺へ頻繁に足を運ぶようになった。この時期の彼らの風景画には、バルビゾン派からの影響が色濃くあらわれている。彼らが好んで描いたのは、森やその周囲の村だった。固有色を用いて描かれた木々は、厚塗りに仕上げられている。それぞれのモチーフは明確な輪郭線をもって描かれ、安定した構図の中に配置されている。

彼らのなかでも最初にフォンテーヌブローの森を訪れたのは、シスレーだと思われる。イギリス人の両親のもとに生まれたシスレーは、実業家としての勉強をするため、18歳のときにロンドンに送られた。ロンドンでは本来の学業よりも、ターナーやカスティングなどのイギリスの風景画に興味を持つことになった。そして1861年にパリに戻ると、すぐにフォンテーヌブローの森を訪れた。バルビゾンのガンヌの宿屋の宿泊帳には「シスレー、22歳」と記されている。この時期のバルビゾンには、ミレーヤルソーによりすでに芸術家のコロニーができており、シスレーはコロニーの作品に深く感銘を受けていた。1862年、スイス人画家シャルル・グレイールの主宰する画塾に入ったシスレーは、そこでモネ、ルノワール、バジールと知り合い、親交を深めた。彼らは、パリ郊外のフォンテーヌブローの森を訪れ、森の周囲に位置する小さな村シャイイ、バルビゾン、マルロットの安価な宿に泊まり、戸外での風景画制作に取り組んだ。同世代の仲間たちとともに制作することで、新たな方向性が生み出された。フォンテーヌブローの森のすばらしさを仲間たちに伝えたのは、おそら

くシスレーだったのだろう。1862年もしくは1863年には、シスレーとルノワールはフォンテーヌブローの森を散策し、風景画の習作を描いた。

森の生活

《森へ行く女たち》に描かれているのは、フォンテーヌブローの森の南端、ロワン川沿いの小さな村マルロットである⁴⁾。この村の魅力について、ドゥヌクール⁵⁾の1855年の案内書には次のように書いてある。

「マルロットという小集落は、バルビゾンと同様にフォンテーヌブローの森のはずれに隣接しているが、さらに絵になるような場所に位置し、アプルモン溪谷とブレオー低地に優るとも劣らぬ素晴らしい景観の隣にある。ここもまた画家たちのコロニー、毎年いっそう増大するコロニーになっている。著名なお客がそこに滞在のしるしを残したときに、すなわちバルビゾンにおけるように、彼らによってその仮宿、宿屋の名が上がったときに、われわれはバルビゾンについて語ったようにマルロットについて語ろう。しかし、画家たちの宿屋としては、マルロットはバルビゾンの高みに達していない。マルロットにはガンヌの家がないのだ。さしあたりは、親愛なる読者よ、サッコーの家とアントニーの家をお教えしよう。ふたつの内のより良い方を選んでいただきたい。私はと言えば、この点に関しては不完全な情報しかないので、どちらが良いかは知らない」。

マルロットにはサッコーの宿屋とアントニーの宿屋があったが、芸術家たちを魅了したのは後者だった。1850年頃に小説家アンリ・ミュルジェがマルロットを訪れた。ミュルジェは、パリのカルティエ・ラタンの貧しい芸術家たちの友情と恋愛をテーマにした小説『ボエームの情景』をちよとど発表したばかりだった（なおこの小説はブッチーニの歌劇『ラ・ボエーム』の原作である）。ミュルジェが滞在していた1850年代、マルロットには画家のジュール・ブルトンや文学者のゴンクール兄弟も訪れていた。安価な宿屋であることが若い芸術家たちを惹きつける要因だった。アントニー親父の酒場兼宿屋は、のちに夫人であるアントニー小母さんが経営することになる。シスレーもこの宿屋に宿泊したことがある。

1866年2月、シスレーは、ルノワールとジュール・ル・クールとともにフォンテーヌブローの森で制作した。ル・クールは1865年にマルロットに家を構えており、このとき3人はル・クールの家に滞在したようである⁵⁾。

フォンテーヌブローの森で制作した画家たちは風景画を手がけることも多かったが、シスレーの《森へ行く女たち》には村の生活の一場面が描かれている。画面中央に描かれた女性たちは、これから森に薪を拾いに行くところと考えられる。

この当時、フォンテーヌブローの森は国王の領地だった。12世紀のフィリップ二世がバ・ブレオーの森を手に入れて自らの狩猟場として、16世紀のフランソワ一世がフォンテーヌブローの森のなかに宮殿を整備して以降、19世紀のナポレオン三世までの歴代の国王が宮殿とその周囲の森を管理しつづけた。フォンテーヌブローの森は王家の管理下に置かれていたため、森のなかに許可なく立ち入り狩猟する者は密猟者として罰せられる運命にあった。密猟者を取り締まるため、森の番人は、肩からラッパをかけ、森のなかの見まわりをしていた。基本的に森は禁猟地だった。森の周囲に住む人びとであっても、森のなかで狩猟したり、森の木を切り倒したり、許可なく森を馬車で横切ったりしてはならなかった。農民たちが利用することが可能だったのは、村落共同体の共同地となっている一帯のみだった。

シャイイ=アン=ビエールに住む村人たちにフォンテーヌブローの森の利用が許可されたのは、1665年のことだった。この年に制定された法律によって、農民たちは、国王が用いるのとは異なる入口から森に入り、そこで家畜を放牧し、薪を拾うことが可能になった。とはいっても、森の完全に自由な利用が認められたわけではない。森での羊と山羊の放牧、および、4月なかばから6月なかばまでの放牧は禁止されていた。森のなかで拾って良いのは、枯れて乾燥している小枝のみで、6月なかばから翌年4月なかばにかけての時期に限られていた。もちろんのこと、枝を切るために道具を用いてもいけなかった。

いささか逆説的ではあるが、禁止されていたということは、常日頃このようなことが行われていたことを意味しているのだろう。森の周囲に住む人びとにとって、森は彼らの生活に不可欠な存在だった。そしてそのような農村の習慣をシスレーは描きとめたのである。

1866年のサロン

1860年代のシスレーは、同時代の若い画家たちと同じように、サロン（官展）への入選を目指しており、1866年のサロンに2点の絵画を出品し、初入選を果たした。サロンのカタログにはシャルル・グレルの弟子として登録、住所はパリのモ

ンセ通り15番地になっている（ここは両親が1866年から67年まで暮らしていた住所）。カタログ番号1785番に「森へ行く女たち、風景（Femmes allant au bois; paysage）」、1786番に「マルロットの道、フォンテーヌブロー近郊（Une rue de Marlotte; environs de Fontainebleau）」が記載されている。前者はブリヂストン美術館が所蔵している《森へ行く女たち》であり、後者はアメリカのオルブライト=ノックス美術館が所蔵している《マルロットの村の道》（fig.2、1866年）である。

19世紀なかばはフランスの美術制度にとって大きな変化の時期である。1863年には落選者展が開催され、エドゥアール・マネの《オランピア》が物議を醸した。1866年のサロンには、クールベとマネだけではなく、のちに「印象派」と呼ばれることになる若い画家たちが作品を出品していた⁶⁾。クールベは《女とオウム》（メトロポリタン美術館）と《プレジール=フォンテーヌの小川にある鹿の隠れ場》（オルセー美術館）を、マネは《笛吹きの少年》（オルセー美術館）と《悲劇役者（ハムレットに扮するルヴィエール）》（ワシントン、ナショナル・ギャラリー）を出品した。のちに「印象派」と呼ばれることになる若い画家たちも1866年のサロンへの挑戦をしていた。シスレーは《森へ行く女たち》と《マルロットの村の道》、ポール・セザンヌは《アントニー・ヴァラブレークの肖像》（ワシントン、ナショナル・ギャラリー）を含む作品2点、ルノワールは人物画と風景画（いずれも現存せず）、ベルト・モリゾは《ノルマンディーの蕁茸きの小屋》（個人蔵）と《ベルモンディエール》（現存せず）、モネは《フォンテーヌブローの森》と《緑衣のカミュー》（プレーメン、クンストハレ）、エドガー・ドガは《障害競馬一落馬した騎手》、バジールは魚の静物画と《ピアノを弾く少女》（現存せず）をサロンの審査に送った。

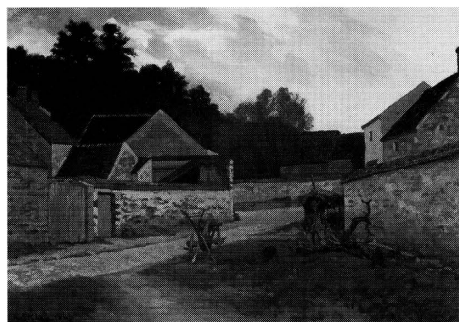


fig.2
アルフレッド・シスレー 《マルロットの村の道》
1866年、オルブライト=ノックス美術館

この年のサロンで成功を収めたのは、『女とオウム』と『ブゼール=フォンテーヌの小川にある鹿の隠れ場』の2点が入選したクールベだった。反対にマネとセザンヌは落選に終わった。バジールとルノワールは大作が落選した代わりに小品は入選したものの、このことに不満を抱いた。モネ、モリゾ、ドガ、シスレーは入選を果たしたが、彼らの中で話題となったのはモネの『緑衣のカミーユ』だった。

若い画家たちのほとんどは、1866年以前にすでにサロンでの入選を果たしており、シスレーのサロンでのデビューは遅かったと言える。サロンへの入選を望んだシスレーが、バルビゾン派の作品を連想させる2作品を出品したことには、いくつかの理由が挙げられるだろう。

ひとつには、シスレー自身がバルビゾン派の画家たちを敬愛していたことがある。1903年にベルネーム=ジュヌ画廊での個展への序文を寄せた批評家アドルフ・タヴェルニエは、シスレーの1892年の手紙を紹介している。「作品にはいつもお気に入りの箇所がある。それがコローやヨンキントの魅力のひとつになっている」「私の好きな画家は誰だろう？ 同時代の画家に限定するならば、ドラクロワ、コロー、ミレー、ルソー、クールベといった巨匠たちになる。彼らはみな自然を愛し、自然を深く感じていた」⁷⁾といった発言から、シスレーがバルビゾン派の画家たちを好んでいたことが分かる。バルビゾン派の画家たちが1860年代以降、評価を確立するようになったことも見過ごすわけにはいかない。

もうひとつには、この時期、バルビゾン派の画家たちの評価が高まっていたことがある。すでに述べた通り、バルビゾン派の画家たちは、1860年代から1870年代にかけて、評価を確立しつつあった。たとえばテオドール・ルソーは1867年の万国博覧会の美術展の審査委員長に任命されていたし、ジャン=フランソワ・ミレーはバンテオンの大壁画装飾を国から依頼されていた。同じ1866年のサロンにモネもフォンテーヌブローの森を描いた作品を出品している。若手の画家たちにとってバルビゾン派の作品は「手本」のひとつになっていたであろう。

バルビゾン派からの影響を強く感じさせるシスレーの『森へ行く女たち』は、1926（大正15）年に日仏芸術社主催の「第五回仏蘭西現代美術展」に「村の道（La route du village）」というタイトルで出品された。同年に刊行された『日本美術大年鑑』には、洋画家の前田寛治による展覧会評が掲載された。

「シスレーの『村の道』は外光派時代以前のミ

レに似た時代で年代を繰ると二十六七歳の頃のものである。一八六六年作、黒い屋根の街と五六の小点影人物とで出来ている」⁸⁾。

前田は、シスレーの作品にミレーからの影響を感じ取った。興味深いことに、この展覧会にはジャン=フランソワ・ミレーの『牛』と題されたパステル画が出品されていた。実際にミレーの作品が展示されていたことも、シスレーへの影響関係が指摘されるようになった理由のひとつだろう。このミレーのパステル画は、現在ブリヂストン美術館が所蔵しているミレーの油彩画『乳しほりの女』（fig.3、1854-60年）と同主題で、背景のみが異なっている（パステル画は現在所在不明）。明治以降日本に紹介されたミレーは、敬虔な農民の姿を描いたことや、ロマン・ロランによる伝記での「額に汗して働く」画家のイメージが流布したことにより、啓蒙的な画家かつ作品として受け入れていた⁹⁾。そしてこのことは、日本でシスレーの初期作品が受け入れられる下地をつくったと考えられる。



fig.3
ジャン=フランソワ・ミレー『乳しほりの女』1854-60年、
石橋財団ブリヂストン美術館

註

- 1) 塩原又策については、以下の文献が詳しい。『西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち：1890-1940』（展覧会図録）石橋財団ブリヂストン美術館、1997年。
- 2) 黒田鵬心『巴里の思出』（鵬心選書第九巻）誠文堂新光社、1956年、pp.220-221。
- 3) Bernal Dorival, "Un Musée Japonaise d' Art Française," *Connaissance des arts*, no.81, novembre 1958, pp.58-63. 日本語訳は『ブリヂストン美術館館報』7号、1959（昭和34）年刊行を参照。
- 4) マルロットについては、以下の文献を参照した。三浦篤「オーギュスト・ルノワール作『アントニ

-
- ー小母さんの宿屋』とボヘミアン芸術家像」、『超域文化科学紀要』第6号、2001年、pp.4-37.
- 5) ジュール・ル・クールについては、以下の文献を参照。*Charles Le Cœur (1830-1906), architecte et premier amateur de Renoir*, Les Dossiers du musée d'Orsay, no. 61, Paris, 1996.
- 6) 1886年のサロンについては、Jane May Roos, *Early Impressionism and the French State (1866-1874)*, Cambridge University Press, 1996, Chapter 4: The Cat's Meowが詳しい。この章で印象派の画家たちの出品について述べているものの、シスレーについてのみ言及していない。
- 7) Richard Shone, *Sisley*, London, 1992, Appendix C, pp.217-220. アドルフ・タヴェルニエによる序文全文が掲載されている。
- 8) 前田寛治「世評一班」『日本美術大年鑑』1926（大正15）年。
- 9) このことについては、以下の拙論で詳しく論じた。「日本人にとってのミレー―道徳あるいは啓蒙として」『美術フォーラム21』vol.23(2011年)pp.52-55.

美術館案内 Guide of the Museums

ブリヂストン美術館

Bridgestone Museum of Art

所在地 東京都中央区京橋1-10-1 (〒104-0031)
TEL (03) 3563-0241
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時－午後8時(火－土)
午前10時－午後6時(日・祝)
休館 毎月曜日 年末年始
* 東日本大震災の影響のため、3月23日
より午前10時－午後6時とした。
入場料 個人：
一般 800円 シニア(65歳以上) 600円
大・高生 500円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 600円 シニア(65歳以上) 500円
大・高生 400円 中学生以下無料なお、
特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku,
Tokyo104-0031, Japan
Phone: +81 (3) 3563-0241
Hours 10:00 to 20:00 (Tuesday-Saturday) 10:00 to
18:00 (Sundays, national holidays)
* After Higashi Nihon earthquake (March
23) 10:00 to 18:00
Closed on Mondays, New Year holidays
Admission Individual:
Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;
Students ¥500; Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;
Students ¥400; Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

石橋美術館

Ishibashi Museum of Art

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒839-0862)
TEL (0942) 39-1131
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時－午後5時
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人：
一般 500円 シニア(65歳以上) 300円
大・高生 300円 中学生以下無料
団体(15名以上)：
一般 400円 シニア(65歳以上) 200円
大・高生 200円 中学生以下無料
なお、特別展の場合は変更することが
ある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,
Fukuoka 839-0862, Japan
Phone +81 (942) 39-1131
Hours 10:00 to 17:00
Closed on Mondays, New year holidays
Admission Individual:
Adults ¥500; Seniors 65 or over ¥300;
Students ¥300, Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥400; Seniors 65 or over ¥200;
Students ¥200, Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

(2011 年 12 月現在)

石橋財団職員

常務理事

西嶋 大二

事務局

事務局長

深堀 幸男

部長

竹中 正

総務課 総務課長

森田麻利子

総務課課長

菊地 浩

鈴木 弥生

ブリヂストン美術館

館長

島田 紀夫

学芸課 学芸課長

新畑 泰秀

総務課 総務課長

小藪 泰生

貝塚 健

金森 大輔

中村 節子

久野 朝子

賀川 恭子

小原田鶴子

田所 夏子

塚田美香子

石川 久子

石橋美術館

館長

島田 紀夫

学芸課 学芸課長

森山 秀子

総務課 総務課長

後藤 純子

平間 理香

原 朋子

伊藤絵里子

平島たか子

2011 年 12 月 31 日現在

